御算用日記 文庫書下ろし 長編時代小説

石に匪ず

六道慧



光文社

光文社文庫

文庫書下ろし／長編時代小説

石に匪ず

御算用日記

六道慧

光文社

光文社文庫

文庫書下ろし／長編時代小説

石に匪ず
御算用日記

六道 慧



光 文 社

この作品は光文社文庫のために書下ろされました。

目次

序　章　9
第一章　時雨月（しぐれづき）　14
第二章　御附家老（おつけがろう）　65
第三章　手暗師（てぐらし）　119
第四章　謀（はかりごと）の音　172
第五章　恵比寿講　220
第六章　江戸の中の江戸　271
第七章　羅針盤　328
あとがき　380

登場人物紹介

生田数之進　いくたかずのしん
二十六歳。加賀藩に仕えていたが、姉たちが作った三百五両の借金を返すため幕府御算用者に。諸藩に勘定方として潜入し、不審な点を探る。数々の難問を「千両智恵」で解決してきた。

早乙女一角　さおとめいっかく
二十五歳。小姓方として数之進と行動をともにする。武芸十八般を自認する手練なだけでなく、容姿端麗で、料理もこなす。数之進とは「刎頸の友」であり、護り役も務める。

生田冨美　いくたふみ
数之進の二番目の姉。〈着足りぬ姫〉と称されるほどの着道楽だが、器用で裁縫上手。

生田三紗　いくたみさ
数之進の三番目の姉。こちらは食道楽の〈食足りぬ姫〉。その才を総菜作りに生かしている。

生田伊智　いくたいち
故郷金沢で婿を取り生田家を継いだ長女。江戸で暮らす三人のよき母親役でもある。

鳥海左門　とりうみさもん
数之進の上役・両目付（りょうめつけ）。冨美とは相愛の仲。
村上本兵衛　むらかみもくべえ
数之進の上司にあたる徒目付（かちめつけ）組頭。三紗に想いを寄せている。

御算用日記

石に匪(あら)ず

序章

「買えます」
鯨商人は言った。
「この世に在るものは、金で買うことができまする。お望みとあらば、さよう、幕府を手に入れてみせましょう」
その言葉が今も耳にこびりついている。
江戸家老を務める男は、母屋の広間から外を眺めていた。開け放たれた戸の向こうには、大名家の下屋敷とは思えない光景が広がっている。
屋敷が建てられている場所は、高く盛り土をしているため、城からの眺めのように思えた。母屋に連なる西と東の離れは、それぞれ二の丸、三の丸と名付けられていたが、公儀に対してはいささか不遜なことかもしれない。
そして、屋敷を囲む石垣の向こうに続くのは、数多くの商家だった。縦横に走る川や堀が、

移動手段として用いられている。舟を利用しないと不便なほどに、広かった。商家の先に連なる緑豊かな田園地帯では桜が満開なのだろう。景色の一部がけぶるように、桜色に染まっていた。

「たいしたものではないか。わずか十年ぞ」

思わず嘆息まじりの声を洩らした。

「前殿もご満足であろう。ようやったと、お喜びあそばされるに相違ない」

「与えられるのは、言葉のみ。あとは我関せずをつらぬくおつもりか。いかにもおやりになりそうなことじゃ。感激のあまり、涙が止まらぬわ」

老家老が毒を吐いた。老人は元国家老、鯨商人を糾弾すべく、ひと月ほど前に領地から駆けつけたのだが、十日前の騒動以来、態度を一変させている。

「かたがたは、いかがじゃ。御家老と同じお考えか」

と、居並ぶ重臣を見まわした。江戸家老や老人を含めて、総勢六人が揃っている。ひとりが躊躇いがちに口を開いた。

「先手を打たれてしもうたな」

「さよう」

もうひとりが受ける。

「当家の羅針盤が生き残るか、はたまた主家の羅針盤か。穏便に事をおさめようとしたのが、間違いだったのやもしれぬ」

「羅針盤か」

老人はうなだれた。

「それに気づかなんだは、愚かの極みよ。いずれ殿を裏切るに違いない、その機を狙うておるのでは、と、思うているうちに十年じゃ。考えてみれば、途方もない額の借財を、たった五年で返したときに、考えを改めるべきであったわ」

「なれど、借財を返した件と、此度の事柄は、別に考えるのが宜しかろうと存ずる。われらは今のこの暮らしを、守るべきではないかと考えまするが、いかがでござろうか」

気心が知れた顔ぶれに、つい本音が出た。

「臆したか」

老人が忌々しげに睨みつける。

「これで家老の座は安泰と、安堵しているのであろう。正直な男じゃ。顔にはっきり出ておるわい」

辛辣な言葉を、他の重臣が止めた。

「言い争うために集まったのではござらぬ」

「わかっておる、わかっておるが」
やり場のない怒りを宥めるように、老人は膝の上で拳を握りしめる。
「わしは己が許せぬのよ。なぜ、なのか。なにゆえ、と」
膝の拳が震え出した。ぽたり、と、そこに涙が落ちた。
「ひとりでもやる」
意を決した呟きに、重臣たちが続いた。
「水くさいことを申されるな」
「死に花を咲かせようではないか」
と言いながら、ちらちらと家老に目を投げている。ひとりだけ逃げるつもりか、なかったことにして生きられるのか。口にはしないが、視線で告げている。
老い先短い爺めがと、悪態をつきそうになったが呑みこんだ。
「承知した」
不承不承、頷いた。
「ただし、主家の羅針盤を仕留める役は、お引き受けいたしかねる。それでも宜しければ、お力添えいたそう」
「邪魔はせぬな」

老人の問いかけに、短く答えた。

「刀にかけてお誓い申す」

「かような誓いが信じられるか。侍のなまくら刀は、いまや質草にしかならぬ。よし、あの石灯籠に誓おうではないか」

「石灯籠？」

「いかにも『石の誓い』よ、石に誓うのじゃ。忘れたわけではあるまい。鯨商人が言うたあの言葉を」

大儀そうに立ちあがって、老人は広間から前庭に降りる。

文化八年（一八一一）三月。

下屋敷の石灯籠に、六人の重臣の名が記された。

第一章　時雨月

一

時雨月である。
文化八年十月。
時雨月とは裏腹の晴天の下、本所相生町の一画は、異様な興奮に包まれていた。茶店で催されている団子の大食い大会は、動くのがままならないほどの大盛況になっている。近隣の店の二階席はもちろんのこと、道路も見物客が埋め尽くしていた。
生田数之進は盟友の早乙女一角とともに、見世の奥から見守っている。
「鬼気迫る形相じゃ」
友の囁き声に、数之進は無言で頷き返した。六人の参加者のひとりが、三女の三紗なのである。年は、数之進より一歳年上の二十七、付き添い役として二女の冨美も参加している

のだが、妹の迫力に押されているのだろう。ぽかんと口を開けている。

「団子は一皿、三串ゆえ、これを食べ終えれば」

一角の呟きを即座に受ける。

「百五十串だ」

「よう入るものよ。あの細い身体のどこに団子が収まるのか。尻がそのまま厠に繋がっておるのではなかろうな」

いささか尾籠な言葉になったかもしれない。斜め後ろに控えていた〈北川〉の隠居、伊兵衛に空咳で窘められた。〈北川〉は畳表や蚊帳を商う大店で、室町二丁目に本店を構えている。伊兵衛は一角の実父なのだが、数之進とは持ちつ持たれつの、いい関わりが成り立っていた。姉たちにとっては、貴重な金主であり、世話役でもある。

「生田三紗様、五十皿目でございます」

見世の看板娘の声が終わりの合図となった。他の五人は、かなり前に食べられなくなっている。みな腹をさすりながら、げんなりした様子で食べ続ける三紗を見やっていたのだった。

「三紗様の勝ちでございます」

「おめでとうございます」

奉公人が太鼓や鉦を叩いても、三紗は食べることをやめない。

「お代わりをお願いいたします」
五十一皿目をすごい勢いで食べるや、さらに声をあげた。
「もっとお団子をください」
「三紗、そなたの勝ちですよ。もう食べなくてもよいのですよ」
冨美が声をかけても耳を貸そうとはしない。
「早く次のお団子を、まだまだ食べられます、お腹が空いているのです！」
金切り声を張りあげた。運ばれて来た五十二皿目を目にも止まらぬ速さで口に押しこむ。団子は黄粉、小豆、醤油の三種類から好きなものを選べるのだが、三紗は醤油団子だけしか口にしていなかった。
「次をお願いいたします」
目が据わっているのを見て、冨美が狼狽えた。
「も、もうやめなされ」
大年増の二女は、癇症の持ち主、気持ちが昂ぶりすぎると失神しかねない。数之進と小声で呼ばれて、一角ともども進み出る。
「姉様」
「いや、三紗殿のひとり勝ち、見事でござった。これで七つの大食い大会を制覇したことに

なりまするな。生田三紗の名を知らぬ者は江戸にはおりますまい」

一角の称賛には、ちらりと冷ややかな目をくれた。

「まだまだ足りませぬ。お代わりです、次のお皿をお持ちください。あとはどれだけ食べられるか、己との戦いです」

その腹は身籠もっているかのように、ぽっこりと膨らんでいる。帯はとうの昔にゆるめられて、しどけなく解けていた。介添え役がいなければ、もっとあられもない姿になっていたかもしれない。

「では、見世の奥を借りて、その孤独な戦いを続けられるのが宜しかろうと存じます。いったん終わらせぬことには、他の方々が難儀をいたしますゆえ」

数之進は言い、一角に目顔で合図する。それっという掛け声と同時に、二人で両側から三紗を抱えあげた。天秤棒を担ぐ要領だったが、あまりの重さに数之進は一瞬、よろめきそうになる。

「う」

なんとか踏ん張ってこらえた。

「お団子、お団子をもっとください、記録を伸ばします。まだまだまだ食べられます。早うお団子を」

奥に運ばれつつも、三紗は悲鳴のような声をあげている。
「お団子をください！」
冨美が草履を脱がせ、数之進と一角が奥座敷に続く廊下に運ぶ。五十二皿もの団子を食した女子は、まさに身体全体が団子と化していた。生半可な重さではない。額に冷や汗を滲ませて、数之進は団子女を奥座敷の一室に運び入れた。
「お団子」
譫言のように繰り返す三紗のもとに、茶店の主が団子を運んでくる。
「ここからは仰せのとおり、己との戦いにございます。いったい、人はどれだけの団子を食べられるのか、てまえも拝見いたしたく思います」
「ええい、よけいなことをするでない。もう充分じゃ。あの腹を見ろ。今にも子が産まれそうではないか」
と一角が話す間に、三紗は二皿、平らげていた。もはや、為す術なし。数之進は汗を拭いながら廊下に出た。
「われらでは止められぬ」
「うむ。『食足りぬ姫』を止められるのは」
友は三紗を慮って、その名を口にするのを避けた。着道楽の冨美は『着足りぬ姫』、食

い道楽の三紗は『食足りぬ姫』と、異名をつけるのが上手い一角のお陰で美しく表現されているが、姉妹合わせて作った借財がなんと三百と五両。加賀藩の勘定方にご奉公していた数之進は、その借財を幕府に肩代わりしてもらい、密命を受けて動くはめになっていた。

が、奥座敷の三紗は、弟の苦労など、まるでわかっていない。

「数之進。胃ノ腑の薬を用意しておいてください」

言い置いて、ふたたび己の戦いに集中する。数之進と一角は、顔を見合わせずにいられない。なりを潜めていた三紗の『食足りぬ姫』が、九月になって突然、目覚めたのには理由がある。

杉崎春馬（すぎざきはるま）のせいだった。

かつては『柳生（やぎゅう）五人組』として、数之進の命を狙っていた春馬であったが、いつの頃からか姉たちの家に姿を見せるようになっていた。目当てが三紗であるのは言うまでもない。御役目がらみで春馬は八月に大怪我を負い、九死に一生を得ている。看病をしたのはむろん三紗なのだが、問題はその後だ。

「『食足りぬ姫』が目覚めてから、かれこれ、ひと月になる。姫の想い人は、どこに行ってしもうたのか」

吐息まじりの呟きでも、数之進は名を言わぬように気をつけていた。茶店のさして広くな

い庭には、山茶花の木が一本、凛とした風情を見せている。そろそろ花が咲こうかという時季にきていた。

「恩を仇で返すとはこのことよ。三紗殿の荒れようも理解できぬでもない。春馬から貰うた簪は、ひね君の髪から消えたきりじゃ。怒りにまかせて捨てたのか、それとも密かに息の根を止めるために隠し持っているのか」

辛辣な一角の言葉に、反論の声をあげる。

「なにか理由があるのだ。わたしは信じておる」

春馬が姿を消したのは八月の末。数之進は、上役の両目付鳥海左門に探してくれるよう頼んだのだが、いまだに消息はつかめていなかった。左門の配下であり、二人にとっては直接の上役にあたる村上李兵衛は、伊兵衛同様、三紗にひそかな想いを寄せている。

「やはり、あれだな。村上様は恋敵の行方を知りとうはない。このまま春馬が戻って来なんだとしても、村上様に明るい老後が待っているとは思えぬが、いずれにしても恋敵は邪魔よ。ゆえにいいかげんな探索をしているのやもしれぬ」

何度目かになる友の言葉に、数之進も何度目かの異論を唱えた。

「村上様に限って、かような真似はせぬ。調べてもわからぬのであろう。故郷に戻ったか、はたまた姿を隠さねばならぬ事情ができたか」

「二人ともなにをしているのですか。廊下で立ち話など、するものではありません。故郷の姉上様に叱られますよ」

少し遅れて来た冨美の注意に二人は畏まる。

「は」

「申し訳ありませぬ」

ちなみに生田家では、故郷の金沢で婿を取り、生田家を継いだ長女の伊智を姉上様、二女の冨美を姉上、三女の三紗を姉様と呼び習わしていた。二親を早く亡くした姉弟たちにとって、伊智はまさに母同様の存在である。冨美は無茶な真似をする三女にも、それを告げようとしたのかもしれないが、

「お小言は聞きとうありませぬ」

三紗は機先を制するように言った。

「七回目も勝ちとあって、だいぶ金子が貯まりました。大食い大会の優勝金だけでも三十五両です。総菜屋を持つことも夢ではありませんね」

ちらちらと数之進を見やっている。射るような眼差しが怖ろしくて、目を合わせないようにした。廊下で様子を見ていた伊兵衛が、会釈をして、横を通り過ぎる。三紗の後ろに影のごとく座した。

「まずは総菜屋です。お金が貯まったら、何軒も総菜屋を出して、またお金を貯めます。その後は大屋株を買うのです。総菜屋を営みながら、大屋をやって、その次は土地を買います。地主になれば、家を貸すだけでよいのですからね。楽なものですよ」

ほほほほほ、とあげる三紗の嬌声が虚しくひびいた。数之進は一角を促して、見世の方に戻ろうとしたが、友はその手を押しのける。

「かような面倒は省くのが宜しかろうと存じます」

座敷に腰をおろして、言った。

「それ、三紗殿の後ろに控えておる隠居爺でござるよ。日本橋、神田といった江戸でも一等地の何か所かに、貸家を持っているのはご存じのとおり。三紗殿が暮らす四兵衛店も、そのひとつですが、いっそ爺様と祝言をあげられてはいかがか」

「よせ、一角」

止める暇があればこそ、立て板に水の勢いは止まらない。

「なに、祝言をあげたところで、先の短い爺様のこと。この世に留まれるのは、せいぜい二、三年でござる。無事、大往生となりました暁には、三紗殿は女地主でござる。あくせく働いて美貌を損なうよりも、少しの間、我慢をして家屋敷を手に入れるのが、宜しいのではござらぬか」

「先の短い爺様とは、てまえのことですかな、一角殿」
伊兵衛から不満げな声が出た。
「そのとおりじゃ。まさかあと十年も生きるつもりではあるまいな。晴れて三紗殿を嫁女に迎え入れられた折には、すぐさま墓に入るのが男意気よ。ゆめゆめ長生きしようなどとは思うでない」
「お言葉ではございますが、三紗様ほどの女子を嫁女にできましたら、百歳までは生きるつもりでございます。一角殿の弟か妹ができるかもしれませんぞ」
「は。見栄を張るのもたいがいにせい。七十を超えた年寄りに子が作れるか」
「六十九でございます、子も作れます」
「無理じゃ。諦めて、早う墓に入れ。三紗殿と祝言をあげれば、死に花を咲かせられるではないか。それで満足しろ」
「いやでございます」
「このくたばりぞこないが」
不毛な親子の言い争いが続く傍らで、三紗は団子を食べている。ますます膨れあがる腹を見て、数之進は吐息をついた。
とにかく春馬を探し出さなければならなかった。

二

「うーん、く、苦しい」
三紗は大八車の上で呻いている。
「お腹が……はちきれそうです」
仰向けに寝転がった姿は、腹の膨れた妊婦のよう。寒いのをこらえて数之進は、自分の羽織を三女の身体に掛けてやる。最初は駕籠に乗ったのだが、担ぎあげようとした刹那、底が抜けてしまったのである。その結果、やむなく大八車で家に向かうはめになっていた。曳き手役の一角は、そのときの様子を思い出しているに違いない。
「『食足りぬ姫』、駕籠の底を抜く、か。明日の瓦版が楽しみじゃ」
先刻から忍び笑いが止まらなかった。
「よせ。わたしも楽しい明日を迎えたいゆえ」
数之進は小声で窘める。一角の隣に並び、及ばずながら力添えしているつもりなのだが、友が笑う度に強い悪寒を覚えていた。団子女が後ろで睨みつけているのだろう。
大八車に従っているのは、数之進と一角、冨美、そして、金主の伊兵衛という顔ぶれだった。両国橋を渡って、人気のない両国広小路を通り抜け、横山町に差しかかっている。ほと

んどの店が雨戸を閉め、どの通りも深い闇に沈んでいた。新月であるため、月明かりの助けはない。夜目が利かない数之進は、実際のところ、大八車の梶棒を摑んでいないと、足下がおぼつかない有様だった。

「さて、このまま進めば通旅籠町だが」

一角の呟きに、数之進は応える。

「通旅籠町を通るのがよいのではないか。この時刻であれば、旅籠はまだ人の出入りがある。わざわざ暗い道を……」

「暗い道を行くのです」

遮るように三紗が言った。大八車に乗る妊婦のような団子女という醜態を、人目に曝すのはいやだと告げていた。なにか言い返そうとした一角を素早く手で止める。

「わかりました」

「ひね君は、暗い道がお好きか」

一角の皮肉は耳に届かなかったのか、それ以上の反論は起こらない。数之進は胸を撫でおろして、大八車の方向を変えた。

「橘町を通って、千鳥橋を渡るとしよう」

「仰せのままに」

友は答えながら羽織を脱いだ。額には、うっすらと汗が滲んでいる。数之進は一角が脱いだ羽織も、三紗の身体に掛けてやる。伊兵衛が冷えぬように、二枚の羽織をきちんと掛け直した。

「わたくしも足が痛うなりました」

冨美の不満には、黙って辻駕籠を止める。伊兵衛はどんなときでも良き金主であり、良き世話役だった。無事、冨美を駕籠に乗せて、今度は大八車と駕籠の道行きとなる。

「すまぬ」

詫びる数之進の隣に来た。

「なんの、お安い御用です」

「気をつけろ、数之進。親切の裏に下心あり、やもしれぬぞ。おまえの千両智恵をあてにする輩（やから）は、大屋だけに非ず」

すかさず一角が声をあげる。これは親子の前振りかもしれない。悪態や皮肉に時折、本音が見え隠れする。

「なにか話があるのか」

数之進が促すと、「実は」と伊兵衛が切り出した。

「生田様に折り入って、ご相談があるのです。町会所（まちかいしょ）のことなのですが、名主たちから遠ま

わしに、千両智恵の助けをお借りできないかと言われまして」

町会所は、寛政時代にもうけられた制度で、町人の相互扶助を目的としている。地主たちは定められた積み立て金を納め、それを町入費として用いるのだが、地主たちの間に差が生まれているのだった。

「権現様が、この地に江戸を開かれた当初からもうけられた町を『古町』、その後、あらたに町並みをなすようになった地域を『古町並み』と呼んでおります。この二つの地域の他に、寺社門前町がありますが、まあ、これは今回の話にはあまり関わりがありませんので省かせていただきます」

「要は、『古町並み』の地主どもが積み立て金を払わぬのが、『古町』の地主たちは気に入らぬという話よ」

一角が言い添える。それにまた伊兵衛が続いた。

「事情が変わったこともございまして、『古町並み』の地主たちが積み立て金を支払わないのは、定めに反しているわけではないのです。まあ、だからこそ、厄介と申しますか。他にも町会所には、色々と問題がございまして」

「貸し付けのことじゃ。おまえも噂ぐらいは耳にしているのではないか」

「土地を抵当にして行われている貸し付けか」

数之進の耳にも、風の噂が届いていた。

会所で積み立てられた金は、土地を担保にして武家や町人に貸し付けられている。武家は省くべき存在なのだが、町会所の多額の積み立て金を困窮している武家が見のがすはずはない。いつの間にやら、図々しく借り主となっている。

「武家の場合は拝領地、町人の所有地は沽券地。町会所の貸し付けは、この種別によって扱いが異なると聞いた」

数之進の言葉を、伊兵衛が受けた。

「さようでございます。お上の定めは、だいたいにおきまして武家にゆるく、てまえどもには厳しゅうございます。借金を返せない場合の扱いも、ご多分に洩れずというやつでございまして」

借金を返せない場合、武家の拝領地は『上り地』、または『預り地』として会所で管理し、町人の沽券地は『流地』となって、地主の手を離れる。後者の場合は『会所付地面』となり、町会所で処分するのが常だった。

「なれど、武家の『上り地』は、いつの間にやら持ち主のもとへ、というわけか」

流れを読んで出た推測に、伊兵衛は大きく頷き返した。

「はい。結局のところ、泣きを見るのは町人の方。武家は借金を踏み倒して涼しい顔でござ

います」

「腹が立つのはわかる。だが、町会所の積み立て金のことまではな。わたしにはちと荷が重すぎるような気がしなくもない」

「わかっております。土地を担保にした借金云々につきましては、いささか手に余ると思います。生田様には、せめて、『古町』の地主と『古町並み』の地主の取り持ち役になってはいただけないかと思いまして、かような話を口にした次第にございます」

「『流地』が礼金となれば、悪い話ではあるまい」

一角が好条件を提示する。

「なに？」

思わず足を止めた。千鳥橋を渡って、新大坂町の通りに進んでいる。ぽつん、ぽつんと灯（とも）る見世の明かりが、一角父子の顔をかすかに照らし出していた。この話を伝えたいがための前振りだったのはあきらか。数之進は小声で問いかける。

「一等地もあるのか」

「むろんじゃ」

一角は答えて、ふたたび大八車を曳き始めた。後ろに冨美を乗せた駕籠が付いている。押されるようにして前に進んで行った。

「幾ばくかの銭はかかるがな。格安で『流地』を融通してもよいと言うておる由。望んでもたやすく手に入る土地ではない。町名主たちの許しがなければ買えぬ一等地じゃ」

「買った！」

三紗が大声を張りあげる。耳をそばだてていたのだろう、

「わたくしが買います。数之進、すぐにその仲立ち役を務めなさい。宜しいですか、明日、いえ、これからでも町名主のところに行って、引き受けると申し出なさい」

動く大八車の上で上半身を起こしたものの、転げ落ちそうになって悲鳴をあげる。三紗のひとつめの野望、まずは総菜屋を持つという願いが、今まさに手の届くところに来ていた。興奮するなと言う方が無理かもしれない。

「落ち着いてください。まだどうなるかわかりませぬ」

三紗を支える手が、かすかに震えていた。

「なにをのんびりしているのですか。そなたはいつもそんな調子だから、盟友だった男に許嫁を盗られてしまうのです。ここぞと思うたときには迅速に動く。こうしてはいられません。わたくしがその仲立ち役を引き受けましょう」

大八車から降りようとする三紗を懸命に押さえつける。

「かような時刻に訪ねれば、非礼なやつと思われかねませぬ。うまくいく話も立ち消えとな

るやもしれませぬ」
「まずは自分たちの借財を返すのが先であろう」
一角が大八車を曳きながら、ちくりと刺した。
「故郷における散財で、冨美殿と作った借財は、さて、どこまで減ったのか。残りはあとどれほどじゃ、数之進」
「八十五両だ」
「おお、ようやく百両を切ったか。長い道のりであったわ。それにしても、よう頑張ったものよ。流石は数之進じゃ。おれはおまえを誇りに思うぞ」
言い終わる前に、三紗は二人分の羽織を自分で掛け直して、横たわる。寒風が吹きつける中、寝たふりをするのも楽ではあるまい。苦笑いして、数之進と一角は顔を見合わせる。
「借財の話はさておき、いかがでございましょうか」
伊兵衛が訊いた。
「そうだな。うまくいくかどうかはわからぬが、話をするぐらいは……」
「だれかっ」
不意に女の叫び声がひびいた。道の前方の角に人影らしきものが見える。鳥目の数之進には、とうてい見分けられなかったが、一角は姿を見て取ったに違いない。

「芸者と見ゆる」
言い置いて、大八車から離れた。飛ぶような足どりで走る友を、数之進は遅ればせながら追いかける。
「待て、無茶をしてはならぬ」
声が心に届けばこそ、一角はだれかに殴りかかった。後ろの方に動いた人影に歩み寄る。芸者姿の女だった。
「怪我はないか」
数之進は女の肩を抱き、大八車の方に戻る。
「大丈夫です」
という短い会話の間に、一角は二人の男を追い払っていた。女は肩越しに後ろを見やった後、小さな声で言った。
「ありがとうございました」
「今の者たちは、そなたの知り合いか」
数之進の問いかけに、小さく首を振る。
「家はどこじゃ」
と、一角。大八車も駕籠もいったん止まっていた。まだそのあたりにいるかもしれない。

少し様子を見ている。
「深川です」
「名は？」
「小萩と申します」
「あとで家まで送ろう。しばし待て。この男の姉たちを家まで送り届けたら、送って行くゆえ」
大八車の曳き役に戻って、一角は車を曳き始めた。数之進は先に角までもう一度、走って、男たちがいないか確かめる。
鬢付け油の薫りが、揉み合っていたあたりに漂っていた。

三

その薫りは、本材木町の家にも残った。
姉たちが暮らす四兵衛店は、狭い路地を挟んで、左右に三軒ずつの造りになっている。左側の一番奥が姉たちの家、その向かいが上役の鳥海左門が借りている家だ。戸を開けてすぐが一畳程度の土間、手前に三畳、奥に押し入れ付きの六畳という造りはどの家も変わらない。数之進と一角は、上役の家をほとんど我が家のようにして使っている。

「戻ったのか」

鬢付け油の薫りが残る中、数之進は夢現で呼びかけた。いつもは手枕なのだが、六畳間に珍しく布団を敷いて眠りについたのは何刻頃だったろうか。同道を申し出たにもかかわらず、一角はひとりで小萩を送って行った。戸が開く音をかすかに聞いて、てっきり一角だと思ったのだが、

「生田様、いえ、数之進様」

女の声が間近でひびいた。

「ん？」

数之進は、ともすれば閉じようとする瞼を無理に持ちあげる。顔がくっつかんばかりに、世津の白い面が近づいていた。

左門の仇敵、松平信明から放たれた恋の刺客は、仕掛けた方が恋に陥ちるという結果になっている。想いを寄せられた数之進の方も満更ではない。今では相愛と言えるほどの間柄になっていたが、祝言をあげるまでには至っていなかった。

「お世津さんか」

夢だと思い、ぼんやり呟いた。

「はい。昨夜、こちらに辰巳芸者の方が来て、数之進様は一夜をともにされたとか。この鬢

付け油の薫りは、その芸者さんのものなのですね」
「うむ。確かに芸者は来たが」
そこでようやく目が醒めた。わたしはだれと話しているのか、目の前にいるのは、もしや、本物のお世津さんか。はっとして飛び起きたが世津の姿はない。やはり、夢だったのかもしれないと思って、肩の力を抜いた。
「やれやれ、寝ていても疲れるとは」
一角曰く苦労性と貧乏性であり、これまた一角曰く不安に思っている方が安心するという厄介な性癖なのだった。
「一角はすでに朝稽古やもしれぬな」
のろのろと掻巻を押しのけ、立ちあがる。外はまだ暗いようだが、おそらく友は小萩を送った後、そのまま稽古に勤しんでいるに違いない。布団を畳もうとしたとき、数之進は、三畳間との間を仕切る襖が開いたままになっていることに気づいた。窓のない家は真っ暗で、よく見えなかったのである。
「まさか」
血の気が引いた。
先刻のあれは、夢ではなく現実だったのではないか？

「お、お世津さん」

裸足で土間に降りると、寝間着のまま外に飛び出した。まるで待っていたように、向かいの家の戸が開いた。

「何事ですか、騒々しい」

三紗が冷ややかに見やる。

「みっともないこと、寝間着姿で飛び出すなど言語道断、侍としての心得が足りませぬな。能州の姉上様がご覧になられたら嘆かれましょう」

昨夜の醜態はどこ吹く風、着道楽の冨美のおさがりか、萩模様の小紋をきちんと着て、薄化粧まで施していた。押入に入りきらないほどの着物の中から、萩の花模様を選んだあたりに、ひね君の心根が表れている。小萩を暗示して、皮肉と厭味を一日中、言い続けるつもりのようだった。

「ご無礼つかまつりました。姉上は？」

「明け六つ（午前六時）の鐘が鳴るまでは、ぐっすりとお寝みですよ。わたくしはまるで下女のようにこき使われております。たまにはだれかに朝餉の支度を調えてほしいものですね」

「お手伝いいたしますが、わたしはいったんご免つかまつります」

数之進は目を合わせないようにして家に戻る。逆らえば、いびりがひどくなるのがわかっていた。土間に入る刹那、視野にちらりと木戸がよぎる。大屋の彦右衛門が、早朝であるにもかかわらず、所在なげに佇んでいた。

——またか。

苦笑して、後ろ手に戸を閉めた。彦右衛門の頼み事は、いまや四兵衛店の常と化している。頼りにされるのは嬉しいが、いつもうまくいくとは限らない。気紛れな千両智恵が、此度はどう働くか。

「それにしても」

着替えながら、つい笑っている。今にも赤子が産まれそうだった三紗の腹は、見事に元通りになっていた。あの膨らみはどこに消えたのだろう。幾度となく厠に通ったのは間違いない。

「それゆえ、寝不足でよけい苛立っておられるか」

なにを暢気にかまえておる。姉様のことより、お世津さんよ。

心の裡で声が言った。一角の言葉に思えなくもない。

顔を洗うたら家に行け。時を置いてはならぬ。

「そうだな。うん、そうしよう」

「独り言を呟く男は、気味が悪いだけです」

いつの間にか三紗が、土間に立っていた。だれかに八つ当たりしたくて、たまらないという顔をしている。裏の御役目がないのが仇となっていた。朝、起きてから、夜、床に就くまでの間、数之進は気の休まる暇がない。

「姉様。先程、お世津さんが来たように思いましたが」

それでも気持ちを奮い立たせて訊いた。

「来ましたよ。辰巳芸者の噂話が、耳に入ったのでしょう。男所帯に若く美しい女子を泊めたとなれば、平静ではいられません。色々訊かれましたので正直に答えました」

涼しい顔で答える。もしかすると、昨夜のうちに彦右衛門が嗅ぎつけ、この家から一里程度にまで尾鰭話が広まったのかもしれない。あるいは三紗が自ら知らせに行ったことも充分、考えられた。杉崎春馬が行方知れずの今、なりを潜めていた意地の悪い『食足りぬ姫』が完全復活を遂げている。

「早乙女様が送って行かれたようですが、なにをしておられるのでしょうね。送り狼になっておらねばよいのですが」

「姉様」

数之進は素早く制した。自分のことはともかくも、一角の行動についてまで、あれこれ言

われるのはたまらない。手拭いを持ち、土間に降りると、会釈(えしゃく)をして三紗の横を通り過ぎる。

「伊兵衛さんと祝言をあげます」

不意に投げられた言葉は、数之進の足を止めさせるに充分だった。

「え？」

戸を開けようとした手も止まる。

「故郷の姉上様にも文を書きました。今日、送るつもりです」

「お待ちください。やけを起こしてはなりませぬ」

「早乙女様が言うたではありませんか、いっそ隠居爺と所帯を持ってはどうかと。さすれば何軒かの家と裏店はわたくしのもの。あかぎれに悩みながら、あくせく働くのは疲れました。そなたもその心づもりでいてください」

三紗は背中を向けて出て行った。閉めようとした戸を押さえつけ、数之進も外に出る。なにか言おうとしたのに言葉が見つからない。あの、そのと口ごもっている間に、三紗は家に入っていた。

「おはようございます」

明るい挨拶(あいさつ)にはっとする。

「お由実か。おはよう」

数之進も応えて、姉たちの家に入る十の少女を見送っていた。

由実はこの間まで三紗の手伝いをしていた多恵の妹である。多恵を含む五姉弟は、二親が姿を消してしまい、深川の湯屋〈達磨湯〉に居候しているのだが、姉の多恵が〈北川〉に奉公することになったため、妹の由実が菜を売る役目を引き継いだのだった。

「かようなところでなにをしておるのじゃ、彦右衛門。また千両智恵を無料で借りるつもりではあるまいな」

木戸のところで一角が、挨拶代わりの大声を張りあげた。

「無料はならぬぞ、よいか。家の中に控えておる相談者にもそう告げよ。良き智恵が借りたくば、それ相応の礼金が必要だとな」

「わかっております、はい、承知いたしております。のちほど、ご挨拶に伺いますので」

彦右衛門は平身低頭、表店で営む絵双紙屋〈にしき屋〉に戻って行った。一角は大屋の後ろ姿を睨みつけて、数之進の方に来る。

「すまぬ。深川まで行くついでに、お多恵とお由実を迎えに寄った次第よ。お多恵は親父殿のところに送って来た。そのとき、彦右衛門の家に客人が来たという話を聞いてな。狸親父もたまには役に立つものじゃ。目付さながらに、よう目を光らせておるわ。二、三日前に訪

ねて来たようだが」

顔を見て、問いかけた。

「なにかあったのか。いつもの苦労性と貧乏性に加えて、深い悩みがあると見た。眉間の皺がひときわ深い。紙を一枚、挟めそうじゃ」

軽口に我知らず笑みを浮かべていた。

「そうか、ここに紙を挟めるか」

「さよう。伝言板の役目ができるやもしれぬ」

「然り」

生真面目に頷いて、どちらからともなく笑い声をあげる。友の明るさに、どれほど救われることか。

「おまえの眉間の皺が深くなった理由は」

三紗殿か。と、一角は顎で姉たちの家を指した。

「そんなところだ。詳しい話はあとにしよう。まずは朝餉、そして、彦右衛門さんの家に呼ばれようではないか」

「町会所の件だが、親父殿も急いで段取りを調えると言うていたぞ。今日すぐにとはならぬやもしれぬが、頭に入れておいてほしいとのことであった」

「『古町』と『古町並み』の町名主の取り持ち役か」

千両智恵をあてにして、相談に来る者たちは後を絶たない。しかし、姉を救えない智恵が、千両智恵と言えるかどうか。

「面倒な相談事については、いっとき忘れるがよい。眉間の皺をなくすにはまず朝餉よ。その前に朝の一服だな。旨い茶を淹れて進ぜようではないか」

「あ、いや、その前にわたしは」

と言いかけて言葉を止めた。木戸のところに鳥海左門の配下が二人、現れたのである。あらたな御役目の知らせか、はたまた杉崎春馬の行方がつかめたのか。

家に入るよう、数之進は仕草で示した。そろそろ他の住人たちも起きて来るだろう。三紗が出て来ないのを確かめてから、一角たちと家に入った。

四

「杉崎春馬は、尾張の実家に戻った様子です」

配下のひとりが言った。話が他に洩れぬよう気遣っている。小声で続けた。

「尾張の柳生家にも顔を出したようですが、その後の足どりがつかめませぬ。仲間の二人も一緒だったのは、どうにか調べましたが」

数之進の命を狙っていた当時、春馬を含む五人は『柳生五人組』だったが、八月にそのうちの二人が殺められてしまい、今では『柳生三人組』になっている。数之進に対する暗殺命令は、消滅したように感じていたが定かではない。

「三人でどこに行ったのか」

数之進は、つい不安げな声を出していた。三紗に簪を贈ったのは、その気があったからではないのか。文を出すぐらいできるだろうにと、春馬をいささか怨めしく思っていた。

「尾張柳生家の当主より、あらたな命を受けたのやもしれぬな」

一角が茶を淹れた湯飲みを、それぞれの前に置いた。

「鳥海様も案じておられました」

「近々ここへお出ましあそばされる由。お二人には、その旨、言伝を頼まれました次第でござる」

「承りました。ところで、村上様はいかがなされたのですか。大食い大会には顔をお見せになるだろうと思うておりましたが、一度もおいでにならなかったのが、ちと気になっております」

数之進の問いかけに、配下たちは顔を見合わせた後、

「腰を痛めて、動けぬとか」

ひとりが答えた。

「年ゆえ、致し方あるまいと、鳥海様は仰せになられております。隠居時やもしれぬ、とも言うておられましたが」

そこでまた二人は顔を見合わせる。意味ありげな視線を交わし合っていた。数之進が口を開くより早く、一角が問いかけを発した。

「女子(おなご)か？」

「まさか」

数之進の否定に、配下たちはにやりと笑った。

「流石は一角殿、鳥海様にはご内聞にということでお聞き願いたい」

「いかにも女子でござる」

「三紗殿はもう無理だと諦められたようでござってな」

「奉公したばかりの下女に手を出したとか、孕(はら)ませたとか」

「とんだ病でござるよ」

「さよう。励みすぎて腰を痛めたのやもしれぬと、われらは噂しており申す」

二人は大きな笑い声をあげたが、長屋はまだ静まり返っている。数之進は人さし指を口にあてて制した。

「なるほど。村上様におかれては、杉崎春馬の行方を探すどころではなかったご様子。来年の春あたりには、晴れて父親とならるるのでござろうか」

一角もにやにやしている。が、数之進はどうも腑に落ちなかった。

「おかしい」

思わず口をついて出た呟きに、一角が身を乗り出した。

「お、出たな、おまえの十八番が。なにがおかしいのじゃ、ええ、数之進。村上様が下女を孕ませた話のどこがおかしいのじゃ」

「どちらかと言えば村上様は、女子を選ぶお方だ。余生をともにする相手を吟味していたように思えなくもない。それがなにゆえ突然、下女に手を出したのか」

「美人なのであろうさ」

一角は配下に視線で同意を求める。

「わかりませぬ」

「われらは見たことがありませぬゆえ」

二人は言い、ひとりがさらに告げた。

「これはそれがしの考えでござるが、先程も言いましたように、三紗殿は見込みがないと思い、やけになったということもあるのではないかと」

「それだ」
ぽんと数之進は膝を叩いた。
「落ちこんで、やけを起こしたのやもしれぬ。そうであれば得心できなくも……」
「数之進！」
突如、冨美の金切り声がひびきわたった。
「三紗を止めてくだされ、早う三紗を」
「姉様」
数之進が立ちあがる間に、一角が裸足で外に飛び出していた。二人の配下もあとを追っている。最後になった数之進は、寝間着姿で木戸を指さす冨美と目が合った。
「早う」
「は、はい」
木戸に走って、左右を見まわした。配下のひとりが角で手をあげている。数之進なりに急いで行くと、江戸橋の手前で、一角ともうひとりの配下が三紗を押さえつけているのが見えた。
「離してください。わたくしは、尾張に行くのです。春馬様にお目にかかって話をするのです」

配下との話を盗み聞いていたのだろうか。地獄耳のおそろしさに、震えあがりつつも駆け寄る。

「そのいでたちは」

数之進は呆気に取られた。三紗は菅笠を被り、手甲・脚絆を着け、履き物は足袋に紐付き草履という旅支度だった。ご丁寧に小袖の上に塵避けの浴衣まで羽織り、しごき帯でからげている。髪に挿しているのはまぎれもない、春馬から贈られた簪である。

健気な姿を見て、鼻の奥がつんときた。

「とにかく家にお戻りください」

「いやです」

「ははあ、つまり、姉様は、杉崎殿を信じられぬと仰せになるのですね。それゆえ、確かめに行くのですか。信じられぬゆえ、探しに行くのですか」

信じられぬを繰り返すと、三紗はぐっと言葉に詰まる。人の行き来が増えた江戸橋近辺では、興味深げに足を止め、成り行きを見守る物好きもいた。騒ぎを聞きつけたのかもしれない。世津の姿も見えた。

「見世物ではない。さっさと行かぬか」

追い払う一角の耳もとに囁いた。

「お世津さんだけ、連れて来てくれぬか」
「承知」
「さあ、姉様」
うなだれる三紗の背中を、数之進はそっと押した。唇を引き結んだ横顔には、春馬への想いがあふれている。
——どこにいるのだ、杉崎殿。
早く戻って来いと、強く祈っていた。

五

世津との間に生じた誤解は、一角のひと言で終わりを告げた。
「小萩と付き合うておるのはおれじゃ」
数之進は驚いたが、いつもの冗談なのだろうと気にも留めなかった。世津を家まで送って行き、朝餉を終えた頃、大屋の彦右衛門が呼びに来た。
「宜しくお願いいたします」
神妙な顔つきに、一角は苦笑いする。
「すぐに行くゆえ、しばし待て。茶ぐらい楽しませろ」

「畏まりました。あの、三紗様のことでございますが、先日、通行手形を頼まれましたので、てまえが用意いたしました」

のっぺりとした顔には、複雑な感情が漂っていた。便宜をはかったのは大屋として当然のことをしたまで、しかし、先刻の騒ぎのもとが、旅云々となれば数之進に責められかねない。怒られる前に白状したという感じだった。

「申し訳ありません。伊兵衛さんと伊勢詣りに行くと仰っておられたものですから。よくよく考えますれば、冨美様の分を頼まれなかったのは奇妙な話。てまえの配慮が足りませんでした」

「謝ることはない。悪いのは姉様だ。なれど、次からはすぐわたしに知らせてくれるとありがたい」

「はい、そういたします。それでは、おいでになられますのをお待ちしておりますので、宜しくお願いいたします」

彦右衛門を見送りつつ、数之進は首をひねる。

「通行手形は彦右衛門さんに頼んでいたか。てっきり村上様に手配りを頼んだのだと思うたが」

「それゆえ、村上様は捨て鉢になったと考えたわけか。本当は通行手形など渡したくない、

されど、三紗殿には逆らえぬ。手配りした結果、落ちこんでしまい、若い下女につい手が出た、か」

「うむ」

「いずれにせよ、しばらく目が離せぬ。三紗殿は思いこんだら命懸けじゃ。また隙を縫って、尾張に行こうとするのは間違いない」

視線を感じたに違いない。

「われらは木戸のあたりにおります」

「三紗殿は思いのほか、足が速い。一角殿がいなければ、逃げられてしもうたやもしれませぬ」

二人の配下が腰をあげて、外に出て行った。

「茶を淹れ替えて進ぜよう」

一角がやけにあらたまった口調で告げ、土間に降りる。ふと思いついた事柄を問いかけに変えた。

「小萩さんのことだが、襲った男たちのことはわかったのか。心当たりがあると言うていたのか」

「あの二人は、金貸しの用心棒のようじゃ。小萩の父親が借金したらしゅうてな。取り立て

が厳しくて難儀している由。返せないのであれば、吉原に娘、つまり、小萩のことだが、娘を売れと迫っているとか」

「では、昨夜のあれは拐かしか」

「さよう。人質に取るつもりだったのであろう。小萩にもお人好しの弟がいれば、借金を肩代わりしてくれたやもしれぬがな」

茶葉の薫りが匂い立つ湯飲みを、にやりとして、数之進の前に置いた。

「残念ながら、かような弟はおらぬ。必ず返しますからと、いつもどおり、座敷に出た帰りを襲われたというわけよ」

「何処も台所は火の車か」

「生田家は、鎮火しつつあるではないか。おまえの苦労が実って、と、お由実。いかがしたのじゃ」

一角は戸口に目を向けた。由実がおずおずと土間に入って来る。緊張した表情を見て、数之進は訊いた。

「どうした。姉様になにか言われたか」

「気にするでない。三紗殿は今、ご機嫌ななめゆえ」

一角の言葉に、由実は大きく首を振る。

「三紗様のことではありません。ええと、村上様というお侍様が、熱海の湯を〈達磨湯〉に届けてくれると、それで、ええと、まだいつになるかはわかりませんが、熱海のお湯に入れることになりました。日にちがわかり次第、お知らせしますので、是非、おいでください。生田様にそうお伝えしなさいと、主の市蔵より言付かりました」

最後には直立不動になって、口上を述べ終えた。由実はほっとしたように小さく吐息をついた。

「よかった、言えた」

「熱海の湯か」

数之進の呟きに、由実は問いかけを返した。

「遠いのですか」

「おおよそ二十八里（約百十二キロ）ある。熱海には御汲湯御用という者がいるのだが、公方様は贅沢にも、熱海からよく湯を運ばせると聞いた。大湯源泉の湯の権利を持つ家は、二十七軒しかないとか」

この二十七軒の湯戸は、将軍家から帯刀御免の特権が与えられているばかりでなく、運上――雑税のひとつも免除されている。湯戸の主たちは紋付袴を着け、覆面をして長柄の檜柄杓で、木の薫りが漂う湯を桶に汲み入れるのが常とされている。

「へえぇ、紋付袴で覆面をするのですか。檜の柄杓なんて、すごいですね。あたし、あ、いえ、わたしもいつか熱海に行ってみたいです」

冨美と三紗に注意されるのだろう、慌てて「わたし」と言い直したりするところが、姉の多恵によく似ていた。

「そのうち行く機会もあろう。姉上たちにせっつかれて、伊勢詣りとなったときには、途中で熱海に寄るもよし、箱根に数日、逗留するのも悪くない。お多恵やお由実たちも連れて行けるよう、わたしは御役目に励もうではないか」

「本当に？」

由実の目が輝いた。座敷の上がり框に膝を突き、もう一度、確認するように問いかけた。

「今の話、本当ですか、生田様。あたしたち姉弟も一緒に行けるんですか」

「案ずるな、お由実。生田様に限って、偽りは言わぬ」

一角は揶揄するように言ったが、由実は舞いあがっている。

「嬉しい、嬉しい、嬉しい！」

狭い土間でくるくるとまわり、無邪気に喜んでいた。熱海への旅がすでに決まったかのような様子に、数之進も口もとがほころぶ。

「まずは姉様の手伝いよ。そろそろ戻らぬと……」

「お由実」
三紗の叱責がとんだ。
「いつまで油を売っているのですか」
「まるでわれらのやりとりを盗み聞きしているかのようじゃ」
「一角」
数之進は窘めて、早く行くよう由実に合図する。少女は頬を桜色に染めたまま、ぴょこんと一礼して、出て行った。数之進も胸に小さな灯がともったのを感じている。
「稼ぐ楽しみができた」
「然り。姉上たちの借財を返すだけでは、虚しゅうなるばかりだからな。それにしても、また村上様か。姿を見せぬときの方が、存在感があるように感じるのは、おれだけではあるまい。熱海の湯を〈達磨湯〉にとは、村上様にしては気が利いているではないか」
「利きすぎているように思えなくもない」
「お」
一角がふたたび好奇心あふれる表情を見せた。
「『おかしい』とおれが続けてやろうではないか。して、その心は？　なにゆえ、村上様の手配りが気になるのじゃ」

「此度は、根拠があるわけではない。なんとなくだが、村上様はなにか負い目でもあるのだろうか。吝とまでは言わぬが、決して太っ腹なお方ではない。にもかかわらず、杉崎殿に惚れきっている姉様の、機嫌を取るような真似をするのがちと引っかかっておる」

「三紗殿を草葉の陰から、見守る決意をしたのやもしれぬ」

とうとう李兵衛を仏にしてしまい、一角は「さて」と腰をあげた。

「鳥海様曰く、ひょうたんなまずのような大屋をいつまでも放っておくわけにはいかぬ。千両智恵の出番じゃ」

「五両智恵程度しか、役立たぬやもしれぬが」

矢立てと紙を懐に入れて、数之進もあとに続いた。雨になるかもしれない。空はどんよりとした雲に覆われている。

「行って参ります」

菜を売りに行く由実の元気な声が、暗くなりがちな三紗の心をも慰めているに違いない。

数之進は土間で立ち働く姉に会釈して、彦右衛門の家に向かった。

六

「こちらは、上州からおいでになられた庄屋の戸村三之助さんでございます」

大屋の彦右衛門に紹介されて、五十前後の男は平伏した。
「お初にお目にかかります。甘楽郡より参りました三之助と申します」
中肉中背、額がゆったりと広く、やや厚めの唇は、緊張を示すように軽く結ばれている。紬かもしれない。値の張る羽織と着物に、負けない品の良さが感じられた。
「ほう、上州」
数之進の言葉を、一角が継いだ。
「しかも甘楽郡か」
思わず視線を交わし合っている。数之進が一番初めに裏の御役目——幕府御算用者として潜入した先が、上州の甘楽郡に領地を持つ七日市藩だった。二人の意味ありげな視線をどう思ったのか、
「いかがなされましたか、生田様。上州の甘楽郡には、なにかまずいことでもおありになるのですか」
彦右衛門の窺うような目には、強い不安がこめられている。
「いや、なんでもない」
数之進は答えて、さまざまな意味をこめた問いかけを投げた。
「名字を名乗れるのは、大庄屋の証。あのあたりでは確か良い砥石が採れたように思うが、

やはり、砥山名主なのか」

砥山名主やその下に奉公する組頭は、砥石が採れる村の運営を行う普通の名主や組頭などの村役人とは区別されている。幕府代官所から派遣された『砥改人』を補助して、砥山に関わる事柄のみを取り扱うのが役目だった。

「いえ」

三之助は一瞬、返事に詰まって、視線を畳に落とした。すぐに顔をあげたが、眉間に深い皺が寄っている。

「砥山には関わりがございません。大庄屋でもございません。庄屋とは名ばかりの、田や畑を耕して、細々と生計を立てている百姓にございます」

先刻の数之進同様、眉間に紙を挟めそうなほどくっきりとした皺が刻まれている。ここまでのわずかな間に、幾つか気づいた事柄があったが、敢えて口にしない。

「さようか。して、此度の相談事とはなんだ」

穏やかに促した。

「畑のことでございます。江戸に近いせいだと思うのですが、若い者が出て行ってしまい、田畑が荒れ放題なのでございます。村に残されたのは、年老いた者ばかり。人気も悪くなるばかりで、手の打ちようがございません。なぜ、こうなってしまったのでしょうか」

「ひとつは、今、三之助さんも言うたように、江戸に近いせいだろうな。貧しい百姓は田畑を質に入れて借金をする。その倅は百姓ができなくなってしまい、村を出て行くしかなくなる。家のない無宿者として、次から次へと宿場を移るようになる。とまあ、人気が悪くなるのも無理からぬことやもしれぬ」

数之進は懐から矢立てを取り出した。

「紙をお持ちいたしますか」

腰を浮かせた彦右衛門に首を振る。

「いや、紙も持ってきた。続けてくれ、三之助さん」

「はい。残された年寄りでも、簡単に作れる作物はないかと思いまして、参りました次第です。虫のいい話であるのはわかっております。そんな作物があれば、みな作っていると思うのですが」

「江戸に近いということは、悪い面もあるが、良い面もある。作物を早く届けられるうえ、運賃もさほどかからない。そうよな、つまものなどを作ってはどうか」

「つまもの、と申しますと」

三之助は確認するような問いかけを発した。

「知っていると思うが、青紫蘇、茗荷、山葵、生姜、浅葱といった作物よ。特に青紫蘇は

放っておいても育つうえ、若芽から葉、花穂まで刺身のつまとして利用される。年寄りにはありがたい作物ではあるまいか」

「ですが、江戸に持って参りましても、そうそう売れるかどうか」

「良い品を作ることだ。さすれば、料理屋が先を争って買い取る。毎日、刺身のつまに使うゆえ」

「てまえどもは、その料理屋に伝手がございません」

「まかせておけ」

隣に座した一角が、胸を叩いた。

「おれはむろんのこと、数之進もあちこちに伝手がある。良い品さえ作れば、よいか、繰り返すぞ、年寄りたちの心がこもった良い作物じゃ。どこに出しても恥ずかしくない作物よ。それを作れるのであればだ、甘楽郡の年寄りたちの明日は明るい」

「力強いお言葉を伺いまして、三之助、身が引き締まりましてございます」

深々と頭をさげたが、物言いたげな表情は変わっていない。

「次はなんじゃ」

一角が代弁者となる。

「はい。鳥や獣の害のことでございます。時季にかかわりなく、鳥、土竜、猪と、田畑を

荒らす鳥獣の害に悩まされております。これまたむずかしい相談事でありますのは、わかっているのでございますが」

「鉄砲は使わぬのか」

数之進は率直に訊いた。時折、気づいたことを紙に記しながらの話になっている。鉄砲改めによって、武器としての鉄砲は没収されたが、獣を駆除する農具としての鉄砲と、狩猟を目的とする猟具としての鉄砲は許されている。あまり害がひどい場合は、猟師を呼び、猪を退治させることもあった。

「よほどのときには、利用いたしますが、なんと申しましても家を守っているのは年寄りです。猟師を頼んだり、鉄砲を借りてくるのは、いささかむずかしいのです」

「猪は猟師に頼むとしても、鳥や土竜までは無理か」

「はい。さらに今年はウンカまで大発生いたしまして」

三之助の声が重く沈んだ。ウンカの類は、春に南方で生まれて、北上しながら順次産卵し、羽化を繰り返すのだが、日本には初夏、南風に乗って飛来する。ときには大発生して、稲に甚大な被害をもたらすことがあった。

「ウンカには鯨の油が効く。実はわたしも江戸に出て来るまでは、鯨の油による駆除の方法を知らなんだ。能州の生まれなのだが、ほとんどウンカの害に悩まされたことがない。江戸

より北の国では、知らぬ者が多いやもしれぬ」
「さようでございますか」
三之助は妙な表情をしていた。流石に意味がわからない。
「いかがした。なにかおかしなことを言うたか」
「いえ、生田様があまりにも正直に、『知らなんだ』と仰せになりましたので」
「正直者よ」
一角が言った。
「知ったかぶりはせぬ。知らぬことは知らぬと言い、謙虚に教えを乞うのが我が友じゃ。わずかな会話からでも、その人となりがわかるであろう」
「はい」
今度は晴れやかな笑みを浮かべた。先刻、砥山のことを訊いたときとは、まるで違う顔をしている。数之進は不意を衝いてみた。
「そういえば、上野国（こうづけのくに）は絹の産地。生産高では今も藤岡が一番だろうが、それに続く高崎の絹市も賑やかだと聞いている。高崎には知り合いがいるゆえ、足を運んでみたいと思うておるのだが、さて、高崎の絹市は何日と何日だったか」
我ながら意地の悪い問いかけだと思っている。三之助の素性を疑っていることを、自ら吐

露しているようなものだった。が、近頃はいかにも千両智恵を借りにきたような顔をして、罠を仕掛ける輩も少なくない。

数之進は真っ直ぐ三之助を見つめた、三之助も真っ直ぐ見つめ返した。

「絹市の日にちは、町や村によって異なります。高崎までは、なかなか足を延ばす機会がありませんので、絹市の日にちまでは存じかねます」

「つまらぬことを訊いてしもうたな、許せ」

と、一角が横から割りこんだ。

「数之進は細かいことが気になるたちなのじゃ。しかも憶える力が並みではない。此度は珍しく忘れてしもうたようだが、他人も同じようにできると考えがちなのが困りものでな。上野国は広いぞ、数之進。おまえのように村々の絹市の日にちまで、気にかける者はおらぬわ」

「すまぬ」

数之進も合わせた。疑問をいだいたことを気づかれてはならない。紙にあらたな事柄を記しながら軽く頭をさげた。

「お詫びなどなさらないでください。生田様は噂以上のお方であると、しみじみ感じ入りましてございます。いかがでしょうか。場所を変えて、もう少し詳しくお話を伺いたいと思う

のですが」
「庄屋殿のご招待であれば、われらは喜んでお供つかまつる」
勘定はそちら持ちだな、と、一角が問いかけを含んだ眼差しを投げる。
「もちろんでございます。田舎者でございますゆえ、ご満足いただけるかどうかは、わかりませんが」
「失礼いたします」
大屋の妻、りくの声がひびいた。障子を開け、取り澄ました顔で告げる。
「冨美様がお呼びです」
「姉上が？」
「はい」
りくは視線で二度、四兵衛店の方を示した。左門かもしれない。
「申し訳ないが、三之助さん。急ぎの用ができた。鳥と獣の害については、手持ちの農書、と言うても、自分で気づいたことを纏めた手製の文書だがな。それを見直して調べておこう。良い考えが閃いた時点で文を出すが、しばらく江戸におるのか」
「四、五日、江戸にいるつもりです。宿は馬喰町の〈植田屋〉でございます」
「わかった。なにか思いついたら訪ねる」

立ちあがって、階段に歩いた。
「お待ちいたしております」
三之助は頭をさげて見送っている。最後の表情を見たかったのだが叶わない。階段の下で待っていたのは、左門の配下のひとりだった。
「鳥海様がおいでです」
幕府御算用者としての日々が始まる。
次の潜入先はどこなのか。
数之進は記しておいた紙を配下に渡した。すでに探り合いは始まっているのではないか。
一度、二階を見やってから、一角とともに大屋の家を出た。

第二章　御附家老

一

「此度の潜入先は、紀伊徳川家の御附家老、水原土佐守忠道の屋敷じゃ」

鳥海左門は言った。場所は四兵衛店に借りた左門の家で、同席しているのは数之進と一角のみ。村上杢兵衛がいないことに、数之進は、寂しさと違和感を覚えている。

附家老とは、一般に幕府からは『御三家』と『御三卿』に、また諸藩にあっては、本藩より支藩に付けられた家老であり、主な役目は政の監督や運営だった。御三家の場合は特に『御附家老』と呼ばれて、格式も非常に高い。

尾張徳川家は、三万五千石の成瀬氏と三万石の竹腰氏、水戸徳川家は、二万五千石の中山氏、紀伊徳川家は三万八千石の安藤氏と三万五千石の水原氏という、合わせて五家が、御三家の御附家老を担っている。

「土佐守は譜代大名だが、そもそも附家老とは、公儀の正式な職名ではない。当初は御三家の家老にすぎなかったと言われておる」

左門は続けた。

しかし、五家の特別な由緒のため、江戸での廻勤の折には、老中以下の諸大名は、みな正門を開いて出迎えたとされている。こういった他の万石以上の陪臣には見られない殊遇を与えられている面もあった。

「水戸家においては、中山家は藩主と同じく江戸定府、尾張家は、成瀬家と竹腰家が毎年、九月に江戸と名古屋を交代、そして、紀伊家においては、水原家が江戸定府、安藤家が和歌山に常住となっておるのだが」

「五家ともに共通しているのは、江戸城内に詰間がないということでしょうか」

言葉を継いだ数之進に、左門は苦笑いを滲ませる。相変わらず、いい読みをすると言いたげだった。

「さよう。それを不服として、五家ともに幾度となく、詰間を与えてもらえるよう、届けを出している」

「されど、公儀が許す気配はない。五家が詰間を口にするのはあくまでも建前、本音はひとつの大名家として、独立したいと考えている。されど、これまた公儀が許す気配はない。そ

れが気に入らぬゆえ、謀叛を企んでいると？」

一角の問いかけには沈黙を返した。御算用者に密命が与えられるのは、御家騒動が起きている家だけである。いきなり核心を衝いた一角の言葉を、左門はしばし噛みしめるような表情をしていたが、

「その疑いあり、ということじゃ」

ようやく重い口を開いた。

「紀伊家の陪臣であり、御附家老でもある水原家でなにが起きているのか。後ろに控えているのは、言うまでもなく御三家のひとつ、紀伊家。此度は今まで以上に面倒やもしれぬが、わしも肚をくくって臨む所存じゃ。よけいなことは考えずともよい。二人は平常心で臨め」

「ははっ」

そんなやりとりをかわして、数之進と一角は、あらたな御役目の準備を始めた。

紀伊国水原土佐守忠道の上屋敷は、市ヶ谷御門の外、江戸城の御堀を挟んだ北側に位置している。向かいに長延寺とその門前、西側は市ヶ谷長延寺谷町、東側は田町二丁目という町屋、そして、背後に広がるのは、大小とりまぜた武家屋敷という区域だった。

二日後の未明。

数之進と一角は、長延寺の門前町の旅籠にいた。夜明けを迎えたらすぐに、水原家を訪ねることになっている。

「人の出入りが多い屋敷じゃ」

一角がぼそっと言った。

「まだ夜明け前だというに、頻々と人が訪れておる。裏門にまわる者もいるようだが、忙しないことよ」

「ほとんどは商人であろう。無理もない。調書によると、三万五千石の大名家としては、考えられぬほど藩士の数が多いからな」

数之進は懐に、御算用者を示す手札とともに、左門が直々に揃えてくれた調書を携えている。二親を早くに亡くした数之進にとって左門は、父親同然の存在。調書がぬくもりを与えてくれるように感じていた。

二人は水原家藩邸の表門の、真向かいにある旅籠の二階から外を眺めている。左門や配下はおらず、他に人はいない。

「はて、藩士の数はどれほどであったか」

まともに調書を読んでいない様子の友に告げた。

「江戸定府の家臣は、千三百八十二人と記されている」

「それはまた」

一角は一瞬、言葉を失っていた。通常、三万五千石の大名家の場合、江戸定府の藩士は多くても五百人程度がせいぜいだろう。少ない藩になると、百五十人程度で切り盛りしている。

「流石は御三家の御附家老というべきか。水原家は江戸定府ゆえ、人手がいるのやもしれぬがな。中屋敷が一か所、下屋敷が二か所、抱屋敷が数か所にあるのも無理からぬことか。さまざまな点において、他の大名家とは違うておるようじゃ」

「ゆえに、目を通しておく必要がある」

と、数之進は懐から出した調書で軽く友の肩を叩いた。

「それはおまえの守り札だな」

悪びれたふうもなく笑みを見せる。

「おぬしにとってもではないか」

「おれは鳥海様のような、出来の良いお方の倅ではない。三紗殿を見ると鼻の下を伸ばす耄碌爺の倅が、いかにも似合いよ」

「伊兵衛さんは実の親、鳥海様は守り親。いつ、いかなるときでも、われらを守ってくだされる」

調書を掲げてから、数之進は、ふたたび懐に戻した。

「土佐守忠道様のお父上、前土佐守は、一昨年、みまかられた由。忠道様が上様へのお目見得をはたしたのが、昨年の春と記されていた。当主になって約一年半であるうえ、なにしろまだお若い」

「お幾つじゃ」

「二十歳よ」

答えて、外に視線を移した。

「そろそろ見張り役が来る頃だと思うが」

「戸村三之助が気になるか」

一角が言った。心を読んだような言葉になっていた。

「うむ」

三之助と会った折、幾つかの疑問が浮かんだ数之進は、左門の配下に尾行を頼んでいた。しかし、特に不審な動きは見せず、三之助は馬喰町の旅籠に戻っている。今のところ、おかしな様子はない、ようなのだが……浮かぬ顔をしていたのかもしれない。

「ひとつ、かすかに上方の訛りがあった。ひとつ、紬の着物を着ていた」

一角は指を折って二つの事柄を口にした。

「おまえはそれが気になって、三之助を怪しんだと言った。まずはひとつめ、上州は甘楽郡

の庄屋に、上方の訛りがあるのはおかしい。次に二つめ、上野国は絹の産地、にもかかわらず紬の着物を着ていたのが引っかかる」

「さよう、絹の産地だ。庄屋であれば特産品を広めるためにも、絹の着物を着るのではあるまいか。倹約令には反する行いやもしれぬがな。庄屋として江戸に出て来るときぐらいは許されよう」

「単に紬が好きなのやもしれぬ」

「まあ、そうだが……実はもうひとつ気になっておる。三之助さんは、ウンカ退治に鯨の油を用いると話したとき、驚いた様子がなかった」

「驚いていたではないか」

「いや、おぬしは勘違いしておる。三之助さんが驚いたのは別の話だ。わたしは能州生まれゆえ、江戸に出て来るまで、ウンカ退治に鯨の油が役立つことを『知らなんだ』と言ったあれよ」

「そうだったか？」

「間違いない。繰り返しになるやもしれぬが、江戸から北の国では、まだウンカの被害が少ない」

「寒いからだろう」

「おそらくな。ゆえに、鯨の油が効くという話を聞いたときには、少なからず驚きを覚えるはずだ。だが、三之助さんは特に驚いた様子がなかった。つまり、それは」

「ウンカの害に鯨の油が効くという話を知っていたからではないか」

一角は早口で言い、にやりと笑った。

「どうじゃ。おれの五両智恵も馬鹿にしたものでもあるまい」

「たいしたものよ。そのうち、わたしは御役御免だ。それはともかく、さらにもうひとつ、気になることが」

「高崎の絹市の日にちを知らなんだ」

二度目の答えには、先の話の『知らなんだ』という言葉もからめている。数之進も苦笑いせずにいられない。

「ますます危ういな」

「それはともかく」

口真似をして、一角は続けた。

「言うたやもしれぬが、上野国は広い。加えて、町や村ごとに六斎市（ろくさいいち）の日にちは違う。おまえは潜入先の調書を頭に刻みこみ、一言一句、誤らずに告げられる頭の持ち主だが、常人はおれと同じじゃ。すぐに忘れる。国が同じとはいえ、高崎は甘楽郡ではない。頭の出来がお

れと同じ程度の庄屋に、己と同じ頭を求めるな」

「肝に銘じておく。甘楽郡のことだが、たまたまだろうか」

妙な引っかかりが消えなかった。

「おぬしと初めて出逢うた七日市藩は、上州の甘楽郡に領地を持っている。それがどうにも気になってならぬのだ」

「考えすぎであろう。われらの出逢いを知る者は、ごく限られる。鳥海様や村上様、そして、その配下、と、噂をすればじゃ」

一角は、なにか気配を感じたようだが、数之進にはわからない。ほどなく座敷の外で左門の配下が呼びかけた。

「生田殿、早乙女殿」

それが潜入の合図となる。

二人は目配せした後、立ちあがった。

二

門番に来意を告げ、上屋敷の御成門の潜り戸を通ったときである。

「あの音はなんじゃ」

一角が首を傾げた。

「音？」

数之進も耳に意識を集めたが、それらしき音はとらえられない。夜明けを迎えた上屋敷の坪数は、およそ四千坪。二人は門番に案内されるまま、御成門から表玄関に通じる小門を通り抜けた。

「そら、聞こえるではないか。空気が揺れておる。なにかを叩くような、いや、弾くような音が」

「弾く音？」

二度目になった自問の呟きもまた答えが得られなかった。ひっきりなしに出入りする商人らしき者たちが、目礼をして横を通り過ぎる。門番の男は、すぐにそれぞれの頭役が来る旨を告げると、御成門の方に戻って行った。

「気になるな。やけにせかせかとした心持ちにさせられる。気忙しい音じゃ。心地よいものではない」

「剣術の稽古でもしているのではあるまいか」

「違う。どこかで聞いた憶えはあるのだが、空気が揺れるほどのこれは憶えがない。もっとも、おれはなんでもすぐに忘れてしまうがな」

「謙遜することはない。屋敷の図に関しては、わたしもかなわぬ」
「それがおれの取り柄じゃ。逃げ道を憶えておかぬことには、安心して御役目に就けぬであろう。此度もすでに頭に入って」
不意に一角は言葉を切る。目顔で示した玄関先に、二人の中年男が出て来た。ひとりは勘定頭、もうひとりは小姓頭を名乗ったが、挨拶もそこそこに踵を返した。
「忙しゅうてな。詳しいことは、おいおい話していく」
先に立った勘定頭に、数之進は従った。玄関から廊下にあがった時点で、一角とは別れる。新参者に対してなにも興味を示さないのは、意外だったが油断はできない。
——気持ちがゆるんだ隙を衝く、というやり方もある。
自分に言い聞かせて勘定頭のあとに続いた。長い廊下を進むにつれて、心地よい律動が聞こえてくる。一角は気忙しい音と言ったが、もし、これであるならば、数之進は反対の気持ちを覚えていた。心に張りが出て、元気になるような……。
「これは」
その光景を見た瞬間、大きく目を瞠っていた。
庭を挟んだ向こう側に、広間のような座敷が三部屋、見える。どの部屋にも文机が並べられており、その前に藩士が座していた。みな帳簿や台帳らしきものを見ながら、一心不乱

に算盤を弾いている。

そう、一角がとらえた音とは、算盤を弾く音だったのだ。人数が多いため、それが空気を揺らすほどの動きになったに違いない。とはいえ、とらえられたのは一角が優れた感覚を持っているからだろう。

「驚いたか」

勘定頭がちらりと見やる。どこか得意げな様子だった。

「はい。三つの部屋は、みな勘定方なのでございますか」

まずは疑問を問いかけに変える。

「いや、奉公しておるのは勘定方の者だが、三部屋すべてが勘定方ではない。一番左側がこの屋敷の勘定方、真ん中が舫金方、右側が泉府方じゃ。内容については、これもおって伝える」

「いったい、何人ほどご奉公しているのですか」

「ざっと百名よ」

と答えて、勘定頭は、せかせかした足取りで歩き始めた。数之進は胸が弾んでいる。かつてご奉公していた加賀藩は、勘定方だけでも百五十人ほど奉公していた。ここは空気がとてもよく似ている。

——楽しみだ。

ともすれば逸りがちになる気持ちを懸命に抑えた。空気が似ているというだけで、冷静さを失ってはならない。ここは加賀藩ではないのだから。

「いずれは、舫金方、あるいは泉府方も手伝うてもらうが、まずは我が藩の勘定方じゃ」

勘定頭は部屋の前で足を止める。

「河合牧太」

大声でひとりの男を呼んだ。声を張りあげないと、算盤の音に掻き消されてしまうに違いない。四十名ほどいる中から、ひとりが立ちあがって、こちらに来る。その間も他の藩士たちは算盤を弾き続けていた。

——これだ。この緊張感よ。

我知らず、右手の指が動いていた。一番手前の列の藩士が、弾く算盤の指を真似ている。なにを計算しているのかはわからないが、かなり大きな金額のようだった。

「世話役の河合牧太じゃ。河合、今日から奉公する生田数之進じゃ」

勘定頭の紹介で、気持ちを眼前の男に戻した。年は二十六、七ぐらいだろうか。ひょろりとして色が白い。糸のように細い目は、表情を読み取りにくかった。

「河合牧太でござる」

「生田数之進でござる」
「隣の席を空けておきました。どうぞ、こちらへ」
河合牧太は淡々と言い、くるりと背中を向けるや、自分の文机の前に戻り始める。数之進は慌てて勘定頭に頭をさげた。
「宜しくお願いいたします」
「うむ、励むがよい」
「は」
藩士の邪魔をしないよう、気をつけて牧太の隣に行った。どさりと音をたてて、牧太が帳簿らしきものを置いた。
「万留帳と各村の明細帳です。水原家の帳簿もございます。わからぬことがあれば、遠慮なく訊いてください」
「はい」
では、と、さっそく問いかけようとしたのだが、牧太は早くも算盤を弾いていた。とてもなにかを訊ける様子ではない。忙しさを盾にして、よけいな話を洩らさないようにする策のようにも思えた。
——なかなか手強いな。

しかし、万留帳や明細帳からでも最低限のことは調べられる。まずは特産品と思い、左門の調書と照らし合わせることにした。算盤の音が鳴りひびいているためだろうか。初日はいつも緊張するのだが、今日はそれがない。

紀伊国は、紀伊半島の南と西側の約半分を占め、北は大坂、東は大和や伊勢志摩といった国々と、境を接している。南と西側は黒潮おどる太平洋に面して、長大な海岸線が変化に富んだ雄大な景観を見せている国だ。

海の国と山の国、そして、川の国という三つの顔を持っている。

古来、東西を結ぶ海の回廊として、また豊かな漁場として、熊野水軍に代表される海の男たちの活躍の舞台という一面もあった。

水原家は、紀伊国の新宮に領地を賜っている。特産品としては、材木、炭と墨、茶、蜜柑、塩などの他、漁獲物なども豊富だった。他の領地と異にしている点は鯨が獲れることかもしれない。

――その油が、ウンカ退治に役立つ。

数之進の頭に浮かんだのは、やはり、戸村三之助だった。鯨の油がウンカ退治に使えるのを知っていたからこそ、驚かなかったのではないか。次の潜入先が紀伊家の御附家老だとわかったとき、三之助に対する疑惑は、よけい強くなっていた。

謀叛の企み。

それもまた鯨と無関係ではない。鯨の捕獲には多数の漁夫が必要である。平時の捕鯨組織は、すぐさま戦闘集団に早変わりできるのだった。大名家はそこに着目し、幕府はそれゆえ警戒する。

「鯨船は小型だが速い」

前の席の男が、数之進の明細帳を覗きこんでいた。年は七十近いのではないだろうか。鬢のほとんどが白髪に変わっている。男が口にした言葉に思わずどきりとした。数之進の心に浮かんだ言葉だったからである。

「失礼ですが、ご姓名は？」

「おう、これは失礼した。小林左馬助じゃ」

ぎょろりとした両眼は、好奇心にあふれている。どの藩にでも、ひとりか、二人はこういう藩士がいるのだった。新参者のことが知りたくてたまらないのだろう。うずうずしている様子が伝わってくる。

「鯨を獲るところをご覧になったことがあるのですか」

文机の上に身を乗り出して、左馬助の耳もとに小声で囁いた。牧太はつまらなげに一瞥しただけで、特に口は差し挟まない。面倒な世話役は御免蒙りたいというのが、本音なのか

もしれなかった。

「ご覧になるどころではないわ。ご領地では、鯨船に乗りこみ、獲ったこともある」

「まことですか」

「わしは偽りは言わぬ」

と、告げたそれ自体が、偽りのように思えたが口にはしない。

「あとで詳しく教えていただきたく存じます」

「うむ」

話し足りない様子だったが、ちらりと牧太を見やって、左馬助は前を向いた。流石に無駄話がすぎると思ったのかもしれない。隣の世話役が二人に冷ややかな目を向けている。数之進は会釈して、明細帳に視線を戻した。

――一番の特産品は、材木と炭か。

目は万留帳や明細帳に向けつつ、頭の中で事前に渡されていた郷帳も広げている。三つの帳簿を照らし合わせて、より正しい答えを引き出そうとしていた。

炭屋。

羨望まじりの蔑称だろう。幕府内で水原土佐守はこう呼ばれている。領地の新宮で作られる炭は品質もよく、江戸での人気も高い。大坂ではなく、最大消費地である江戸への販売路

を早い時期に確立した点が、今の繁栄を築いたのはあきらかだった。

水原家は江戸に炭支配役を設置。江戸鉄砲洲（てっぽうず）の炭問屋を通じて、炭を販売している。

――確か炭問屋たちの支払い方法が、ちと変わっていたな。

数之進は、郷帳の一部を思い出していた。炭問屋たちは、毎月、五十両ずつ水原家に前納しておき、炭代を支払うときにそれを清算するという方法を取っている。炭問屋の株を取得するためには、御用金として三百両もの大金を水原家に納めなければならない。何代目の当主が考えたのかはわからないが、前の当主自身、あるいは側近の中に、相当な切れ者がいたのは間違いなかった。

――さらに蜜柑もある。

紀州のみかん方は数之進にとって、非常に身近な存在といえた。姉たちの家がある本材木町に近い江戸橋広小路が、紀州蜜柑の江戸における揚場（あげば）所であるとともに、売場所でもあるからだ。

だが、近頃はその水菓子問屋も減り始めている。かつて十四、五軒はあった問屋が、今では五軒となっていた。不作の年が続いたこともあるだろうが、五軒程度がちょうどいい数なのではないだろうか。

――多すぎたがゆえに減ったのだろう。

なれど、と数之進は思わず心の中で続けている。水原家の勘定方は、総勢百人という話だった。わずか三万五千石の御附家老の勘定方が、百万石の加賀藩に、勝るとも劣らないほどの規模を誇っているとは……。

——さらに借財がいっさいないとなれば、公儀に目をつけられて当然か。

心地よい算盤の音はすなわち、謀叛を企む謀（はかりごと）の音だろうか。周囲の同役は、脇目もふらず算盤を弾き続けていた。

三

八つ（午後二時）を告げる前の捨て鐘が鳴り出した刹那、算盤の音がぴたりとやんだ。身体を揺らすような心地よい律動に、身をゆだねていた数之進は、吃驚（びっくり）して周囲を見る。同役たちは素早く文机の上を片づけ始めていた。中にはすでに部屋を出た者もいる。

「いったい、どちらに行かれるのですか」

数之進は隣席の牧太に訊いた。ひとりだけ律動の余韻の中に、取り残されたような心細さを味わっている。

「それぞれでござる。武道場に行く者あり、香道や華道といった芸事を習いに行く者ありでござるよ」

「ほとんどは吉原の遊女屋じゃ。水原家が出入りを許しておる見世が何軒かあっての。大店ではないが、無料で遊べるのよ」

待ってましたとばかりに、前席の左馬助が割りこんでくる。

「小林殿」

牧太が渋面で窘めた。

「よいではないか。生田殿は、まだお若い。わしが十八のときにはじゃな」

「それがしは、二十六でござる」

数之進は遠慮がちに遮る。

「なに？」

左馬助は大仰に目を剝き、無遠慮な眼差しを注いでいたが、

「さようか、貴公は二十六でござるか。いや、お若く見えるゆえ、いやいや、二十六も充分にお若い。いかがじゃ。彼の者たちの後に続いては」

と、廊下を練り歩く一群を目で指した。白目の部分は充血し、黒目の部分には薄く膜が張ったようになっている。相当、目が悪いのではないだろうか。目に効く薬草の名が浮かんだものの、差し控えた。

「それがしは新参者。ご指南いただかねばならぬことが、他にござりますゆえ」

廓遊びを容認するような言葉が引っかかっていたが、これも胸に秘める。大名家はどこも金欠病に苦しんでいるのに、水原家には福の神が鎮座ましましているようだ。その理由を早急に探らなければならない。

そんな気合いを知ってか知らずか、

「廓遊びには飽いておるか。それともご妻女の悋気が強いか」

左馬助は、両手の指で鬼の角を真似た。

「いえ、恥ずかしながら、それがしはまだ独り身でござる。妻を養えるだけの甲斐性がございませぬ」

などと話をしているうちに、おおかたの藩士はいなくなっていた。長くなると思ったのかもしれない。世話役の牧太は、閉じた帳簿をまた開いて、算盤を弾いている。

「ほっほう、いまだ女房はおらずか。わしが世話をして進ぜよう。ちょうど良い年頃の女子が」

「お訊ねいたしたき儀がございます」

ふたたび数之進は遮るように言った。

「念のためにお訊ねしたいのですが、御仕入方役所と記されておりますのは、領内の特産品を取り扱う役所ということで宜しいでしょうか」

各大名家によって、役職や呼称が異なるのが常。概要をつかむため、いたって初歩的な問いかけを発した。

「いかにも特産品を扱う役所じゃ」

「では、この二分口役所というのは、どのような役所でございますか」

帳簿の丁を開いて示した。

「品物の出入りを検査して、二分口銀、つまり、二割の税じゃ。これを取る役所よ。対象となる品物は、材木、薪、炭、茶、塩のほか、漁獲物などじゃ」

二人の会話を隣席の牧太は、聞くともなしに耳を傾けている。世話役を兼ねた見張り役のような感じがした。しかし、世話役が当主、眼前の老藩士が隠居した家老ということも考えられる。一挙一動を見のがすまいと、数之進は、神経を張りつめていた。

「水原家は紀伊様の御附家老。他藩とはあきらかに異なるところがあるのではないかと存じます。この二分口役所は、紀伊様がもうけた役所なのでしょうか」

紀伊家の支配下に置かれているのか、はたまた独自に領内を統治しているのか。真実は異なるかもしれないが、とりあえず、建前の形式だけでもつかんでおきたかった。

「水原家ともうひとつの御附家老、安藤家においては、独自に領地を治めておる。従って、二分口役所もそれぞれにもうけておるのじゃ。紀伊様はご自分のご領地に、むろん二分口役

所をもうけておられるが、水原家と安藤家の政に口出しはなさらぬ。先程、話に出た御仕入方役所に関しては、御附家老の領地にはもうけられておらぬ」

老藩士は顎をあげ、胸を張って、答えた。たとえ紀伊家と雖も、御附家老の領地には口出しできぬ、いや、口出しさせぬわ、と言いたげだった。その気概に深く頷き返して、数之進は問いかける。

「それでは、この国産方というのは、どのような役所でございますか」

さらに丁を繰って示した。

「特産品を取り扱う役所という点においては、御仕入方役所と変わらぬがの。特に領内の特産品を集めて、その売却を大坂商人に任せる一方、領内における産物集荷を領内の商人に任せようとしたのじゃが」

「うまくいきませんでしたか」

先んじて言った。左馬助に限らないことだが、年寄りは話がだらだらと長くなりがちになる。苦労性と貧乏性の業が疼き、隣席の牧太を気遣っていた。

「どうも役割分担が、はっきりせぬ。産物集荷も大坂商人がやってしまうため、領内の商人は出る幕がない、などという訴えも出ておるのじゃ。互いの領分を侵さぬことが、円満に事を運ぶコツであるものを、近頃の若い者は」

小言の気配を察して、またまた遮るような問いかけが出た。
「泉府方、舫金方についてもお訊ねいたしたく思います」
「む」
眉間だけでなく、額の横皺までもがいっそう深くなる。いささか気分を害したのかもしれない。が、渋い顔のまま続けた。
「泉府方は藩士に金を貸し付ける窓口、舫金方は講のようなものじゃ。藩士より幾ばくかの銭を集めて、それを泉府方にまわす仕組みよ」
たかだかそれだけのために、わざわざ部屋をもうけて、毎日、算盤を弾かせるのだろうか。得心できなかったが、今は口にすべきではないと判断する。
「我が殿は、昨年の春、跡目を継がれた由。奥方様はおいであそばされるのですか」
当主の情報収集に切り替えた。水原土佐守忠道の年は二十。奥方については調書に記されていなかった。前殿、つまり、忠道の父はすでに逝去しているが、不足している部分を補わなければならない。
「貴公と同じじゃ」
左馬助は、にやりと笑った。皺の中で目だけが、悪戯(いたずら)っぽく輝いている。
「いまだ奥方様はおられぬ。下屋敷においであそばされるお母上、清照院(せいしょういん)様じゃが、お母

上様のもとに足繁く通うておられるわ。口さがない連中は、そのうちお子ができるのではないかと噂しておるが」

隣席で空咳がひびいた。牧太の細い目に、小さな怒りがちらついている。口がすぎると無言の責めを与えていた。

「冗談の通じぬ男じゃ。生田殿の世話役は、わしが引き受けるゆえ、おぬしはどこへなと行くがよい」

「そうはいきませぬ。それがしは、お頭より、生田殿の世話役を命じられております。非礼を承知で申しあげますが、すでに小林殿は、頭役を退いたお方。あれこれと指図なさるのは、心得違いではござりませぬか」

「よ、よけいなことを申すでない。貴様こそ、あれこれと指図するでないわ」

「あの」

険悪な空気を感じて、数之進は慌てた。

「新田開発につきまして、伺いたく存じます。ご領地の新宮では、やはり、積極的に新田開発を進めているのでしょうか」

話を領地の事柄に戻すことによって、左馬助の気持ちをこちらに向けさせる。元勘定頭の不機嫌な表情に変化はなかったが、口をへの字にしたまま答えた。

「いや、領地では、新田開発よりも熟田化を進めておる」

「熟田化」

初めて耳にする言葉だった。左馬助と牧太を交互に見たが、二人とも答えようとしない。推測まじりの問いかけを発した。

「旱害や水害に遭いやすい土地や、湿地のために片毛――裏作ができず稲ばかりを作ることですが、これしかできない土地、あるいは痩せて生産性の落ちた土地を、生産性の高い土地に変えることですか」

「ほっほう、よう学んでおるではないか」

左馬助は、ふたたび梟のような笑い声をあげた。

「して、どうやれば熟田化できるであろうの」

さらりと問いかける。

「肥料を与えるのが、一番、早い方法ですが、まずは中耕をするのが宜しかろうと存じます。軽く耕して土寄せをし、空気を入れてやれば、土の養生がよくなりますゆえ」

「然り」

左馬助は音がするほど強く膝を叩いた。

「なかなか見所があるの。して、貴公は今までご奉公はしておらなんだのか。浪人暮らし

であったのか」

一歩、踏みこんでくる。流石は勘定頭まで務めた男、ただの老藩士ではない。どう答えたものか、数之進は悩んだ。適当に浪人だったと合わせるのが無難ではある。だが、かなり込み入った様子の、水原家の真実を知るには、ときには大胆な揺さぶりも必要ではないだろうか。

「加賀藩でございます。加賀藩にご奉公しておりました」

噛みしめるように告げた。声が震えなかったか、落ち着いて言えただろうか。数之進も冷や汗まじりだったが、それは二人も同じだったのかもしれない。

「……」

二人同時に一瞬、黙りこんだ。

幕府御算用者が加賀藩にいたことは、もはや周知の事実といえた。自ら投じた大石の波紋が、ひたひたと心に押し寄せてくる。

――逸りすぎたか。

後悔の念が湧いたとき、

「さようか」

何事もなかったかのように、左馬助が応じた。

「大大名家にいただけのことはあるの。よう学んでおるわい。爪の垢でも煎じて飲むか。のう、河合殿」

皮肉めいた呼びかけだったが、牧太は平静を装っている。ちらりと走らせた視線に、数之進は、探るような雰囲気を感じていた。

四

同じ頃、一角は、中奥の御座所で当主の土佐守忠道に、目通りを許されていた。同席している小姓頭が平伏したまま告げる。

「本日より、ご奉公いたしました早乙女一角にござります」

「直答を許す。面をあげるがよい」

「ははっ」

小姓頭と同時に答えて、一角はわずかに顔をあげる。面をあげてもよいと言われても目を合わせてはならない。が、そんな形式にとらわれる一角ではなかった。

――公達のような、白くて、なよやかなお顔立ちか。

素早く上段の間の忠道を盗み見ている。御簾を下げるでもなく、堂々と顔を曝していた。そのあまりにも無防備な様子に疑問が湧いている。

——忠道様の替え玉ではあるまいな。

今まで潜入した大名家では、贋物の藩主や、勘定方の藩士のふりをする者もいた。こうも早く目通りを許したうえ、御簾で顔も隠さないのはおかしくないだろうか。さらに直答を許すとあっては、疑問がいや増しても当然のように思えた。いずれにしても、油断はできない。

「早乙女一角であったな」

忠道の問いかけに、いっそう畏まる。

「は」

「華道は嗜むか」

「いささか嗜みまする」

「床の間の立花はどうじゃ。小姓のひとりが、今朝、活けたものじゃがの。紅い山茶花が見事であろう」

その言葉で床の間に視線を移した。大きな白い花瓶に、まるで山茶花の木をそのまま移したかのごとく、紅い花が咲き乱れている。花瓶が今にも倒れそうなほど派手やかな活け方だった。

そもそも立花と記される活け方には、二つのやり方がある。立花は室町時代に代表される活け花の形であり、花瓶の大きさにほぼ等しく活けるものだ。対する立花は、花瓶の数倍に

も及ぶ新しい活け花の形とされている。立花と敢えて口にすることによって、華道の知識と腕前を試しているようにも感じられた。

「御意。立花の手本のような活け方と存じます」

そつなく答える。内心、白い花瓶に紅の山茶花とは、いかにも垢抜けない活け方だと思っていたが、むろん口にはしない。

「次は、そちが活けよ。どのような花を使うてもよい。活けてみたい花があらば、小姓頭にその旨、告げるがよい」

「ははっ」

平伏した一角には、すでに関心を失ったのか。勘定頭に造菊の準備を進めるよう告げると、忠道は退出して行った。

――主が忙しないゆえ、家中の者も忙しなくなるのか。

今はやんだが、先刻までは算盤の音がもたらす空気の動きに、妙な気忙しさを覚えていた。早く、早くとだれかにせっつかれているようで、どうにも落ち着かない。忠道が出て行くやいなや、今度は小姓頭が立ちあがった。

「殿のお供をしなければならぬ。貴公のことは、同役の田中伝次郎が世話をする。わからぬことがあれば、その者に訊ねるがよい」

「は」

一角は平伏したまま、小姓頭が出て行き、足音が遠離るのを聞いていた。御座所には真新しい畳の薫りが満ちている。主が立ち去った上段の間には、陶製の火鉢が脇息の傍らに置かれていた。もちろん熾した炭が入れてあるに違いない。

「まだ十月だというに、火鉢を使うているとはな。もったいないことじゃ」

声になった呟きに、廊下で応じる者がいた。

「今の言葉、水原家においては禁句よ」

年は二十歳前後だろうか。広い額と涼やかな眸を持つ若侍だった。おそらく同役の世話役だろうと判断する。

「早乙女一角でござる」

「それがしは、田中伝次郎でござる」

と応じて、伝次郎は、山茶花の立花を顎で指した。

「それがしでござる」

得意げに胸を反らしている。軽く額を押すと、後ろに倒れそうなほどだった。多恵、いや、由実の方がよほど大人だと、一角は腹の中でのみ毒づいた。

「殿が造菊と申されておりましたが、茶会でも開かれるのでござるか」

立花の評価は敢えて口にしない。一角流の挨拶だったが、とたんに伝次郎の表情が強張った。短気で自惚れが強いときては救いようがない。

――手に負えぬわ。

なかば呆れていたが、役目に支障が出るのは困る。

「床の間の立花にござりますが、素晴らしい活け方ではないかと存じます。まさに百花繚乱、山茶花が互いに美を競うておりまする。木を模していながら、木ではない。一瞬の儚さが描き出されているのではないかと存じます。立花ならではの華麗さが表れているのではないかと思います次第」

言う方はいささか鼻白んでいたが、伝次郎は満足げに微笑んだ。

「殿からもお褒めのお言葉を賜り申した」

「次は、それがしがその御役目を賜りました次第」

「ほう」

ようやく伝次郎は、御座所に入って、腰をおろした。

「して、貴公はなにを活けられる」

「それがしも山茶花を活けたく思います」

挑戦するような言葉に、ぴくりと眉が動いた。すぐに立花の評価をしなかったのは、いや

がらせかと、遅ればせながら気づいたのかもしれない。みるまに頬が引き攣り、一角を睨みつけた。

「さようか」

いちおう答えたものの、唇を真一文字に引き結んでいる。あまりの稚なさに、ついにやりとしそうになったが、こらえた。

「あの立花には、とうてい及びませぬが、菊ではちと地味になりすぎるのではないかと思いました次第。さらに殿は造菊と言うておられました。茶会でも催されるのであれば、菊は避けた方がよいのではないかと」

「造菊は、下屋敷において催される茶会の折、庭を彩るために飾るものでござる。確かに菊は避けた方が宜しいやもしれませぬな」

「山茶花は手に入りまするか」

「白、薄紅、濃い紅色と、この庭にも何本かの木がござる」

「では、あとで木を拝見した後に、花器を決めたく思います。それがしはまだまだ未熟者、是非、ご指南いただければと思うております」

持ちあげてから、問いかけを発した。

「先程、仰せになられた『水原家においては禁句』というあれにつきましても、教えを賜り

たく存じます。どういう意味でござりましょうや」

「質素倹約禁止令でござる」

「は？」

一角は思わず眉を寄せていた。聞き間違いだと思ったのである。通常、発せられるのは奢侈贅沢禁止令であり、残念ながらこれは守られているとは言いがたい。そのため、幾度となく通達されるのが常だった。一角は怪訝な目を向けたまま返事を待っている。

「当家においては節約や倹約は無縁の事柄。湯水のごとく小判を使うよう、家老格の篠田卯十郎様より、きつく申し渡されております。水原家の定めでござりますれば、破るのはご法度。倹約などをした暁には、処罰を受け申す」

「つまり、贅沢こそが家訓である、贅沢を奨励されている、ということでござるか」

「いかにも。倹約令ではなく、贅沢令を通達されており申す。ゆえに質素倹約禁止令と申しあげた次第」

きっぱりした答えを聞いても得心できない。大名家の台所は火の車、節約と倹約をどれだけ励行しても、借財は増えるばかり。倹約令を出すことはあっても、贅沢令を出したなどという話は聞いたことがなかった。

「驚かれたか」

ふふんと、伝次郎は鼻で笑った。

「ご家老、これは篠田様のことでござるが、能吏でござってな。家老格の御役目のほか、目付頭、勘定奉行、泉府方の頭役、さらに舫金奉行を兼ねておられまする。金は使うてこそ、廻ってくるもの。ケチケチと惜しむゆえ、行き詰まってしまうのだと仰せになられておりまする」

「なるほど。一理あるやもしれませぬな」

一角は頷きながら、尾張徳川家の七代藩主、徳川宗春を思い浮かべていた。贅沢奢侈を好み、ときの八代将軍吉宗公に反撥したため、治世わずか八年で隠居を命じられている。宗春を真似ているのかもしれない。いくつもの役職を兼ねているその篠田卯十郎とやらは、かなりの変人なのではないだろうか。しかし、いつまでも同じ話をしている暇はない。

「篠田様は家老格と仰せになられたが、御家老はおいでになられぬのでござるか」

情報収集に努めた。

「江戸家老は山村増右衛門様が務めておられまする。なれど、病を得られましたゆえ、自ら隠居あそばされたのでござる。家老はひとりいれば充分でござろう」

家老は篠田卯十郎に追い落とされて失脚。やむをえず隠居するに至ったのではないだろうか。御家騒動のことは、頭の隅に留め置いて、訊いた。

「田中殿は、ご奉公してどれぐらいになるのでござるか。ずっと江戸詰なのでござるか」
「それがしは国家老に命じられて、領地の新宮より、江戸に参った新参者。ご奉公して、ようやく三月ほどでござろうか」
「ご領地から参られたのでござるか」
おかしい、と、数之進の十八番を心の中で呟いたが、声や表情には出さない。素知らぬ顔をして、続けた。
「して、殿はどちらにお出ましあそばされたのでござるか」
「殿は、下屋敷にお住まいあそばされている清照院様、ご落飾なされたお母上のもとを訪ねられるのが常。孝養を尽くされるそのお姿には、ただただ感じ入る次第でござる」
落飾と聞いて、左門から渡された調書の一部がかすかに甦る。前殿は一昨年、逝去しているが、正妻を早くに失い、愛妾だった清照院が事実上の奥方となっていた。嫡男はひとりだけだったと記憶している。忠道がそろそろ年頃なので、それを慮って下屋敷にいるのかもしれない。
「下屋敷は後日、訪ねるとして、まずは当屋敷を知るのが肝要であると存じる。案内いたそう」
伝次郎が立ちあがる。

「かたじけない」
一角も右に倣えで腰をあげた。足もとにふと伝次郎の目が留まる。
「変わった足袋でござるな。刺し子でござるか」
興味深げに訊いた。藍色の足袋は、刺し子を用いて、うまく穴を繕ってある。裁縫上手の富美が、縫い目を刺し子で美しく飾ってくれたのだ。倹約家の数之進を見習って、一角も穴の開いた足袋を繕って履くようにしているのだが、質素倹約禁止令に法れば、懲罰ものだろう。
「さよう」
涼しい顔で告げた。
「刺し子足袋でござるよ。近頃、江戸の通人の間では、これが評判でござってな。それがしの知り合いが作っているのでござるが、一年先まで予約が入っている由。いやはや、すごい売れ行きでござる」
「さようでござるか。これはよい話を教えていただいた。刺し子足袋を、それがしにもお譲りいただけぬか。言い値で買いまする。十両、いや、二十両までならば出せまするが」
「二十両でござるか」
飛びあがらんばかりに驚いていたが、数之進ほど正直者ではない。

「今、ここで応とは言えませぬが、知り合いでござりますゆえ、なんとかなるやもしれませぬ。しばしお待ちくださらぬか」

またまた平然と言った。

「かたじけない。当屋敷でも流行りますぞ、その足袋は。粋で、洒落ております。それがしに分けていただきました暁には、早乙女殿にも御礼つかまつります。なにとぞ、よしなにお取り計らいくださりますようお願い申しあげます」

居丈高だった男が、態度を一変させている。

――贅沢令か。

苦笑いせずにいられない。数之進に話したら、どれほど驚くことだろう。しばらく沈黙した後、必ず言うであろう言葉が浮かび、我知らず、にやにやしていた。

五

「ありえぬ」

開口一番、数之進は言った。

「そうであろう、『おかしい』であろう。必ずやおまえの口から、いつもの十八番が飛び出すと」

一角は途中で言葉を切る。

「今、なんと言うた？」

「ありえぬと言うたのだ。おかしいどころではない、悪い冗談としか思えぬ。おぬしの聞き間違いではないのか」

あらためて訊き返していた。二人は情報交換を兼ねて、藩邸の賄所（まかないどころ）に来ている。夕餉を終えて茶を飲みながらの密談になっていた。老藩士の一群が片隅に陣取っているだけで、他に藩士はいない。

「いや、湯水のように金を使うておるようじゃ。聞いたやもしれぬが、吉原の何軒かの遊女屋とは、契約を結んでいるとか。藩士は好きに遊んでよい、ということらしゅうてな。月々の支払いだけでも軽く千両を超える由。千両ぞ。いやはや、驚くのを通り越して、呆れるばかりよ。これだけ裕福な大名家は初めてではあるまいか」

一角は油断なく周囲に目を配っていた。片隅の一画に陣取っている老藩士たちは、酒を飲みながら談笑している。特別な日ではないにもかかわらず、上屋敷の賄所で自由に酒を飲ませることにも、数之進は驚きを禁じえなかった。

「いささか自由すぎるように思えなくもない」

「なれど、決められた時間内は、実に真面目に奉公しておるぞ。中奥の廊下は、顔が映るほ

どに磨きあげられていた。同役が活けた立花を見たが、花瓶はおそらく唐の白磁器であろう。値の張る花瓶のように見えたわ」

「花瓶の大きさにほぼ等しく活けるのが立花、花瓶の数倍に及ぶ新しい活け方が立花だったか」

自問のような呟きに、一角は即答する。

「さよう。近々、家中の者に造菊をさせるとも言うていた。下屋敷における茶会の彩りとして庭に飾るとか。部屋ごとに競わせるそうじゃ。いずれにしても悠長な話よ」

「殿には、お目通りできたのか」

数之進は我知らず声をひそめていた。長屋の部屋よりもここの方が、見通しがきく分、密談に適している。とはいえ、床下に隠れて盗み聞きしていないとも限らない。慎重のうえにも慎重にと自戒していた。

「叶うた。拍子抜けするほど簡単であったな。武道はあまりお得意ではないようじゃ。色白の、公達のようなお顔立ちよ。目通りもそこそこに、下屋敷の方へおいであそばされたわ。小姓頭もそうだが、どうも藩士はみな落ち着きがない」

「母君と過ごされることが多いとか」

「うむ。政よりも、お母上様の胸に抱かれるのがお好きなのやもしれぬ」

にやにやしながらの言葉には、左馬助が発した不謹慎なひびきが感じられた。小姓方でも似たような噂が流れているのかもしれない。

「下屋敷はどこだったか」

二度目の呟きにも、一角は即座に答えた。

「市ヶ谷の原町じゃ。坪数はおよそ五万坪である由」

「今、五万坪と言うたか？」

思わず問い返していた。

「言うた。とにかく、すごい屋敷であるようじゃ。同役の者によると、贅を尽くした能舞台や茶室、さらに趣向を凝らした四阿なども随所に設けられているとか。ここから近いゆえ、様子を見に行ってみたがな。見張りの数が多くて、忍びこむことはできなんだ。上屋敷はつまらぬというのが、殿の口癖であられるとか」

苦笑いには、苦笑いで応えるしかない。

「確かに広さが五万坪というだけでもすごい」

「おれは、あの算盤の音の方がすごいと思うたがな。勘定方に泉府方、さらに舫金方までもうけられているとは、かさねがさね驚くばかりよ。炭屋と揶揄されるだけのことはある。儲かりすぎて、笑いが止まらぬのではあるまいか」

「炭の儲けだけでは、毎月、千両を超える吉原の代金は払えまい」
「では、隠し田か」
一角も声をひそめる。
「わからぬ。ご領地では、新田開発ではなく、すでにある田畑を有効に使うやり方を取っているそうだ。もしかすると、『畑返り』やもしれぬが」
「なんじゃ、それは」
「検地帳には畑と届け出てあっても、実際には田圃で米を作っている場合がある。むろん定めに反することだがな。畑は田圃よりも年貢率が低いため、それだけ儲けが多くなるというわけだ」
「なれど、我が友は『畑返り』だけでは、この華美な暮らしはできぬと考えておるのではあるまいか」
一角に隠し事はできない。考えながら答えた。
「材木と炭、蜜柑、さらに土地の生産性をあげ、利益を高める。手本のような大名家に思えるが」
「引っかかるのは、やはり、泉府方と舫金方か」
「うむ。泉府方は藩士に貸し付けをする係、舫金方は無尽講のように、藩士に幾ばくかの銭

を積み立てさせる係。それぞれに三十人もの勘定方を配しているのが解せぬ。かような人数が必要だとは、とうてい思えぬのでな」

片隅の一群が、大きな笑い声をあげる。夕餉後のひととき、老藩士たちは、ゆったりとくつろいでいた。賄所で堅苦しい姿勢を保つことはない。数之進も正座の姿勢をくずして、胡座をかいた。

「なんじゃ、数之進。足袋の親指が破けているではないか」

「お」

「そら、履き替えろ」

一角は懐から替えの足袋を出した。新品ではないが、これも冨美の手による刺し子で美しく繕われている。

「おぬしは、いつもながら用意がいいな」

差し出された足袋を受け取って、履き替える。友がなにやら意味ありげな笑みを向けていた。

「足袋がどうかしたのか」

「二十両じゃ」

指を二本、立てて、一角は続けた。質素倹約禁止令に反する行い、繕った足袋を『刺し子

足袋』と偽れば、それに二十両もの値がつく。

「冨美殿に頼んで五足ほどまわしてもらうか。流石に穴の開いたやつは気が引けるゆえ、新しい足袋に刺し子を施してもらい、それを一足、二十両で売る。五足、売れば、おお、ひね君たちの作った借財を見事に返済できるではないか。おまえは晴れて自由の身ぞ」

「よせ」

立てた二本の指を押さえつけ、小声で念を押した。

「姉上や姉様には決して言うてはならぬ。よいな」

「真顔になるでない、わかっておる。それにしてもじゃ」

繕った足袋に二十両の値をつけるとは。

友が言葉にしなかった部分を、数之進は心の中で嚙みしめる。夕餉の膳は料亭並みに旨く、茶も極上品の栂尾（とがのお）の茶。大名家の困窮とは、まったく無縁のように思える。能吏という家老格のことを考えずにはいられない。

「家老格の篠田卯十郎様とは、どのようなお方なのであろうか」

独り言のような呟きが出た。

「さあて、な。年だけは五十前後と聞いたが、今日はこの屋敷にはおいであそばされぬとのことであったわ。あるいはどこかに抱屋敷でも持っているのやもしれぬ。引き続き、探って

みるが、まずは下屋敷であろうな」
「話は変わるが、次はおぬしが立花を活けると言うていたな」
先刻、出た話を反芻しながらの問いかけになっている。
「さよう。殿より仰せつかった」
「花は山茶花と聞いたが、花器は決まったのか」
「それよ。いちおう選んでおいたが、どうもしっくりこぬ。同役の、白い花瓶に紅い山茶花という、垢抜けない活け方が焼きついてしもうてな。花を無駄に使うのも哀れに思えてならぬのじゃ。こう、なんというか、殿を驚かせるような活け方はないものか」
「金をかけてもよいのであれば」
質素倹約を旨とする数之進にとっては、勧めたくないことだった。が、一角の有能さを忠道に印象づけたいという気持ちがある。
「閃いたのか」
「そんなところだ。急ぎ大工と左官屋を手配して……」
数之進は戸口に目を向ける。開け放たれていた襖の向こうに、勘定方の小林左馬助が現れた。何人かの藩士と連れ立って、賄所に入って来る。ほとんどが初老の藩士だが、ひとりだけ、五十前後と思しき者がいた。

「小林殿」
すぐに立ちあがって、数之進は、左馬助のそばに行く。一角も一緒に付いて来た。

六

「夕餉でござりますか」
数之進は訊いた。
「さよう。ちと遅うなったが、われら『手暗衆』は、お家の邪魔者。かたがたが終える頃を見計ろうて来るのが常よ」
「お待ちください。膳を調えます。ご酒は召しあがられますか」
「飲まねば、やっていられぬわ」
その答えを聞くやいなや、一角は大台所の方に向かっていた。人数分の膳を頼みに行ったのだろう。数之進は先に立ち、座布団の用意をする。全部で六人だった。
「造作をかけて、すまぬのう。見てのとおり、歩くのがやっとという連中ばかりじゃ。助かるわい」
左馬助は大儀そうに胡座をかいて座る。他の五人もほとんど同時に腰をおろしたが、一番先に座ったのは、五十前後の男だった。

——もしかすると、家老格の篠田卯十郎ではないか。

左馬助の一群を見た瞬間、そう感じていた。近づいてあることに気づいたが、むろん口には出さない。五十がらみの男が、卯十郎ではないとしても、水原家の重臣ではないだろうか。疑問は胸に秘めて、一角と一緒に膳を調える。

「そちも新参者じゃな」

杯を差し出しながら、左馬助が目で一角を指した。

「盟友の早乙女一角でござります。小姓方にご奉公させていただくことになりました次第。運良く同じ屋敷にご奉公できましたこと、幸いに思うております」

数之進は答えて、ひとりずつ順番に酌をしていった。一角は膳を調える役目に徹している。大台所から適当に見繕ってきたのかもしれない。数之進の後ろに付き、酒の肴を膳に配っていた。

「それにしても腹の立つことよ」

不意にひとりが言った。

「篠田めが、目にあまる専横ぶりじゃ。わしはいまだに亡き殿のお気持ちがわからぬ。ゆえもなき商売の輩に、俸禄を与えて家臣の列に入れるとは」

「商売の輩」

数之進は酒を注いで、訊ねた。
「もしや、家老格の篠田様は」
「商人の出よ」
左馬助が継いだ。
「侍は人を治め、商人は治められる法なるに、いまや町人が人を治める世の中じゃ。かえすがえすも残念無念よ」
悔しげに杯を空けると、次々に声があがった。
「前殿は、病み衰えておられたゆえ、見誤られたのであろう」
「篠田がここまでのさばるとは、思うておられなんだに相違ない」
「われらとて、そうではないか」
「然り。あやつからは金だけうまく引き出して、あとは適当に祭りあげて飾りものにすればよい、と言うたは、はて、だれであったか」
ひとりが仲間たちを見やる。だれからともなく、苦笑が洩れた。それは次第に大きくなって、いつの間にか愉しげに笑っている。数之進もつられて笑みを浮かべたが、笑っている場合ではないと気を引き締めた。
篠田卯十郎の悪態をついているからといって、卯十郎に敵対する当主方とは限らない。慎

重に情報収集を始める。

「商人と申されましたが、篠田様はなにを商っておられたのですか。そして、いつ、水原家にご奉公なされたのですか」

「商っていたのは金じゃ。奉公し始めたのは、さよう、かれこれ十年ほど前になるか」

と、左馬助。

「金を扱う商いとは、つまり、両替商でござりますか」

「さよう。大坂の本両替商じゃ。今も商いを辞めてはおらぬ。よほど信頼できる手下がおるのであろう。ますます商売繁盛であるとか。さて、我が藩における藩士の値は、いくらだったかと訊きたいやもしれぬがの。巷の噂によると、仙台藩の場合、五百両、払えば藩士になれるとか。そのあたりから想像するがよかろう」

「は」

素直に頭を垂れた数之進をどう思ったのか、

「新参者の手暗師に、してやられたということよ。われらも当屋敷では『手暗衆』と噂されていたがの。あやつにはかなわぬわい」

左馬助の口から忌々しげな言葉が出た。手暗とは、裏工作をすることだが、裏工作をするにも頭が要る。篠田卯十郎が能吏であるのは慥かなのかもしれない。

「小林殿たちは、どのような集まりなのでござりますか」
訊くのは数之進ひとり、一角は相変わらず給仕役に徹している。
「ある誓いをたてたのじゃ。どのような誓いかは言えぬが、まあ、石頭の集まりとでも言えばよいかの」
左馬助の同意を求めるような目に、また仲間たちが続いた。
「違いない」
「特に堅いからの、左馬助は」
「頭で石が割れるほどじゃ」
「では、石割衆とでも名を改めるか。家老格の篠田に、手暗師のお株を奪われてしもうた今となっては、われらが手暗の名を返上するしかあるまい」
最後の言葉で、ふたたび笑い合った。諦めているのか、それとも希望があるのか、深刻さは微塵もない。左馬助はなんらかの意図があって、ここに五人を連れて来たのではないか。数之進が口を開こうとしたとき、一度も言葉を発していない五十男と目が合った。
「山村増右衛門じゃ。そちは、加賀藩にいたとか」
静かに問いかけた。物腰に隠しきれない品が漂っている。
「はい」

「加賀藩の政はいかがであった。百万石の大大名家ゆえ、藩士はさぞかし機敏に動くのであろう。上下の別なく、活発に意見がかわされていたのではないか」

「それがしは、平役の中でも一番の下っ端でございましたゆえ、よくわかりませぬ」

あたりさわりのない答えを返した。辞めた藩の悪口は慎まなければならない。しかし、頭の中では、加賀藩の政に対する不満が渦巻いている。

顔に出たのかもしれない。

「ここだけの話じゃ」

左馬助が促した。

「正直に言うてみよ。案ずるでない。われら六人は、口も石のように堅いのじゃ。たとえ拷問されようとも言わぬわ」

「いえ、それがしは」

言い訳の途中でふと思いついた。

「江戸には、加賀藩の特産品がほとんど出まわっておりませぬ。それでお察しいただければと思います」

特産品が出まわらない理由、それは加賀藩の政にある。新作物を導入しようという提案をしても、着手する前から、やれ運上がどうの、口銭がどうのと、税の見積もりに終始するの

が常だった。そのため、若い藩士は意欲を失い、産物の増産も滞っているような状態なのである。

「うまい答えじゃ」

増右衛門は微笑した。

「左馬助も見習うた方がよかろうな。五百両で藩士云々の件だが、『噂によると、さる藩では』という言い方で、充分だったように思えなくもない」

「ははっ、肝に銘じておきまする」

大仰な口調で言い、頭をさげたが、笑いながら杯の酒を飲んでいた。さして気にするふうもない。いったい、この六人はどういう関わりなのだろうか。

「お訊ねいたします。かたがたは当家において、どのような役職に就いておられるのですか」

「みな隠居爺よ」

また左馬助が答えた。

「かつては、そこそこの御役目を賜っていたがの。今は特にやることもないゆえ、こうしてたまに集まっては、愚痴をこぼし合っているというわけじゃ。御家老様、正しくは御家老格様のご活躍ぶりが嫉ましゅうて、あ、いや、嬉しゅうてならぬのでな。つい熱が入る次第

よ」

「賜っていた御役目とは……」

「曲者でござる」

突如、廊下で大声がひびいた。

「各々がた、曲者でござる。庭に不審な輩が潜んでおり申した。大台所の近くでござる。お出合いめされい」

その言葉が終わらないうちに、一角は廊下に飛び出している。六人衆もあとに続いた。最後になった数之進は、もつれるような足取りで廊下から庭に出る。

「逃げられたのか」

「賊はどこじゃ、どこへ行った」

大台所の周囲では、家中の者たちが右往左往していた。月は雲に隠れてしまい、互いの顔を判別するのさえ、むずかしくなっている。大台所の入り口や、窓から洩れる明かりを頼りにして、木の陰や植え込みを探していた。

「はじめに賊を見つけた者は名乗りをあげよ」

増右衛門が命じた。

「ははっ、それがしにございます」

見廻り役と思しき若侍が跪いて畏まる。

「顔は見たか」

「見ておりませぬ。賄所の床下から這い出て来たところに出くわしました次第。怪しき輩に呼びかけるのは無用と思い、それがしは無言で斬りつけましたが」

ひと呼吸、置いて、若侍は告げた。

「猿のごとく、大台所の屋根に飛び跳ねましてござります。忍びやもしれませぬ」

忍び。

数之進は背筋に悪寒が走るのを覚えた。水原家を探っていたのだろうか。賄所の床下に忍びこんだのは、なぜなのか。

――われらの話を盗み聞いていたのか。

あるいは、と、別の考えが湧いた。六人の『手暗衆』の話が聞きたかったのではないだろうか。左馬助が連れて来たように思える男たちの話を……冷たい風が吹きつける中、賊の探索が続いていた。

第三章　手暗師（てぐろし）

一

水原家の床下に潜りこんでいた忍び。

彼の者は、なにを探っていたのだろうか。幕府御算用者のことか、それとも六人の『手暗衆』のことか。

見過ごせない奢侈贅沢、通達されているのは質素倹約禁止令。吉原に毎月、千両の支払いをしている、藩士は無料で馴染みの遊女と遊べる。

実権を握っているのは、商人から藩士になった篠田卯十郎。

さまざまな役職を兼ねる大坂の本両替商は、本当に手暗師なのか。水原家を乗っ取るつもりなのだろうか。乗っ取って、次はなにをするつもりなのか。

江戸詰めの藩士は、千三百八十二人。そして、領地の鯨組は、すぐさま軍団へと変化しか

ねない力を持っている。

——まずは大名家として独立する。それが狙いなのやもしれぬ。

数之進は夢現でそんなことを考えていた。いつまでも紀伊家の陪臣に甘んじているのは、本意ではあるまい。大名の一家として独立を果たしたうえは、幕府の重臣となる。老中や若年寄に賄賂を贈れば夢ではない話だ。

——篠田卯十郎と『手暗衆』は、普通に考えれば、謀叛派と当主派のように思えるが。

そう思わせていることも考えられた。表では反目し合っているふりをしつつ、裏ではしっかり手を結んでいる。小林左馬助が篠田卯十郎のことを、手暗師と呼んでいたあれが、いささか引っかかっていた。自分たちのことを『手暗衆』と告げた後だっただけに気にかかる。

——だれかが……泣いている？

数之進は夢の世界から現へと戻り始めた。忍び泣きのような、押し殺した嗚咽が聞こえている。それとも……算盤の音だろうか。一角が落ち着かぬという『謀の音』かもしれないが……いや、だれかの泣き声が聞こえている。泣いてはならぬ、泣いては……。

「だれだ？」

はっとして、数之進は飛び起きた。忍びと思しき賊の騒ぎがあってから三日後の夕刻である。水原家の奉公を終えた後、本材木町の家に戻っていた。調べものをしているうちに、六

畳間でうたた寝していたらしい。時刻はわからないが、家の中は真っ暗でなにも見えなかった。

「三紗がかわいそうでなりませぬ」

やや遅れて、土間に近い三畳間から女の声がひびいた。

「姉上」

数之進は素早く行灯を点ける。三畳間にぽつねんと、二女の冨美が座っていた。いつもは細かいことにあまり頓着しない方なのだが、一度、気にし始めると、そのことだけにとらわれてしまい、鬱々と考えこんだりする。表情は暗いものの、紅葉を描いた小紋で装っているのが見て取れた。

「調べものをしている間に寝ていたようです。今、何刻ですか」

数之進は座布団を勧めて、居住まいを正した。

「そろそろ六つ（午後六時）の鐘が鳴る頃ではないでしょうか。あ、先程、お世津さんが来て、これを置いていきましたよ」

上がり框に置いてあったのだろう、盆を取りあげる。布巾の下には、幾つかの小鉢が並んでいた。

「そなたは寝んでいるようなので、ということでした」

「ひと声、かけてくれればよいものを」

「遠慮したのでしょう。町人にしては、気の利く女子ですね。はじめはどうかと思いましたが、そなたとは似合いのように思えなくもありません。そうそう、忘れぬうちに言うておきますが、お由実の言伝があるのです」

「〈達磨湯〉ですか」

「ええ。今日、村上様が手配りなされた熱海の湯が届いたとか。明朝であれば、沸かしたての新しい湯に入れますとのことでした。三紗も誘うたのですが、気乗りしないようです。そなたからも言うてもらえませんか」

「わたしの話を聞くとは思えませぬが、話だけはしてみます」

「三紗はまた食欲が落ちているのですよ」

気遣いを見せるあたりは、まるで故郷の長女のよう。江戸では自分が一番の年上、いざというときには生田家を取り仕切らなければとでも思っているのか。吐息をついて、冨美は言った。

「夜毎、泣くのです。布団の中で声を殺して、三紗が泣くのです。いったい、どうしたものかと」

ひと呼吸、置いて、思い詰めたような目を向けた。

「尾張に行かせてやれませんか」
「姉上。尾張に行ったとて、杉崎殿に逢えるかどうかはわかりませぬ。それに姉様ひとりというわけにもいきませぬ。わたしと一角に同道する暇はなし、伊兵衛さんに頼むという手もありますが」
「朝はいつもどおりに起きて、菜売りの支度を始めるのです。明るく振る舞っておりますが、それがよけいに憐れで」
滲んだ涙を布巾の端でそっと拭った。心から妹を案じている様子に、数之進も胸が痛くなる。とはいえ、簡単に決められる事柄ではなかった。
「鳥海様にお訊ねしてみます」
引き受けましたとは口にしない。ずるいやり方かもしれないが、左門にあずけることにした。そのうえで、今一度、話をするのがいいのではないだろうか。
「そうですね、ええ、それがいいですね」
沈んでいた冨美の表情に、陽が差したかのような笑みが滲んだ。聞きたかった答えなのかもしれない。立ちあがりかけて訊いた。
「早乙女様はお戻りにならぬのですか」
「そろそろ来る頃ではないかと」

「数之進、おるか」
噂をすればである。冨美は笑って、土間に降りた。
「お帰りなさいませ」
「は。ただいま戻りました」
一角は畏まり、冨美が出て行きやすいよう、身体をずらした。抱えていた風呂敷包みを掲げる。
「飯と味噌汁と漬け物だけお願いいたしまする。旨い鰻を買うて参りましたゆえ。お二人の分もむろんありますぞ」
「畏まりました」
冨美と入れ替わるようにして、一角が中に入って来る。食欲をそそる鰻の匂いが、入り口から流れこんで来た。
「お世津さんにも馳走したいものだ」
「恋道(こいのみち)に疎いおまえにしては、よい考えじゃ。鳥海様がおいでになるやもしれぬと思い、多めに買うて来たゆえ案ずることはない。あとで呼びに行こう。由実はもう帰ってしもうたようだな」
一角は土間で足を拭き、手を洗って口を濯(すす)いだ。忍びらしき賊が床下に潜んでいたのは三

日前のこと。すぐさま左門に知らせている。今宵、左門が来るのか、配下が来るのかは聞いていない。

「ああ、家に帰った。立花の準備は調えたか。大工と左官屋の手配は終えたか」

数之進の問いかけに、友は土間で茶の支度をしながら応じた。

「終えた。同役の田中伝次郎は、怪訝な顔をしていたがな。千両智恵の新しい立花よ、と言うたら、ますます訝しげに眉を寄せていたわ」

賊が入った夜以来、土佐守忠道は、下屋敷から戻っていなかった。明日か明後日には戻ると聞いて、命じられた立花の準備を調えている。

「お気に召してくださるとよいが」

「気に入るかどうかは殿次第、なれど、驚くのは間違いあるまい。おれも魂消(たまげ)たが、なるほどと思うたぞ。おまえらしい、とな」

「活け花が悪いとは思わぬが、ちと花がかわいそうに思うときもある。ただでさえ花の命は短いのに、切り花にするとなお短くなるではないか」

「女子と同じよ」

一角は、茶を淹れて、座敷にあがって来た。火を熾(おこ)して湯を沸かしたにしては早い。

「ずいぶんと早いな」

「三紗殿ではあるまいか。青菜でも茹でるつもりだったのか、鍋で湯を沸かしていたのでな。われらはすぐに茶を味わえる。ありがたいことよ、と、話を逸らすでない。おまえは女子の話になるとそれだ。おれはごまかされぬぞ」

気づかれたか、と数之進は苦笑いする。

「すまぬ」

「詫びるのは、おれではのうて、世津にであろう。いつまで待たせるのじゃ。痺れを切らして逃げられかねぬぞ」

「姉様のことがある」

声をひそめて、向かいの家を顎で指した。冨美の話をかいつまんで説明する。いつもは晴れやかな一角の顔も、流石に少し曇った。

「三紗殿は、まことに一途な女子じゃ。木戸のところに鳥海様の配下がいたのだが、彼の者によると、また旅支度を調えてすり抜けようとした由。油断できませぬと、いささか疲れた様子であったわ。交代の仲間が来るまで、木戸から動けぬと嘆いていた」

「鰻で慰労しようではないか。足りぬようであれば、買うて来る」

「充分すぎるほどよ。もっとも『食足りぬ姫』が目覚めた折には、とうてい足りぬやもしれぬがな」

「然り」

と答えて、笑い合った。いつも感じることだが、一角のこういうところを好ましく思っている。暗くなりがちな御役目も、友の明るい気質にどれほど救われていることか。心の中で感謝しつつ、数之進は言った。

「わたしの方は、特にこれといった動きはない。おぬしの方はどうだ。篠田卯十郎らしき男を見かけたか」

気をつけているのだが、篠田卯十郎はいまだに姿を見せていない。あるいはさりげなく藩士に紛れこんでいるのかもしれないが、勘定方、泉府方、舫金方では算盤の音が規則正しくひびくばかり。それらしき姿は見つけられずに終わっている。

「いや、今日も小姓方の面々は暇を持て余していた。おれは、やはり、『手暗衆』のお歴々が気になる」

「竹刀ダコか」

先んじて口にした。二人はこの三日間、いやというほど密談を重ねている。賄所で会った左馬助を含む六人に対して、数之進と一角は、手が気になったという点において一致していたのだった。

「そして、おまえは六人衆の手がやけに綺麗だったと言うていたな」

「うむ。竹刀ダコはあっても、爪が墨で染まっていたり、がさついて、荒れているようなことがなかった。重臣であるのは、ほぼ間違いあるまい」

「だった、と言うべきではないのか」

言い直した一角に、小さく首を振る。

「今もそうでないとは言いきれぬ」

「確かに、な。鳥海様の調べが手間どっているように感じるのは、六人衆の調べを頼んだからであろうか」

「それもあるやもしれぬが」

「他にも調べてくれるよう頼んだが、今はまだ口にできずか。村上様がおらぬと、おれひとりだけが蚊帳の外じゃ。なんとなく寂しいな」

と、一角は、さして広くない座敷を見まわした。いればいたで口うるさく感じるが、いないとなれば、それはそれで物足りない。左門はもちろんだが、李兵衛も思いのほか、必要な存在なのだと気づかされていた。

「前にも言うたと思うが、村上様は、おらぬ方が存在感を増す不思議なお方じゃ」

「今頃、くしゃみを連発しておられよう。なれど、わたしは手配りの仕方が気になってならぬ。〈達磨湯〉に今日、熱海の湯が届くらしいのだ。村上様が得意げに、姿を現してもいい

頃のように思うが」

いつ戸が開くかと、見やっていたが、現れる気配はなかった。

「若い下女に入れあげて、本当に腰を痛めたのやもしれぬ。ときに刺し子足袋のことだがな」

一角が話を変えた。

二

「二足ほど冨美殿に頼んでもよいか。同役がうるそうてな。二十両は取らぬゆえ、お許しいただけぬかと思うた次第でござる」

最後の方はおどけて頭をさげる。数之進も軽口を返した。

「刺し子足袋を江戸に流行らせるか」

「無理じゃ。江戸の町人には相手にされぬ。おれの嘘八百を信じたのは、同役が田舎侍ゆえよ。領地から出て来たばかりらしゅうてな。へええ、ほおお、と感心することしきりじゃ。おまえ流に言えば、いささか『おかしい』と思えなくもない」

「なにが気になる」

「領地の新宮から来たという割には、訛(なま)りがないのじゃ。さらに今も言うたとおり、あたり

まえのことを知らなさすぎる。刺し子足袋を真に受ける田舎侍が、おらぬとは言わぬがな。質素倹約禁止令が通達される当家では、さほど多くないのではあるまいか」

「御免」

「お、鳥海様がおいでになられたか」

配下の呼びかけを聞き、一角が腰をあげた。土間に降りて戸を開ける。入って来たのは配下のひとりだった。

「おぬしだけか」

一角の問いかけに頷き返した。

「鳥海様は、御城からまだお戻りあそばされませぬ。ぎりぎりまでお待ち申しあげたのですが、間に合わなくなると思い、先に出た次第です」

話しているうちに、男の腹が大きな音をたてる。

「あ」

一瞬、言葉に詰まったが、

「申し訳ない。鰻でござろうか。あまりにもよき匂いがいたしますゆえ」

照れ笑いを浮かべながら頭を掻いた。

「さよう。一角の奢りでござる。ささ、あがられよ。木戸の見張り番の方にも、おいでいた

だくのが宜しかろうと思います」
「いや、ひとりずつ頂戴いたしたく思います。三紗殿から目を離してはならぬと、鳥海様より、きつく申し渡されておりますゆえ」
「申し訳ない」
今度は数之進が詫びた。
「配下のかたがたにまで、かようなお気遣いをいただき、ただただ申し訳なく思います次第。せめてもと思いまして……」
「われらの間で遠慮は無用じゃ」
一角が早くあがれと手でせっついた。
「すぐに膳の支度を調える。なれど、その前に」
戸を閉める直前、友は外に不穏な気配がないか確かめる。水原家の上屋敷にいたのが、本当に忍びだったとしたら、いつも以上に油断はできない。
「大事ない。茶を淹れるゆえ、おぬしはあがれ」
配下を座敷に押しやり、一角は茶の支度を始めた。配下に座布団を勧めながら、数之進は訊いた。
「過日の賊についてですが、公儀のお庭番ですか。お庭番が水原家を探っていたのでしょう

か」

「違うのではないかと、鳥海様は仰せになられておられます。公儀のお庭番が水原家を探っている様子はないとか。かなり突っ込んで調べられた由。例のお方にもお訊ねあそばされたそうですが、逆に驚いておられたとのことでした」

例のお方とは、左門の仇敵、老中首座松平信明のことだ。御算用者を目の上のコブと思っていたようだが、近頃は少し風向きが変わってきているかもしれない。以前ほど横やりを入れなくなっている。

「そうなると、あの賊は」

数之進の呟きを、一角が継いだ。

「紀伊家の忍びやもしれぬ」

紀伊家は、八代将軍吉宗公の生家であり、水原家の主家でもある。

「富裕な陪臣に目をつけて、乗っ取ろうとしているのではあるまいか」

一角の呟きを、今度は数之進が継いだ。

「なれど水原家は飛ぶ鳥を落とす勢いの大名家だ。先手を打って、幕府に働きかけているやもしれぬ。紀伊家と雖も逆に食われかねぬと思うがな」

「なにゆえ、先手を打っていると見た」

一角が訊いた。
「松平信明様が騒がぬ」
「は」
なるほど、と、友は自分の膝を叩いた。
「寛政の遺老と呼ばれる御仁は、すでに充分すぎるほどの賄賂を食うたか。満腹ゆえ、おとなしゅう寝ているわけか」
「そう考えれば得心できるではないか。賄賂をもろうているのに騒ぐのは愚の骨頂よ。家老格の篠田卯十郎は、ただものではない。謀叛の噂を広めたは紀伊家に対する牽制、あるいは威嚇ということも考えられる」
「はて、おれの五両智恵では、いささか理解に苦しむ。おまえは謀叛の噂を篠田卯十郎が広めたと思うておるのか」
「うむ。近づけば巻きこむぞと脅しながら、われら御算用者が潜入するのを待っていたような気がしなくもない」
「待っていた？」
自問した後、さらに問いかけた。
「われらをか？」

謀叛を企んでいる者が、御算用者の潜入を待っているわけがない。むしろ邪魔な存在ゆえ、潜入を阻もうとするはずだ。潜入されてしまった今となっては、闇から闇に葬りたいというのが本音ではあるまいか。

友の問いかけの眼差しに、数之進は曖昧な笑みで応えた。

「まだわからぬ」

「そうきたか。ある程度、わかってはいるが教えられぬ。悩んでも腹が減るだけゆえ、鰻を食うて早寝といくか。明日は〈達磨湯〉じゃ」

一角の言葉に、女の声が重なる。

「ごめんくださいまし」

「だれだろうな」

数之進はわからなかったが、

「小萩じゃ」

すぐさま立ちあがって、友は土間に降りた。戸を開けると、風呂敷包みを抱えた小萩が会釈する。島田髷に結い、地味な色目の細い縞の着物姿だった。

「芸者姿も悪くないが、町娘の姿はさらによいではないか。今から鰻で夕餉の膳じゃ。小萩もあがれ」

一角の誘いに、小萩は躊躇う素振りを見せる。

「でも」

「数之進の許嫁も呼んで来ることになっておるのよ。あてられっぱなしというのも癪にさわるではないか。おれと彼の者の相手をしてくれると助かる」

と、顎で配下を指した。数之進と配下も目顔で挨拶したが、流石に気が引けたのかもしれない。

「いえ、今日は御礼に伺ったんです。わたしを襲った浪人ふうの二人が、町役人に捕らえられたと聞きましたので」

小萩は上がり框に風呂敷包みを置いて開ける。中から菓子折を出す間、一角は戸口で待っていたが、しきりに首をひねっていた。「わかるか」というような視線を数之進に向けている。

わからぬ、と、数之進も目で応えた。

「ありがとうございました、早乙女様」

振り向いて菓子折を差し出した小萩に、一角は土間に立ったまま、正直な答えを返した。

「勘違いするでない。おれは浪人ふうの二人を捕らえてはおらぬ」

「え？」

「見つけたら捕らえて、役人に差し出すとは言うたがな。残念ながら、その機会には恵まれなんだわ」

小萩を送って行ったとき、おそらく安心させるために、力強く請け合ったのだろう。案ずるでない、あやつらは必ずおれが捕まえる、二度とおそろしい思いはさせぬ。などなど、励ます様子が目に浮かぶようだった。

「それでは、いったい、だれが」

戸惑う小萩に、数之進は言った。

「とりあえず、あがらぬか。詳しい話は、鰻を食べながら、すればよいではないか」

初冬の夜は長い。

世津も呼んで、鰻の宴が始まる。

三

「大屋さんから話を聞いたのです」

小萩は、思い出しながらという感じで告げた。

「賊らしき浪人者を捕らえたという話でした。いやでしたが、小伝馬町（こでんまちょう）の牢屋敷に足を運んだんです。顔を確かめてほしいと言われましたので……はい、間違いなくあの二人でした。

わたしはてっきり早乙女様が、捕らえてくだすったのだと思いまして」

お助け侍ならぬ、お助け人が、他にもいるようだ。それは重畳と終わらせればいいものを、数之進は妙な引っかかりを覚えていた。

「その二人は、小萩さんの親が借金した金貸しに、雇われた者たちだったのか」

「はい。そうだと言っているようです」

「では、その金貸しが、役人に突き出したわけか」

「さあ、そこまではよくわかりません」

そんなやりとりをかわした後、数之進は、一角とともに、問題の金貸しの家に向かっていた。場所は日本橋住吉町で、大門通りの東と人形町の西にあたり、浜町堀の入堀に沿った北側に位置している。浅草に移る前の、旧吉原があった場所と言った方がとおりがいいかもしれない。

「浪人たちの居所を書いた文が届きまして」

八丁堀の同心が言った。数之進たちは金貸しの家に行く前に、二人の浪人を捕らえた住吉町近くの番屋に立ち寄っていた。

「浅草今戸町の空き家にいるということでした。届けに来たのは、そのへんの小僧です。女に頼まれたと言ってましたね。この手の話はいくらでもありますので、半信半疑だったんで

すが」

空き家には本当に浪人者が繋がれていた。直前まで見張りがいたことは、後になってその浪人たちの口からあきらかになったらしい。

「されど、自分たちを捕らえた相手のことは、知らぬ存ぜぬの一点ばりか」

番屋を出たところで、数之進は呟いた。時刻はそろそろ九つ（午前零時）になる頃だろうか。鰻の会が盛りあがったため、いささか遅い時刻になっている。

「おまえはゆるゆると来ればよい。おれはひと足、先に行って、金貸しの家の様子を見て来る」

すでに走り出した一角の背中に声をかける。

「気をつけろ」

片手をあげたのが、かすかに見えた。数之進は、後ろに従っている戸村三之助に小声で促した。

「これ以上、付いて来ることはない。旅籠に戻られよ」

鰻の会を催していたときに、訪ねて来た三之助も合流したのだが、途中までと言いつつ、なぜか同道している。

「鳥獣の害については、道すがら話したとおりだ。魚のアラを大鍋に入れて、そこに唐辛子

を三十本ほど加えたら、ひたひたの水から煮る。身崩れするまで火をとおせば完成よ。棒で掻き混ぜて、さらに身を潰したものを、桶に移して蓋をする」

「それを畑に撒くのですね」

三之助の確認に頷き返した。

「そうだ。唐辛子の量などが、ちとあやふやだったのでな。覚書を確かめてみた次第よ。土竜にも効くはずだ。唐辛子に閉口して、近寄らぬであろう」

「年寄りがやりやすい作物は、やはり、つまものでございましょうか。青紫蘇、茗荷、山葵、生姜、浅葱、辣韮といったところが、扱いやすいでしょうか」

「うむ。これもこの間、言うたと思うが、特に青紫蘇がよい。放っておいても育つうえ、上州であれば江戸からも近いからな。何軒かの料理屋と契約する件についても、わたしでよければ力になる」

「ありがとうございます。千人の味方、いえ、まさに千両智恵を得まして、心強い限りでございます」

「どの程度、役に立つかはわからぬがな」

数之進は、曲がり角でいやおうなく足を止める。金貸しの家はすぐそこだ。十月の深更ともなれば、夜風が相当、冷たくなっている。三之助の年老いた下男は、身体を縮こませて、

見るからに寒そうな様子だった。

「お連れの方が気の毒でならぬ。それに、相手は金貸しだ。腕のたつ用心棒を雇っているに相違ない。危ないかもしれぬ」

「てまえのことはお気遣いくださいますな。お気にさわるかもしれませんが、お助け侍のお手並みを拝見したいのです」

三之助は答えて、下男に言った。

「おまえは先に旅籠に戻っていなさい。この道を真っ直ぐ行って、何本めかの通りを右に曲がれば旅籠町だ。この時刻ならまだ提灯が出ているだろう。角に立つ度、提灯を確かめながら、行きなさい」

幾ばくかの銭を渡して下男を先に帰らせる。暗闇に消えて行く後ろ姿を見送りながら、数之進は言わずにいられなかった。

「三之助さんは物好きだな」

「いえいえ、生田様にはかないません。早乙女様も負けず劣らずという感じでございますね。先程、そこで別れた小萩さんでしたか。そもそもは小萩さんを助けたのが事の始まりであるとか」

小萩は、左門の配下が深川まで送って行った。鰻の会で酒を飲みながら、問われるまま答

えている。特に隠す必要のない話だと思っていた。

「まあ、そういうことだ」

「小萩さんを襲った浪人者の二人は、無事、牢屋敷送りになって、万々歳。にもかかわらず、生田様は金貸しを調べようとしておられます。なぜですか」

「だれが浪人者を捕らえて、番所に突き出したのかが気になるからだ。雇い主の金貸しは、そんな奇特な真似はすまい。叩けば埃の出る身であろう。下手をすれば、我が身が危うくなりかねぬ。では、だれが、となるわけだ」

「てまえの目の前においでになるお方は、お助け侍でございますが、お助け人もいるのでしょう。金貸しが素直に白状するとは思えません。放っておいた方が宜しいのではないかと存じますが」

聞き流して、話を変える。

「そんなことよりも、三之助さん。自分のことを気にするがよい。江戸に来てから、四日か五日ほど経つのではないか。そろそろ国に帰らないと、御新造に角が生えるのではあるまいか」

「大丈夫でございます。ついでに江戸の恵比寿講を見物していこうと思いまして、今少し日延べすることにいたしました。農家では十日夜（とおかんや）も行われます。江戸近郊の百姓家に足を延ば

してみるのもよいのではないかと」

三之助はそつなく答えた。

関東の商家では、十月十日を七福神のひとつ、恵比寿神を祭る日として祝い、各所の恵比寿様に参詣して福運を祈る風習がある。また中部・関東以北の民間では、刈り上げ祝いの行事を十月十日に行うのが常だった。これは土竜除けの呪(まじな)いにもなると言われている。

「つきましては、生田様に、お知り合いの商家を紹介していただけないかと思いました次第です」

三之助の頼み事を断る理由はない。

「室町二丁目に蚊帳や畳表を商う〈北川〉がある。一角の生家でな。いつもはご隠居が顔を見せるのだが、今宵は珍しく姿を見せなんだ」

「近江に本店を持つ〈北川〉でございますか」

「そうだ」

「さようでございましたか。早乙女様のご実家とは、存じませんでした。〈北川〉は上州にも蚊帳を売りに参ります。実は来たついでに、蚊帳を仕入れていこうかと思っておりました。あちこちに声をかける手間が省けましてございます。流石はお助け侍、噂どおりでございますね」

おだてられて、天まで昇るほど愚かではない。

「われらは金貸しの家を訪ねた後、深川の〈達磨湯〉に行くつもりだ。もし、よければ三之助さんもと思うてな。先に行ってくれぬか。終わり次第、追いかける」

あくまでも三之助の安全に気を配る。

「話に出ておりましたね。熱海から温泉の湯を運んで来るとか」

「さよう。わたしの名を出せば、悪い扱いはせぬ。やくざの家を訪ねるよりも、温泉の湯屋に行く方が」

数之進は途中で言葉を切る。

「戻って来たようだ」

こちらに来る一角らしき人影を見て、いっそう気持ちを引き締めた。

「主はいたか」

「わからぬが、二階にはまだ灯がともっておる。どうも剣呑な気配があるのじゃ。中から外の様子を窺っておるような感じよ。おまえは三之助とここで待て」

「そうはいかぬ」

数之進はきっぱりと言った。

「われらは常に一蓮托生、そもそも今宵、ここに来ると言うたのは、わたしであって、おぬ

しでは……」

「わかった」

遮って、一角は来た道を戻り始める。数之進は三之助にここに残るよう仕草で示したが、これまたきっぱりと首を振る。仕方なく後ろに従わせて、一角を追いかけた。目的の家はとうの昔に雨戸を閉めている。

「御免」

一角が声を張りあげて、潜り戸を叩いた。

「だれかおらぬか。それがしは、浪人の早乙女一角。こちらに来れば、用心棒の口があると聞き、訪ねて来た次第でござる」

よく考えつくものだと、しみじみ感心している。捕らえられた二人の浪人が、ここに雇われていたのだとすれば、当然、二人分の空きが出ているに違いない。いつものことだが、一角ほど頼りになる相方はいないだろう。

「だれだ。今頃、うるせえな」

ほどなく潜り戸を開ける音がした。

四

「なんの用だい」
髭の濃い男が、潜り戸の内側から上目づかいに睨めつける。
「主殿はご在宅か」
一角が訊ねる。開いた戸を閉めさせてはなるまいと手で押さえつけていた。男は一角と後ろに立つ数之進を交互に見やっている。
「いるけどよ」
「では、是非、取り次いでもらいたい。先日、捕らえられた浪人とは、ちと知り合いでな。顔見知り程度だが、用心棒が要るのではないかと思うた次第よ。おれも後ろの盟友も、柳生新陰流の免許皆伝じゃ。金貸しをやっておると、色々、厄介なことが起きるであろう。われらにまかせておけ。雇うて損はさせぬぞ」
弁口が立つどころではない。立ちすぎて、いささか案じられるほどだった。そのへんにしておけ、と、友の袖を引いたが耳を貸さない。
「雇わねば、あとで後悔するのは間違いない。話だけでも聞いてもらえぬか、ええ、主殿よ。そこにいるのであろう。腕のたつ用心棒を探しているのであろうが」

いっそう声を張りあげた。

男は肩越しに振り向き、二言、三言、かわした後、

「入れとさ」

潜り戸を大きく開けた。数之進は三之助にもう一度、ここで待つよう告げようとしたが、三之助はいなくなっていた。

――おそれをなしたか。

当然の反応に、安堵していた。一角の後ろに続いて、金貸しの家に入る。三畳程度の土間の向こうが、八畳程度の板の間になっていた。その上がり框に、主らしき男が座している。後ろには手下と用心棒が、五、六人、控えていた。

――わたしが話をする。

数之進は一角に目顔で言い、前に出た。よけいなやりとりはかわさない。二人の様子を見ながら、主らしき男が口を開いた。

「おれは友吉、お上から十手を預かっている。用心棒に雇ってほしいだと？」

年は三十前後、左頬の傷痕は、やくざにとっては勲章なのかもしれない。右に顔を向け気味にして、わざと左頬を見せつけていた。むろん十手もこれ見よがしにちらつかせている。思っていたより若かったが、やり方を変えるつもりはなかった。

「すまぬ。雇ってほしいと言うたは、偽りだ」
数之進は正直に告げた。
「なに？」
友吉は怪訝そうに眉を寄せる。ちらつかせていた十手の動きが宙で止まっていた。当惑の次に湧いたのは、疑惑と不審だったのか、
「追い出せ」
手下に命じた。
「待て」
数之進は素早く制した。一角が斜め後ろに立ち、身構えている。ただならぬ殺気を感じたのだろう。友吉は飛びかかろうとした手下を手で止めた。
「お侍の正直なところに免じて、話だけは聞いてやろう。なんだ」
「かたじけない。いくつか訊ねたいことがある。捕らえられた二人の浪人者は、友吉さんのもとで用心棒をしていた。これは確かか」
「ああ、間違いない」
「二人を番屋に突き出したのは、友吉さんか」
「あれは」

友吉は口ごもって、あらぬ方を見やった。落ち着きなく目を泳がせている。見た目より正直な男なのかもしれない。

「捕らえたのはだれだ」

「知らねえよ」

目を合わせないまま、ふてくされたように答えた。

「勝手な真似をしたんでな、やきを入れようと、手下に探させていたとこだったのさ。八丁堀から知らされたような有様よ。ざまあねえや」

「勝手な真似とは？」

「女を女郎屋に叩き売ろうとしたんだよ。おれが言ったわけじゃねえ。借金をしたのは、女の父親なんだが、そのカタに売ろうとしたのさ。いつもおれは手下によ、手荒い真似はするんじゃねえと、言い聞かせているんだ。なあ、そうだよな」

友吉が同意を求めると、控えていた手下は「へい」と頷いた。ふだんからこんな調子なのだろうか。拍子抜けするほど意気地がない。

「金貸しを始めたのは最近か」

問いかけを変えてみる。

「二年、いや、まだそこまではいってねえか。ま、そんなところだ」

金貸しをやるだけの才覚に、恵まれているようには見えないが、いざとなれば脅しや強請りといった得意技を発揮するのかもしれない。

「友吉さんは、商人に向いているのやもしれぬ。これだけの手下を養いつつ、用心棒を雇うのも楽ではあるまい」

数之進は、視線を奥座敷に向けている。そこにも何人かの用心棒が立っていた。数の多さを示すように、次から次へと違う顔を覗かせる。

あきらかに威嚇していた。

「金は天下のまわりもの、なんとかなるもんさ。用はそれだけかい」

友吉は早くも追い出しにかかる。

「いや、もうひとつ」

数之進は率直な問いかけを発した。

「出入りでもあるのか」

「……」

友吉はとうとう返事に詰まった。口もとがもごもごと動いている。なにか気の利いた答えをと思っているのに考えつかない。そんな感じだった。用心棒がまだ足りぬと、招き入れたそれが答えといえた。

「これにて御免つかまつる」
会釈した数之進の横で、一角が告げる。
「おれは小萩の情夫じゃ。言うまでもないことだろうが、二度とおかしな真似をするでないよいな」
「あの芸者の」
手下のひとりが、はっとしたように目をみひらいた。
「やろうっ」
隣にいたもうひとりが懐の匕首を抜く。板の間から飛びかかろうとしたが、いち早く一角が匕首を叩き落としていた。
「よせ」
数之進の制止に、友吉も続いた。
「やめねえか」
互いに両手を広げて、押さえつける。数之進は一角、友吉は手下と用心棒。無意味な睨み合いを友吉が終わらせた。
「二度と手は出さねえよ。その代わり」
躊躇いがちに続ける。

「そっちも守ってもらうぜ。言われたとおりにするからよ。儲けは今までどおりってことにしてもらう。証文どおりってことだ」

意味はわからないが、答えた。

「承知した」

数之進は一角を押すようにして、少しずつさがる。潜り戸まで行くと、今度は一角に押されて外に出た。最後まで睨み合いを続けながら、盟友も出て来る。

「行こう」

一角を急かして、銀座の方に走った。少なくとも二十人以上、いるはずだ。襲いかかられたら、とても防ぎきれない。時々、後ろを振り返りつつ、数之進は走り続けた。

五

だれかを恐れていたような金貸しの友吉。

用心棒と手下は、殺気立っていた。一角が小萩の名を出したとたん、牙を剝いたのは、無理やり手打ちをしたからではないのか。得心できなかったのはなぜか。手打ちをしたと思われる相手とはだれなのか。もしかすると、二人の浪人を突き出したのは、彼の者なのだろうか。

「まさに生き返る思いよ」

数之進は湯に浸かりつつ、大きく吐息をついた。友吉の手下たちが追いかけて来るかもしれない、下手をすれば命を落とすかもしれない。そんな恐怖が大きかったのだろう。〈達磨湯〉に着いたとたん、数之進は倒れてしまったのである。二階の休憩場で少しの間、休み、粥を啜って、ようやく人心地がついていた。

鳥海左門と二人の姉も、じきに来る手筈が調っている。左門とは、裸の付き合いをしながらの密談になるのは間違いない。

「おまえは、本当におれの腕前を信じておらぬな。たとえ三十人の敵が来ようとも、武芸十八般の早乙女一角が、ことごとく斃してみせるわ。ゆえに落ち着けと何度も言うたものを、おまえは足をもつれさせて転ぶ始末よ。あちこち痛むであろう」

一角の声が、石榴口内にひびいていた。

かつては湯屋といえば蒸風呂だったのだが、造りをそのまま利用して、湯船にしている見世が多い。石榴口と呼ばれる門構えを潜って、一段、高い湯船に入るのは蒸風呂の名残だった。板で囲まれた湯船は、わずかに明かりが灯っているものの、顔を判別するのがやっとという、薄暗さに覆われている。

「おぬしの言うとおり、足が痛むが、幸いにも今日は熱海の温泉だ。ぬるめの湯に浸かって

いれば、治るであろう」

「聞こえたか、市蔵。もう薪は加えずともよい」

友の大声に、へーいと男湯の焚口で主の市蔵が答えた。流行らない湯屋や女房に去られたことを悲観して、橋から飛び降りようとしていたところを、数之進と一角が助けたのが縁となり、市蔵と多恵弟妹の間に、持ちつ持たれつの関わりも生まれている。多恵たちは夜、この湯屋の二階を自分たちの家として使っていた。

「ひとつ、気になることがあるのじゃ」

一角が急に声をひそめた。

「なんだ？」

「金貸しの家の土間で、最後に睨み合うていたときのことよ。だれかが潜り戸の外にいる気配があった。流石にあの状況では、振り向いて確かめることはできなんだが、おまえはなにも感じなんだか」

「いや、わたしも、それどころではなかった。友吉と睨み合うていたからな。わずかでも目を逸らせば、いっせいに手下と用心棒が襲いかかって来るのではないかと思い、気が気ではなかったゆえ」

潜り戸の外にいただれか、あの時刻、外にいたとすれば、思いあたるのはひとりしかいな

い。

「三之助さんであろうか」

自問のような呟きが出る。

「わからぬ。が、今にして思えば、友吉が潜り戸の方に、ちらちらと目を向けていたような気がしなくもない。恐れていたような感じがなきにしも非ずよ」

「まさか」

数之進は小さく息を呑んだ。

もしや、戸村三之助こそが、水原家の家老格であり、事実上の支配者である篠田卯十郎なのではないか。御算用者の噂を聞いて、いち早く接近したのではないだろうか。金貸しの友吉が恐れていたのは三之助なのだろうか。芸者の小萩を襲った二人の浪人を捕らえて、番屋に突き出したのは三之助なのか？

二人は薄暗い湯船で、しばし見つめ合っている。

「ありうることよ」

先に口を開いたのは一角だった。

「おまえは色々言うていたではないか。上州は甘楽郡の庄屋という触れこみであるにもかかわらずだ。三之助は上方訛りがあるうえ、あろうことか紬を着ていた。上州は絹織物の産地

なのに紬じゃ。さらに」

そこで言葉が止まる。救いを求めるような眼差しに応えた。

「さよう。三之助さんは、ウンカの被害には鯨の油が効くという話よりも、わたしがその話を『知らなんだ』と正直に言ったことに驚いていた」

「つまり、おまえが正直であることに驚いた、ということだな」

「うむ」

「認めたくはないが、金貸しの友吉がおとなしく引きさがったのは、三之助のお陰やもしれぬな」

「わたしは、おぬしの気迫に恐れをなしたのだと思うが、友吉たちがなにかを、いや、だれかをかもしれぬが、恐れていたのは間違いあるまい」

そう考えれば、腕のたつ用心棒云々を聞き、潜り戸を開けた理由も得心できる。友吉はひとりでも多くの助太刀がほしかったのだろう。夜更けに訪ねて来た不審な二人連れの、話だけでも聞こうとしたその気持ちに、さまざまな事柄が隠れている、ように思えた。

「小萩の騒ぎが原因か」

一角の呟きにも自問のひびきがあった。

「そうやもしれぬ。これはわたしの考えだが、金が返せなければ女郎屋に売る、などという

脅しが、まずかったのではあるまいか」

「はて、まずかったとは？」

「友吉の後ろにいる金主の、気にさわったのやもしれぬ。友吉は、われらを金主の使いと勘違いして、最後にあのような言葉を言うたのではないだろうか」

儲けは今までどおりってことにしてもらう。証文どおりってことだ。

「意味はわからなんだが、とりあえず、合わせた次第よ」

数之進は金貸しの友吉の後ろに、大きな金主の存在を感じていた。その金主は、行き過ぎた取り立てを好まない。どの程度の金利で金をまわしているのかはわからないが、取り立てにはある程度の定めをもうけているのではないだろうか。

「待て、おれの五両智恵は壊れる寸前じゃ。頭を整理してみるぞ。友吉はだれかから金を借りて金貸しをしている、その金主は厳しすぎる取り立てを好まない、ゆえに小萩を脅した友吉一家を制裁した、制裁したのは戸村三之助かもしれない。戸村三之助は」

一角はごくりと唾を呑み、続けた。

「水原家の家老格、篠田卯十郎かもしれない」

「定かではない。鳥海様の配下が、尾行けてくれているのを、祈るばかりだが無理であろう。姉様から目が離せぬゆえ、昨夜は戸村三之助にまで手がまわらなんだはずだ」

「見張り役のひとりに、小萩を送る役目を頼んでしもうたからな」
「いずれにしても、金貸しの友吉が気になる。鳥海様に調べていただこう」
「そうじゃ。忘れぬうちに言うておこう。町会所の仲介役についてだが、どうせなら恵比寿講の前後に集まりを持ちたいという話であったわ。寄り合いを開く回数が増えるゆえ、招集をかける手間が省けるのであろうさ」
「『古町』と『古町並み』の地主による対立か」
仲介役という言葉が、妙に引っかかっていた。『古町』の地主は定められた積み立て金を、ずっと払い続けているのに、『古町並み』の地主は素知らぬ顔を決めこんでいる。なんとかできないだろうか。というような内容だったが……。
「いかがしたのじゃ。気が進まぬのか」
「そうではない。他ならぬ伊兵衛さんの頼みだ。姉上たちが世話になっておるからな。多少、無理な頼み事であっても引き受ける。わたしが引っかかっているのは」
「生田様」
焚口から多恵の声が聞こえた。
「冨美様と三紗様がおいでになりました。鳥海様は、少し遅れると連絡が来たそうでございます」

三紗が菜売りを休むとあって、多恵姉妹も今日は奉公を休んでいたが、五つ（午前八時）からは通常どおり、この湯屋を開けることになっている。一刻（二時間）足らずのわずかな時ではあるものの、数之進たちは貸し切りで楽しませてもらえるのだった。

「わかった。造作をかけて、すまぬ」

答えて、一角と一緒に湯殿を出た。石榴口から板が貼られた流し場に出る。十四、五畳ほどあるだろうか。流し場の向こうは脱衣場なのだが、身体を流す湯が流れるようにするため、境目は竹の簀子で仕切られていた。小さめの湯殿といった場所に、上り湯が溜めてある。それを汲み上げて、身体を流したり、手拭いや糠袋を濯いだりするのだった。

「さて、生田殿はここに座られるがよい。早乙女一角が得意の按摩術で、日頃の疲れを流して進ぜようではないか」

一角に勧められるまま、数之進は友に背中を向けた。

「すまぬ」

「お侍様。本日は、てまえがお流しいたします」

焚口に続く戸口から男が出て来た。手拭いで頬かむりをして、鳶職人のようないでたちをしている。

「流し男か」

数之進は訊いた。

「へい」

「市蔵も流し男を雇えるようになったか。たいしたものよ」

一角の言葉に、男は首を振る。

「今日だけの臨時雇いでさ。市蔵さんに手が足りないと言われましたもんで。その代わり、この後、無料で熱海の湯に入らせてもらうことになってます」

男は数之進の背中に軽く湯を掛けてから、肩を揉み始めた。

「お多恵の弟たちは、まだ小さいからな。掃除や湯を運ぶのがせいぜいであろう。なかなか流し男の役目までは務められぬ、か」

思わず目を細める。

「一角も上手いが、負けておらぬな」

金貸しの友吉との緊迫したやりとりが、思いのほか、こたえていたのかもしれない。湯殿で温まった身体には、なによりの褒美だった。

「鳥海様」

一角の声で我に返る。鳥海左門が脱衣場に入って来た。数之進は急いで畏まろうとしたが、素早く仕草で止められる。

「そのままでよい。今日は裸の付き合いじゃ。李兵衛が手配した熱海の湯を、たっぷりと味わわせてもらおうではないか」

口調は軽やかだが、これから話す内容は軽やかとはいくまい。〈達磨湯〉がにわか密談の場と化していた。

六

「『手暗衆』のひとり、山村増右衛門は、水原家の家老だった男よ」

左門は言った。三日間の調べについては、数之進が纏めた覚書に目を通している。そのうえで足りない部分を調べてきたに違いない。昨夜、来なかった理由を、数之進はそう察していた。暇が取れたのは今日の午(ひる)まで、情報交換にも気合いが入る。

「もっとも二人が会うた相手が、本物の山村増右衛門であればの話だがな」

にやりと笑った。湯殿で温まった後、数之進が流し男の役目に就いている。その横で一角は、流し男の恩恵を賜っていた。肩を揉みほぐされて、気持ちよさそうな顔をしている。

「篠田卯十郎には、いまだ会えませぬ。もしかすると、すでに会うているのやもしれませぬが」

「藩主や当主以外の家臣を調べるのはむずかしいが、できるだけ詳しく調べよと命じておい

た。そろそろ知らせが来る頃やもしれぬ」

左門は言い、話を変えた。

「勘定方が百人であったか」

「はい。勘定方、舫金方、泉府方の三つを合わせまして、およそ百人。百万石の加賀藩でさえ、百五十人ほどでございます。いささか多すぎるのではないかと」

ちらちらと流し男に目を走らせる。その視線を感じたに違いない。

「てまえは、女湯の方に参ります」

男は女湯に移ろうとしたが、

「ならぬ」

左門が制した。大きくなった声に、数之進たちだけでなく、左門自身が驚いていた。ばつが悪そうに苦笑いを浮かべる。

「いや、すまぬ」

冨美の裸身を見られるのが、いやだったのだろう。数之進は左門の、こういうところに惹かれる。男女の差や身分の上下といったものにとらわれない、おおらかで自由な気質を愛していた。

「市蔵さんの知己と聞いております」

数之進が言うと、苦笑いが微笑に変わる。
「さようか。次はわしの肩を頼む」
「承知いたしました」
男は左門の後ろに移って、肩を揉み始めた。市井の民が聞いたところで、わかる話ではないが、それでも数之進は慎重になる。
「泉府方が気になります」
小声で告げた。
「日本橋住吉町の金貸し、友吉の知辺とともに、お調べいただければと思います」
「む」
左門の表情が、わずかに険しくなる。そういうことか、はい、そうではないかと思いまして。そんな無言のやりとりを見て、一角が不満げな声をあげた。
「やれやれ、またしても、おれだけが蚊帳の外か。こういうときは、やはり、村上様よ。蟷螂のような上役が、思い出されてならぬわ。『蚊帳の外組』として慰め合う相手がおらぬのは、存外、寂しいものじゃ」
「市井のことは、伊兵衛さんの方が詳しい。おぬしから頼んでくれぬか。他にも友吉一家のような金貸しがいるやもしれぬ。ここ二年ほどの間に金貸しを始め、割と評判がいい者がお

らぬか、とな」
「なれど、友吉一家は」
反論しかけて、一角はぴしゃりと自分の額を叩いた。
「そうか。評判が悪くなるようなことをしたゆえ、友吉一家は、仕置きされたというわけか」
得心できたようだが、すんなりと理解できない事柄もあるのだろう。
「泉府方と、金貸しの友吉か」
結びつかない二つのことを呟き、さかんに首をひねっていた。
「水原土佐守忠道さまについてはいかがでしょうか」
数之進は話を変える。
「お顔立ちや背丈、ご気質など、耳にしたことはございますか」
「年が二十歳ということしかわからぬ。なんというても、水原家は御附家老じゃ。城に出仕しても詰間があるわけではない。まして春に代替わりしたばかりとなれば、人相風体を知るのは至難の業よ」
「前土佐守様は、どのようなお顔立ちでございましたか」
「目が糸のように細い男であったな。背は高からず、低からず。炭屋と揶揄されるほどの遣

り手だったのは間違いないが、印象はきわめて薄い男よ。喋ると小判が減るとでも思うていたのか、無駄口を叩かない一面も持っていた」

もうよい、と、左門は男に言い、石榴口の方に向かった。続きは湯殿でということだろう。数之進と一角もあとに続いた。ぬるめの湯が、揉みほぐされた身体を心地よく押し包む。ちょうどいい按配だった。

「戸村三之助でございますが」

ふたたび口火を切る。

「昨夜は、尾行できましたか」

「いや」

ひと言で終わった。左門の身辺は常に人手不足、そこにもってきて三紗の見張り役に人手を割かねばならず、尾行にまわす余裕はない。

「数之進は三之助こそが、篠田卯十郎やもしれぬと思うている様子でござってな。なれど、それがしは、ちと異なる意見を持っております次第。上州の庄屋のふりをして、われらの動きを探る。これはありうるとしても、顔を知られてしまうのではないかと」

異論を唱えた一角に反論した。

「遅かれ早かれ顔は知られるではないか。いつまでも隠しとおすことはできぬ」

「それはそうだが」
「戸村三之助が、篠田卯十郎ではなかったとしてもだ。なんらかの関わりがあるのではあるまいか。上州の庄屋とは、どうしても思えぬ」
薄暗い湯殿でつい本音が出る。
「いまだ篠田卯十郎の顔さえわからぬとは、なさけないことよ」
深い吐息をついていた。向こうは数之進たちの動きをつかんでいる。先手を打たれかねない流れに、焦りを覚えていた。木を隠すには森の中、人を隠すには人の中。卯十郎は百人の勘定方をうまく隠れ蓑にしているように思えた。
「質素倹約禁止令か」
左門がふと口にする。
「倹約令ならぬ、贅沢令を通達するとはな。篠田卯十郎は面白い男じゃ。数之進とはよい勝負をするやもしれぬ。千両智恵まではいかぬが、さよう、百両智恵程度は使えるのではあるまいか」
「鳥海様。五十両智恵ぐらいに、留めておいた方が宜しいのではないかと存じます」
一角の提言に、上役は即答する。
「さよう。せいぜいその程度であろうな」

なによりの励ましと受け取って、訊ねた。
「あそこまで派手に小判を使うのは、なぜでございましょうか」
「前におまえが言うたではないか。紀伊家を牽制するためであろう。うかうかしておると、五十五万五千石の主家に呑みこまれかねぬ。さながら紀伊家は鯨よ。ぐわっと大口を開けて、小判を手当たり次第じゃ」
大きく口を開けて、呑みこむ真似をする。
「さて、呑みこまれるのはどちらなのか。はたまた、篠田卯十郎の目的は、本当に紀伊家に対する牽制なのか」
独り言のように呟いた。
「なに？」
一角が怪訝な顔をする。薄暗くてよく見えないが、口調と雰囲気で読み取っていた。返事を待つような間を空けた後、
「もしや、おまえは、水原家が主家の乗っ取りを企んでいると考えておるのか」
友が訊いた。
「わからぬ。されど、食うか食われるかは、世のならいよ。矢を放ち、鉄砲を撃つ戦ではないが、これも間違いなく戦。御家の存亡を懸けた戦だ」

答えながら、もうひとつ、篠田卯十郎に対する疑いが湧いていた。もっと巨きな謀があるのではないか。もしかすると……。

「数之進」

一角に促されて、はっと目をあげた。

「申し訳ありませぬ。考え事をしておりました。御城の方はいかがでしょうか。此度はご老中様が、やけにおとなしくしておられます。騒がぬのは」

「賄賂じゃ」

一角が継いだ。

「言うたではないか。充分すぎるほどに、渡されているのであろう。静観を決めこむのはすなわち、懐が重すぎて動けぬからよ」

「うまいことを言うではないか」

「ふむ。そう言いながらも、うかぬ顔をしておるのは、なにゆえじゃ。さいぜん黙りこんだのも同じ理由のように思えてならぬ。この場限りのこととして、話せ。篠田卯十郎の狙いは、他にあると考えておるのか」

「今はなんとも言えぬ」

と、左門に目を向ける。

「家中の者たちの吉原通いにつきましては、どう思われますか」
「ひと月、千両か」
上役の唇には、皮肉な笑いが漂っていた。
「千両まではいかぬやもしれぬが、水原家の下士が遊んでおるのは間違いない。なれど、良き密談の場であろう。盗み聞かれる懸念が少ないゆえ」
「それはどうでございましょうか。遊女に金をつかませれば、密談の内容を知ることができまする。あるいは紀伊家が放った忍びが、屋根裏に潜んで盗み聞くやもしれませぬ。良き密談の場とは、言えぬのではありますまいか」
一角の反論に、左門は意味ありげな笑みを返した。
「いや、あれ以上、良き密談の場はあるまい」
「まさか」
数之進は推測まじりの問いかけを発する。
「水原家御用達の遊女屋を営んでいるのは、篠田卯十郎なのですか」
「なに？」
一角の驚きを示すように、湯殿の湯が動いた。が、すぐにそれはおさまって、重苦しい静けさに覆われる。ひと月に千両、支払う話自体、桁外れの話だが、卯十郎の財力はそんなも

のではなかった。

——この世にあるすべてのものを、買える男なのではないか。

数之進の胸には、またもや、とんでもない想像が湧いたが、口にはしない。沈黙を破るように訊いた。

「忍びのことも気になります。水原家の上屋敷の床下に忍びこんでいたのは、おそらく紀伊家が放った忍びだと思いますが」

「聞いていたのは、おそらく『手暗衆』の会話だろうが、あるいはわざと聞かせていたやもしれぬ、か」

上役が先んじて言った。

「はい。その可能性もあるのではないかと」

「聞かせて、なんとする。たいした話はしていなかったではないか。篠田卯十郎を非難していたゆえ、あの六人衆は篠田卯十郎に敵対する派閥、仮に山村派とでもしておくか。だれが殿の味方か敵かも、まだわからぬからな。山村派は篠田派とは敵対関係にある、ということがわかるぐらいで、いや、待てよ」

一角は首を傾げて、腕を組む。

「敵対関係にあることを教えたかった、のか？」

ゆえに、わざと聞かせたのではないか。六人衆は忍びの存在を知ったうえで、数之進との話に臨んだのではないか。

答えない数之進に焦れて、さらに言った。

「なれど、忍びが床下にいることなど、隠居爺どもにわかるはずがない」

「それを知る者が、伝えたのやもしれぬ」

「ますますわけがわからぬわ。いったい、だれが殿のお味方で、だれが敵なのじゃ。元勘定頭を含む六人は……」

「生田様。そろそろお支度をなさいませんと」

石榴口に市蔵が現れた。数之進と一角は、午頃までに、市ヶ谷御門の外の上屋敷に戻らなければならない。

「極楽から、戦場か」

呟いた一角と、先に湯殿を出る。

「鳥海様。われらはお先に失礼いたします」

「気をつけよ。わしも少し遅れて、ここを出る。二人の後を追うゆえ」

「はい」

頼もしい守りを受けたものの、いっそう気持ちが引き締まる。脱衣場にいた市蔵が、乾い

た手拭いを渡した。

「村上様のお陰で、熱海の湯を楽しんでいただけることになりました。ありがたいことと思っております」

「わたしからも今一度、礼を言うておくが、流行っているのはなによりだ。臨時雇いとはいえ、流し男を使うとはな。市蔵さんの気遣い、嬉しく思うておる」

「は？」

市蔵は一瞬、返事に詰まる。

「あの流し男は、鳥海様のご家中と言っておりましたが、いえ、あの、主の背中を流すのは、自分の役目と、それで」

しどろもどろの言葉は、二人の耳に届かない。篠田卯十郎の手の者か。あるいは……卯十郎自身だったのではないだろうか。

「手暗師か」

数之進は苦い思いを噛みしめている。

頬かむりした手拭いの下の顔は、どうしても思い出せなかった。

第四章　謀（はかりごと）の音

一

姿を現さない篠田卯十郎。

按摩男は、手下なのか。それとも卯十郎自身だったのか。

後手後手にまわっているとしか思えない流れを、なんとかして変えなければならない。数之進は上屋敷に戻るのを遅らせることにした。〈達磨湯〉を出た後、日本橋住吉町にふたたび足を運んでいる。

金貸しの友吉の家を、向かいの蕎麦（そば）屋の二階から見張っていた。一角と左門、やや遅れて〈達磨湯〉に姿を見せた配下が二人、同席している。

時刻は九つ半（午後一時）ぐらいだろうか。

「この世のすべてを買える男。それが公儀内における篠田卯十郎の評価のようにござりま

す」

左門の配下は告げた。苦々しげな口調だった。

「ご老中や若年寄はむろんのこと、大目付、目付といったお歴々までもが、同じ噂話を口にしておられるとか。鯨商人、あるいは商人将軍とまで言われているようです。巨大すぎて喩えられぬ京商人とも呼ばれておる由」

儲け話を見つけるや、片っ端から呑みこんでは、巧みに小判を生み出す才覚の持ち主。商人としては天下一であるに違いない。大商人のさらに上、桁外れの鯨商人や京商人という表現は、似合いすぎていて反論しようがなかった。手に入れられないものなど、卯十郎にはないのではあるまいか。

「十年ほど前、水原家には借財が二万両もあったとか」

続けて発せられた報告に、数之進と一角は目を剝いた。

「二万両でござるか」

「いや、数之進の姉君たちもかないませぬな。前土佐守様は、いったい、なにに使われたのじゃ」

「待て。十年前と言えば、篠田卯十郎が奉公したあたりだ。もしや、わずか十年で借財を返したのであろうか」

問いかけになった数之進の言葉に、配下のひとりは小さく首を振る。
「十年ではございませぬ。借財は、わずか五年で完済した由。あとの五年で市ヶ谷原町の下屋敷を完成させたようです」
「なんと」
二の句が継げなくなっていた。十年でも早いと思う額を、たった五年で片づけるとは、と、もはや、返す言葉をなくしている。
「さらに、もうひとつ、気になる話も聞きました」
もうひとりの配下が続けた。
「どうも篠田卯十郎は、不例に陥った由。どのような病かはわかりませぬが、一時期、かなり危ない状態になったとか。もしかすると」
「暗殺されかけたのやもしれぬ、か」
一角が継いだ。
「湯屋では言えませんなんだが、それがしが仕入れた話によりますと、土佐守忠道様には、紀伊家の江戸家老から見合いの話が持ちかけられている由。むろん紀伊家の命でございましょうが、後ろで糸を引いておりますのは、篠田卯十郎やもしれぬと思いました次第」
「主家との縁組みではないのが、いささか物足りなく感じられるな。殿はいかが思うておら

れるのか」

数之進は訊き返した。

「乗り気ではないご様子とのことであった。水原家は権現様の時代から続く由緒ある譜代大名家。おまえが言うたように、格の違いが気に入らぬのやもしれぬ。このあたりの事情は、もう少し調べてみるとしよう」

「奥女中か」

「さよう。すでにわたりをつけたゆえ、多少なりとも詳しい話を聞けるとは思うがな。まずは千両智恵の立花じゃ。おまえも殿にお目通りせねばならぬ。それが叶うよう、出入りの大工と左官屋の尻を叩いてやろうではないか」

「大工と左官屋を使って、花を活けるのか？」

左門の問いかけには、曖昧な笑みで応えた。

「見立て、でございます」

「ほう、見立てるのか。なるほどのう。わしも土佐守様の屋敷で花見をしたいものじゃ。忍びこんで眺めるとしよう」

「鳥海様も篠田卯十郎に負けず劣らずの神出鬼没ぶり。大工にでも化けて忍びこまれまするか。よい勝負やもしれませぬな、と、出て来た」

窓から向かいの家を見ていた一角の表情が緊張する。

「先程、訪れた男たちが帰るぞ」

友吉の家から三人の男が現れた。裕福な商人と思しき男に、番頭格、あるいは手代といった感じの男が従い、下男を連れている。だが、訪れたとき、下男は一緒ではなかった。友吉の手下かもしれない。

「尾行けろ」

左門の命で、二人の配下が下に降りて行った。尾行けた先に卯十郎がいたとしても、驚きはしないが、はたして、どのような顔立ちをしているのか。湯屋にいた流し男が卯十郎自身だったら……。

「迂闊でござりました」

数之進は何度目かの言葉を口にした。

「用心せねばならぬと思うておりましたものを」

「案ずることはない。たいした話はしておらぬ。聞かれたところで、どうということのない話じゃ」

「篠田卯十郎が化けていたのでしょうか」

「戸村三之助とは、声が違うように思えなくもない」

一角が応えて、言った。

「背丈は同じぐらいだったように思うが、なんというても湯屋の中じゃ。素っ裸のうえ、按摩術で身も心も蕩かされていたからな。油断しきっていたところを狙われてしもうたわ。なさけない話だが、盗っ人かむりをしていた、ということぐらいしか憶えておらぬ」

「わたしも同じだ。〈達磨湯〉はわれらの縄張りゆえ、よもや敵方の者が入りこむとは考えてもおらなんだ。それが大きな過ちよ」

「なれど、案ずるな。いやな気配はしなかった。さらに、これだけわれらの暮らしを知っているのはすなわち、尾行けられていたのだと思うが、おれはまったく気づかなんだ。つまり、敵意がなかったということよ。少なくとも、あの流し男は、われらの敵ではないと思うがな」

「一角の言うとおりじゃ」

左門が言い添えた。

「繰り返しになるが、気にすることはない。向こうも顔ぶれを確かめる程度だったのであろう。この混乱こそが、敵の狙いなのやもしれぬ。雑念は千両智恵の妨げになるだけじゃ。この場で忘れるがよい」

二度目の慰めに、小さく頷き返して、立ちあがる。

「われらはそろそろ上屋敷に戻ります」
「気をつけるがよい。配下がまた田辺新九郎の姿を見かけた由。白昼堂々、襲うやもしれぬ。用心のうえにも用心じゃ」
上役は不安げだった。友吉の家の見張り役として、だれかひとり残らなければならない。人手不足ゆえ、左門がその役目を続けるしかないのだった。
「お言葉、肝に銘じます」
友を促して、蕎麦屋の階段を降りる。どんなに急いでも市ヶ谷御門の外の上屋敷に着く頃には、夕餉の時刻になっているだろう。本当は午頃までに上屋敷に戻って、それぞれの職務に戻るつもりだったのだが、とうに刻限を過ぎている。
生真面目な数之進の、焦りと苛立ちが伝わったのだろうか。
「ぶらぶら歩き日和じゃ。のんびり行こうではないか」
一角が軽く肩を叩いた。たったそれだけのことなのに、張り詰めていた気持ちがふっとゆるむ。思わず苦笑いを浮かべていた。
「お見通しか」
「あたりまえではないか。われらは、ふんけつの友ぞ」
刎頸の友をいささか尾籠な駄洒落に変えた。糞と尻は切っても切れぬ間柄、刎頸の友より

も相応しいであろうと、にやにやしている。

「然り」

笑って、肩の力を抜いた。初冬の空は青く晴れわたり、時々、鳶らしき鳥が優雅に舞っている。町は忙しなく人が行き交っているが、要は心の持ち方次第だ。焦ったところでなにかが変わるわけではない。

「それにしても、按摩男はいい腕をしていたな。さいぜんも言うたが、身体だけではのうて、心まで蕩けそうなほぐし方であったわ。篠田卯十郎は、彼の者に毎日、手当てを受けているのやもしれぬ」

一角は肩越しに振り向き、蕎麦屋の二階から顔を突き出している左門に、さりげなく会釈する。数之進もそれに倣った後、歩きながら言葉を継いだ。

「さて、それはどうであろうか」

「按摩男が卯十郎自身ということもありうる、か」

「うむ」

「我が友の憂い顔には、数多くの悩みが浮かびあがっておる。鳥海様にもお話しできなんだ事柄とはなんじゃ。おれにだけは話してみろ」

「鯨商人よ」

口にするだけで鳥肌が立った。卯十郎の、真の謀とは、なんなのか。水原家を牛耳り、譜代大名の一家として、水原家を独立させる。あわよくば紀伊家乗っ取りも企んでいるかもしれない。だが、本当にそれだけだろうか。

「言うてみろ。話すだけでも楽になるぞ」

小声で一角が促した。二人は思いつくまま道を進み、とりあえず神田川に向かっている。どうせ遅くなったのだからと、数之進はようやく開き直っていた。

「篠田卯十郎には、巨きな謀があるように思えてならぬ」

「巨きな謀とはなんじゃ」

「なんと言うても、この世のすべてを買える男だからな。手に入らぬものはあるまい。さよう、望めば公方様になることも……」

いきなり数之進は突き飛ばされた。かろうじて尻もちをつくことは免れたが、数之進を突き飛ばすと同時に、一角は刀を抜き放っている。振り降ろされた刀を受け止めて弾き返した。

「走れ！」

友の叫びに応えたのは、行き交っていた人々だった。我先にと争って、逃げる。二人のまわりに不気味な空間ができた。

「きさまか」

一角は唸るように言った。

「田辺新九郎」

と、眼前の男を睨みつける。もとは江戸柳生の優れた高弟であり、御算用者を狙う刺客だった新九郎だが、数之進から受けた傷によって、それまでの栄光をすべて失っていた。

とはいえ、運が悪ければ逆の事態になっていた可能性もある。要は逆恨みにすぎないのだが、新九郎は、怒りと怨みを全部、数之進に向けていた。

「今日が貴様の命日よ」

叩きつけた言葉には力がない。胸に傷を負った後遺症なのかもしれなかった。が、両眼にあらん限りの憎しみをこめている。四人の侍が、新九郎の後ろに従っていた。すでに刀を抜き、じりじりと間合いを詰めて来る。

「田辺殿」

数之進は懸命に落ち着かせようとする。

「無意味な争いは……」

きえぇっと奇声が轟いた。とっさに数之進も刀を抜いている。躍りかかった新九郎を、一角が防いで押し返した。他の四人もいっせいに襲いかかって来る。数之進は一角と背中合わせになった。

「おまえは隙を見て、逃げろ」
「わたしはおぬしと戦う」
「鳥海様を呼んで来るのじゃ」
「わかった」
という会話は途切れとぎれにかわされた。数之進と一角は脇差も抜いて、いやおうなく二刀流の構えを取っている。かろうじて防いでいたが、いつまで無事でいられるか。新九郎を含む五人は、背中合わせになっている二人を引き離そうとしていた。踏みこんだひとりの刀が、数之進の脇腹を掠める。
「うっ」
体勢をくずしかけたが、なんとか踏ん張った。しかし、新九郎が威嚇の逆袈裟斬りを叩きつける。数之進はよろめき、一角から離れた。そこにひとりが真っ向斬りを叩きつけようとしたが、
「……」
叫ぶ暇もなく崩れ落ちていった。眉間に脇差が突き刺さっていた。
「数之進、一角」
左門が戦いの輪に飛びこんで来る。ひとりに袈裟斬りを叩きつけ、それを逆袈裟斬りに変

化させた。加勢を得て勢いづいた一角が、別の男に真っ向斬りをお見舞いする。致命傷は与えられなかったが、戦意を喪失させるには充分だったかもしれない。

「ひ、退け」

新九郎の声で逃走に転じた。斃れたひとりを残して、走り去る。眉間に突き立ったままの脇差を、一角が引き抜いた。

「危ないところでござった」

左門に脇差を渡しながら叫んだ。

「両目付の鳥海左門様じゃ。われら二人はその配下、役人の手配を頼む」

近くの見世の主が、すぐさま奉公人らしき男を番屋に走らせた。数之進は一角とともに、斃れた男を道の端に運ぶ。

「鳥海様。われらのあとを尾行けておられたのですか」

訊かずにいられなかった。騒ぎを聞きつけて来たにしては、着くのが早すぎるように思えた。

「いや。蕎麦屋に使いの者が来たのじゃ。二人を狙う男たちがいる。尾行けられているゆえ、追いかけた方がよいとな」

左門の答えに、数之進は友と顔を見合わせる。

助けてくれたのはだれなのか。
鯨商人だろうか。
——わからぬ。
真意が読めない。
もし、卯十郎なのだとしたら……千両智恵の持ち主であるのは間違いなかった。後手後手にまわっているような気がするものの、ふつふつと闘争心が湧いてくる。
この役目に就いて以来、初めて出会った好敵手に、数之進は、不思議な親しさを覚えていた。

二

翌日、勘定方ではいつものように、算盤の珠を弾く音だけがひびいている。子守歌のような心地よさに、つい役目を忘れそうになったが、
——やはり、これは謀の音やもしれぬ。
頬を軽く叩いて、数之進は気合いを高めた。先刻から隣席の河合牧太を、ちらちらと盗み見ている。糸のような細い目、無駄口を叩かない男、さらにあまり表情がない。年は二十六、七に見えるが、老けているだけではないのか。もしや、牧太こそが、水原土佐守忠道なので

はないか。

「集中なさるのが宜しかろうと存じます」

不意に牧太が言った。

「じきに鐘が鳴りますゆえ」

その言葉が終わらないうちに、八つ（午後二時）を告げる前の捨て鐘が鳴り出した。いつものように、ぴたりと算盤の珠を弾く音が止まる。その後もこれまた常と変わらない。文机の上を片づけ、先を争うようにして、同役たちは部屋を出て行った。残ったのは、数之進と牧太、そして、前席の左馬助だけである。

「それで」

ふたたび牧太が口を開いた。

「いかがなされましたか。わからないことでもありましたか」

「いえ、昨日は戻るのが遅くなりましたので、お詫びしようと思うたのでございます。機を見ていた次第です」

糸のように細い目を、しみじみ見つめている。上役の左門から聞いた前土佐守（さきのとさのかみ）の顔立ちが甦っていた。

〝目が糸のように細い男であったな。背は高からず、低からず。炭屋と揶揄されるほどの遣

り手だったのは間違いないが、印象はきわめて薄い男よ。喋ると小判が減るとでも思うていたのか、無駄口を叩かない一面も持っていた〟

河合牧太があてはまる。やはり、この男こそが、土佐守忠道なのではないか。背はひょろりと高いが、それ以外に関しては……。

「わたしの顔に、なにかついておりますか」

牧太が訝しげに問いかけた。

「あ、いえ、ご無礼つかまつりました。あらためて、お詫びいたします。半日ほど帰参が遅れました。世話役の河合殿には、ご心労とご迷惑をおかけいたしまして、申し訳ありませぬ」

「気にすることはない」

左馬助が振り向いた。

「して、姉君のご容態はいかがであったのじゃ。噂によると、貴公とはまるで似ておらぬ姉君である由。つまり、美人なのであろう。美人は病むとなお美しい。わしも同道したかったわい」

空咳の制止では効かぬと思ったに違いない。

「小林殿」

牧太が遠慮がちに窘めた。

「おお、ちと口が過ぎたか。すまぬ。美人の噂というのは、どこからともなく耳に入るものでな。はて、この男の姉君がと、わしも先程から幾度となく振り返っていた次第よ」

左馬助に言われたが、自分もまた見られていたとは思いもしないことだった。牧太に気持ちを向けるあまり、我が身がおろそかになるのは未熟な証。反省しつつ答える。

「小林殿のお気遣い、いたみいります。姉は二人いるのですが、二番目の姉の容態が思わしくありませぬ。これからも時々、様子を見に行かねばならぬと思います」

虚実ないまぜで様子を見た。この後も度々抜け出さなければならない。返事を聞いた左馬助は、口を開きかけたが、牧太の視線が気になったのだろう。

「さようか」

そう答えるに留めた。

――わたしの家の様子を知っている。

数之進は表情を読んだ。なにか言いかけたのは、姉は二人ではなく、三人ではないのかという問いかけだったのではないか。能州の実家に長女の伊智、江戸に来ているのは、二女の冨美と三女の三紗。左馬助はやはり正直者のようだった。

「世話のやける姉君たちであるとか。騒ぎを起こすのは日常茶飯事、貴公はその尻ぬぐいに

追われている由。美人であればあったで大変よの」

またもや正直な言葉が出る。事実だが、他人に言われると妙に腹が立つものだ。一角も悪態をつくが、友なりに数之進を庇って出る言葉。それに盟友と左馬助では、当然、覚える感情も違ってくる。

――これだ。

ふと閃いた。

隣席の同役が、土佐守忠道かどうかを確かめる策を、すぐさま実行に移した。

「まことに苦労が絶えません。されど、悩むのはそれがしだけではありますまい。殿のご母堂、ご落飾なされた清照院様ですが、我が姉たちとは、比べものにならぬほどの艶麗さをたたえておられると伺いました」

小声で続ける。

「その美貌を武器に前殿を虜にした挙げ句、密かにご正室を闇に葬ったとか。色仕掛けが得意な悪女、傾城の美女と聞きましたが、まことでございましょうか」

愛妾とはいえ、今は奥御殿や下屋敷の女主であり、若き当主の母である。悪し様に言うのはいやだったが、牧太に真っ直ぐ目をあてていた。

表情は……変わらない。かすかに右頬が、ぴくりと動いたように見えたが、その程度の変

化だった。

「かような噂をだれに聞いたのじゃ」

横から左馬助が助け船を出した。

「根も葉もない噂話よ。つまらぬ話をする者がおるものじゃ」

渋面になって、さらに訴える。

「清照院様は、女子ながらも政への関心が深く、ご領地の民のことをなにより気にかけておられる。鯨を獲る話がお好きでの。『左馬助、あれを』と仰せになられるのも珍しくない。殿にもご領地の民を慈しんでほしいがゆえではあるまいか。さよう、機会があれば、下屋敷に案内して進ぜよう。わしが清照院様にお引き合わせしようではないか」

「是非、お願いいたします」

数之進は話を合わせた。

「わたしはこれで失礼いたします」

牧太は帳簿を揃えると、会釈をして、立ちあがる。淡々としていた。数之進は落胆とともに、ひょろりとした後ろ姿を見送っている。投げた大石は、波紋を引き起こすことなく、静かに消えたように思ったのだが……。

「怒っていたわい」

ぼそっと左馬助が言った。
「そうは見えませんでしたが」
数之進は首を傾げる。
「右の頬がほんの少し動いたではないか。あやつはめったに表情を変えぬが、怒ったときだけは右の頬が動くのじゃ。さらに顔色も白っぽくなる」
「色はもともと白いように思えます」
「ああ言えば、こう言うか。長年、付き合うておるわしが言うのだから間違いない。河合牧太はかなり気分を害していた」
「なぜですか。河合殿は、清照院様に憧れておられるのですか」
「そんなところよ。貴公がとんでもない話をしたゆえ、怒り心頭なのであろう。後ろ姿にもそれが表れていたわい。やすやすと挑発にのるとは愚かのきわみじゃ」
ちらりと数之進に目を投げた。
「わしの真似じゃな」
姉たちの悪口を言ったのは挑発だったのだと告げている。どこまで信用できるのか。正直者のように思えるが、今ひとつ自信が持てない。
「小林殿は殿のお味方ですか」

思いきって問いかけた。

「いかにも御家老の山村派じゃ」

あっさりと答える。あまりにも簡単に応じられると、逆に裏を読みたくなるのは、御役目に染まりすぎたからだろうか。

「それでは、家老格の篠田卯十郎様とは」

「言うまでもあるまい、快く思うてはおらぬわ。なれど、向こうもそうであろう。われらのような古株を叩き潰せば、水原家を手中に収められるからの」

左馬助はぎろりと目を剝いた。

「なれど、あやつの望みは、我が水原家のみに非ず。主家を乗っ取るつもりよ。紀伊家を乗っ取って、幕府の中枢に食いこむ。小判さえあれば、なんでもできると言うのが、卯十郎の口癖じゃ」

ふんと忌々しげに鼻を鳴らした。

「この世のすべてを買える男、か。人の心も金で買えると、公言して憚らぬ。商人はどこまでいっても商人よの。性根がくさっておる。侍の矜持など持ち合わせておらぬわ」

辛辣な口調だったが、話半分に受け止めている。左馬助は過日、自分たちは『手暗衆』であり、卯十郎は『手暗師』であると告げていた。まるで仲間だと示したようなあれを、思い

出さずにいられない。

疑惑は胸に秘めて、問いかけを投げる。

「清照院様は、いかがですか。家老格の篠田様をどのように思うておられるのですか」

「嫌うておられるわい。名を聞くのもおぞましいと仰せになられるのが常よ」

「つまり、当家は、山村派と篠田派に分かれていると」

「さよう」

またまたあっさり答えた。

「派閥争いに負けて、われらは隠居に追いこまれた。かえすがえすも口惜しいわい。卯十郎はの、小判をばらまき、金で家中の者たちを買うたのよ。なにが質素倹約禁止令じゃ、贅沢令など笑止千万じゃ。なれど、卯十郎が笑うておられるのも今だけであろう。近頃の専横ぶりに渋い顔をしておるのは上様とて同じよ。上様が黙っておられぬわい」

さあ、それはどうだろうか。

数之進は心の中で答えた。卯十郎の小判は、幕府の中枢にも充分すぎるほど行きわたっている。多少、騒ぎが起きても幕府の重臣は口を出さないだろう。見て見ぬふりは、武家の得意技。と心で考えただけだったが、表情に出たのかもしれない。

「言いたいことがありそうじゃな」

左馬助が唇をゆがめた。

「いえ、お説ごもっともと思いました次第。驕る平家はなんとやら、正しき者が正しい評価をされなければ、道理が通りませぬ」

「そのとおりじゃ。ようわかっておる」

肩を叩いた左馬助に、頷き返して、訊いた。

「ときに小林殿。篠田様は、何処におられるのですか」

不例に陥ったことは敢えて口にしない。

「自邸におることが多いと聞いたが、ここ数日は、築地鉄砲洲に足を運んでいるようじゃ。憶えておろう。水原家御用達の炭問屋が集まっている場所よ。問屋の主からの付け届けを期待しているのではあるまいか」

「築地鉄砲洲でございますか」

さっそく左門に知らせなければならないが、ついでにさりげなく話を進める。

「篠田様の人相風体などは、いかがでござりましょうか。ご奉公して以来、それがしはまだご尊顔を拝する機会に恵まれておりませぬ。廊下で擦れ違うた折に、粗相をするのではないかと気が気ではありませぬ」

「顔立ちは、さよう、猿に似ておる」

吐き捨てるように言った。愉しげに嘲笑っている。

「二親は見世物小屋の出であるとか。猿の芸でも見せて、日銭を稼いでいたのやもしれぬ。なりふり構わず小判を漁るところにも、生まれの卑しさが表れておるではないか、と、生まれで思い出したわい」

左馬助はいったん言葉を切って、唾を呑みこんだ。年を取ると、話を続けるのにも力が必要になる。大きく深呼吸した後、ふたたび口を開いた。

「貴公は毎朝、廊下に立ち、勘定方の者たちに挨拶をしておるではないか。感心なことよ。ああいう心がけに育ちが出るのじゃ」

「それがしは新参者、顔を憶えていただきたく思い、ご挨拶申しあげております」

真実は異なるが、むろん教えるつもりはない。話が途切れるのを待っていたように、一角が部屋の戸口に姿を見せた。

「殿が生田数之進に会いたいと仰せじゃ。千両智恵の立花が、殊の外、お気に召したご様子でな。すぐさま連れて来いと命じられた次第よ」

歩きながら話していたが、左馬助に気づいて、その場に畏まる。

「これは小林様。ご無礼つかまつった」

「隠居爺に礼を尽くすとは感心なことじゃ。盟友は似るものらしいの。殿がお目通りをお許

しあそばされたとの話じゃが、わしも同席いたすとしよう。冥土の土産に千両智恵の立花とやらを拝見いたそうではないか」

左馬助は言い、返事も聞かずに立ちあがった。すたすたと廊下に向かって歩き始める。それを横目で見ながら、一角が隣に来た。

「鳥海様から連絡が来た。金貸しの友吉の家に来た者たちは、築地鉄砲洲の炭問屋に戻ったとか。篠田卯十郎は、どうやら炭問屋も何軒か営んでいるらしい。こうなると江戸の半分ほどの商家は、やつの持ち物やもしれぬな」

「吉原に数軒の遊女屋、そして、炭問屋か。まさに鯨商人。どれほどの資産があるのか、想像もできぬ」

「案ずるな。おまえにあって、やつにないものが、ひとつだけある」

一角は得意げに言った。問いかけの眼差しを投げる数之進に、胸を張って答える。

「無私の心よ。おまえは身を擲って民を助けるが、卯十郎はそれをしなかった。ゆえに巨万の富を得たということよ。おまえとて、鯨商人になれる才覚を持っている。まあ、特になりたいとは思わぬやもしれぬが」

友の励ましに、左馬助の呼びかけが重なる。

「なにをしておるのじゃ」

「すぐに参ります」
立ちあがって、廊下の方に歩いて行った。
篠田卯十郎は何処に？
我知らず、擦れ違う藩士に目を走らせている。

三

「おお、これは」
左馬助は、中奥の御座所の廊下で足を止めた。数之進が選んだのは、御座所からよく見える位置に植えられた一本の山茶花だ。満開の紅い花を咲かせている木の根元を、一尺五寸（四十五センチ）ほどの長さの板で、丸く囲ってくれるよう大工に頼んだ後、左官屋に土壁を塗るごとく、板の表面を茶色の土で化粧してもらっている。
つまり、山茶花の木の根元に、素焼きに見える鉢植えもどきを与えたのだった。
「立花に見立てたか」
続けて左馬助は唸るように言った。紅い山茶花は、茶色い素焼きの鉢植えから枝を伸ばしているように見える。むろん遠目に見なければその美はわからない。御座所の廊下から見るのが、ちょうどいい場所の山茶花にしたのは言うまでもなかった。

「見事であろう、左馬助」

忠道自ら廊下に出て来る。数之進と一角、さらに老藩士もその場に畏まった。

「ははっ、かような立花は初めて目にいたしました次第。棺桶に片足を突っ込んでおります老いぼれにとりましては、なによりの目の保養。眼福でござります。寿命が延びるのは間違いございませぬ」

左馬助は特に伺いをたてることなく直答していた。それだけでも元勘定頭に対する忠道の寵愛ぶりが見て取れる。前当主の時代から、自称『手暗衆』たちは目をかけられていたのかもしれない。

「さよう。左馬助には長生きしてもらわねばならぬ。父亡き今、余にとって、そちは父同然だからの」

「殿」

面をあげた年寄りの目には、うっすらと涙が滲んでいる。見えない絆が、主従の間にしっかりと結ばれているように思えた。忠道を揶揄するように言っていたのは、絆があればこそなのかもしれない。だが、元勘定頭という役職について、数之進は疑問を覚えている。

――小林殿は、元国家老ではないのか。

あるいは勘定頭も兼ねていたのかもしれない。さらに疑うならば、今も国家老であり、勘

定頭なのではないか。

国許の新宮の調べは、いささか心許ない状況だった。村上李兵衛の不在も少なからず影響している。口の悪い一角は、李兵衛の不在は関わりないと言うかもしれないが、いつも以上に自分の勘が頼りだった。

「生田数之進であったか」

廊下に座ろうとした忠道に、素早く一角が床几を差し出した。数之進は答えてよいものかと、左馬助に視線で問いかける。

「お答えせよ。今日は内々のお目通りじゃ。殿は、気さくなお人柄ゆえ、お取り合いといった大仰なやり方を好まれぬ」

取り次ぎ役は要らぬと言ったが、

「は」

それでも畏まって、数之進は告げた。

「直答をお許しいただきまして恐悦至極に存じます。生田数之進にござります」

床几に座る忠道の斜め後ろに控えている。本当は座敷で正面から顔を見たかったのだが、贅沢は言えなかった。

「左馬助ではないが、余もかような立花は初めて見た。一角に聞いた話では、千両智恵で江

戸の民を助けておるそうじゃな」

「いえ、助けられる方が多いように感じております」

ちらちらと目をあげてみたが、斜め後ろからでは顔立ちを確かめるところまではいかない。色が白いことが、どうにかわかる程度だった。

当主としての力量はどの程度だろうか。そもそもこの忠道は本物の土佐守なのか。はたまた忠道は藩士に紛れこんでいるのか。もしや、河合牧太が真の土佐守なのか。

さまざまな疑問は胸の奥に仕舞い込み、次の言葉を待っている。

「余も早う新宮に行ってみたいものじゃ。鯨を獲るところを見てみたい」

忠道は、独り言のように呟いた。いかにも二十歳の若者らしい願望がこめられている。左馬助から勇壮な鯨獲りの様子を聞く度、期待に胸をふくらませているに違いない。

「それがしも命あるうちに、是非、お供つかまつりたく思いまする。なれど、近頃は大きな鰐魚（わにざめ）が頻々（ひんぴん）と現れている由。すでに何人かの漁師が、命を落としたと聞き申した。退治する策はないものかと頭を悩ませておりまする」

話を振るように、左馬助は、数之進を見た。意図を感じ取ったのだろう、

「千両智恵の出番じゃ」

忠道も目を向ける。

「いかがであろうな。鰐魚を退治する良い策は考えつかぬか」
「申し訳ございませぬ。それがしは何事も人より遅いため、すぐには思いつきませぬ」
「恋道もおくてでござりまして」
一角がすかさず場をなごませる。
「なれど、すでに千両智恵は働き始めておりまする。そして、あるとき不意に『閃く』のでござる。殿におかれましては、ちとお待ちいただきたく思います次第」
「承知した」
小さな笑いが広がっていた。鯨の話が出たついでとばかりに、数之進は問いかけを口にする。
「鯨の油は明かりやウンカ退治に使われておりますが、骨などはどのように使われているのでござりますか」
忠道に向けて発したものだが、「左馬助」と答えをゆだねた。鯨獲りには興味があっても、領地の政にはあまり明るくないようだ。それを確かめるための問いかけに、左馬助は渋面で応じた。
「さて、鯨については話したように思うが、わしの勘違いやもしれぬ。鯨の骨は頑丈での。鎧や半弓、物差し、扇子の骨、からくり人形の仕掛けを動かすゼンマイやバネにも利用され

ておるのじゃ」

「肥料には用いないのですか」

「使うておるわ。鯨の骨は刻んだり、擂り潰したりすると、良肥になる。田畑に一度、入れれば三年は効果があるとされておるのじゃ。特に煙草の肥料としては最適よ」

「麦・大豆・大根は民の主食、あるいは補助食として、重要な意味を持つ作物であると、それがしは考えております。さらに綿・麻・煙草などは衣を作るもの、また自ら楽しむものとして重要でござります。余った分につきましては換金することもできる特産品。鯨の骨をどんどん田畑に用いるのが宜しかろうと存じます次第」

「麦か。そういえば、いつぞや、左馬助が言うていたな。民は麦蒔きに適した時季を、なかなかつかむことができぬ、と。ゆえにここ数年、麦の不作が続いてしもうたと聞いた憶えがある」

忠道はようやく数之進の意図を察したらしい。当主に相応しい面を見せねばという感じの言葉を告げた。

「よう思い出されましたな。確かに、それがしが申しあげました。村の古老が相次いで死んだことと、無関係ではござりませぬ。古老より豊かな知識を伝えられなんだのか、麦は出来の悪い年が続いておりまする」

「おそれながら申しあげます」
数之進は遠慮がちに割って入る。
「申せ」
忠道に促されて、続けた。
「は。それがしの郷里では、『昴（すばる）の山入麦蒔きの旬』という言葉がございます。十月の下旬から十一月頃、昴が夜明けに西の山に入るときこそが、麦蒔きに一番、良いときであると言い伝えられております」
「昴とは、星の昴か」
忠道は驚きの声をあげながら、数之進の方に身体の向きを変えた。真正面の顔を見るのは今しかない。数之進は素早く白い面を盗み見る。
「は」
目はやはり細い。一角が言っていたとおり、公達のようなおっとりとした顔立ちだった。はたして、本物の当主なのか。
「なんと昴がのう。麦蒔きの指針となるか」
手で陽射しを遮りつつ、眩しげに空を見あげている。
「殿は、星を観（み）るのがお好きなのじゃ」

左馬助が補足した。

「さようでござりますか。話が戻るやもしれませぬが、鯨の油はウンカ退治に効果を発揮いたします。なれど、江戸より北の国においては、いまだ知らぬ者が多いのでござります。恥ずかしながら、それがしもそのひとりでござりました。つきましては、広くウンカ退治の話を広めるのが宜しいのではないかと存じます次第」

鯨の油はウンカ退治に効果あり、江戸から北の国にその話を広める、話を広めるのに有効な手だてはないものか。なにか閃きそうなのに浮かばない。すぐそこまで答えが見えているのに手が届かない。数之進はもどかしさを覚えていた。

「鯨の油か。われらの間では、ごく普通にウンカ退治に使われているがの。さて、その話を広めるとなると、どうしたものか。さよう。これも千両智恵じゃな」

左馬助の言葉に、苦笑いした数之進の腕を、隣にいた一角が突いた。視線で示した先を見る。山村増右衛門が、こちらに歩いて来た。

「増右衛門」

忠道は破顔する。増右衛門が偶然、来たとは思えない。御算用者の動きを知って、応援部隊に名乗りをあげたのではないか。

——第二幕の始まりか。

数之進は気合いを入れ直した。

四

「殿にご相談いたしたき儀がござりまして、まかりこしました」

開口一番、増右衛門は言った。御座所に戻って、忠道は上段の間、数之進たちは下座、左馬助と増右衛門は、上段の間の傍らに座している。

「手上高と手上免のことでござります。年内に通達いたしたく思いますが、いかがでございましょうか」

いきなり政の話を出した。手上高や手上免は、民が自主的に高や免率の引き上げを申し出ることだが、それはあくまでも表向きのことであり、実際は強制だった。隠退したと言いながら、堂々と政の話をするあたりに、六人衆の思惑が見え隠れしている。

実権はわれらにありと示しているように思えた。

「政の話はようわからぬ。増右衛門にまかせるゆえ、好きにするがよい」

「僭越ながら申しあげます」

数之進は腹の底から声を張りあげる。許しを得ぬまま、ずいと膝で前に進み出た。

「『民富めば国富む、民知れば国栄える』と申します。無理な高や税の引きあげは、民を疲

弊させ、強いては国を疲弊させまする。これだけ儲けが出ているのに、なにゆえ、さらに税を増やすのでござりましょうか」

思わず増右衛門を睨みつけていた。

「民の意欲を促すには、縮(しま)りを加えることなく、生産を奨励し、保護することだと、それがしは考えます次第。また当主は良き人材を登用して、政にあたるのが『人君(じんくん)の大智(たいち)』と思いまする。なれど、当家の現状は、歌舞伎や遊里への関心ばかりが高まっているように思えてなりませぬ。節度や分限を失い、文武の道を忘れているのではありませぬか。いかがお考えあそばされますか、殿。御家老のご存念やいかに」

ほとんど腰を浮かせるようにして、忠道と増右衛門に迫った。少し熱くなりすぎたかもしれない。忠道は呆気にとられたように口を開けていた。

「座れ、数之進。殿の御前(おんまえ)ぞ」

一角の言葉で、はっと我に返る。

「申し訳ありませぬ。ご無礼つかまつりました」

畏まって平伏した。ふたたび小さな笑いが広がる。責めるようなものではない、包みこむようなあたたかさに満ちていた。

「増右衛門」

最初に口を開いたのは忠道だった。
「は」
「先程の件については、今一度、慎重に吟味するのがよかろう。当家の勘定方が、厳しい目を光らせておるゆえ、迂闊なことはできぬ」
「御意」
笑いながら増右衛門は答えた。数之進はまだ顔をあげられない。平伏したまま、畏まっている。
「つかぬことを訊ねるが、生田数之進」
忠道が口を開いた。
「ははっ」
「先程、増右衛門が言うたように、余は星を観るのが好きでの。方角を確かめられる羅針盤がほしいのだが、勘定方で手配できるか」
羅針盤は、磁石のことである。舟時計とも呼ばれていた。
「手配できると思いますが、それがしの一存では決めかねまする」
「わしが頭に言うておく」
「口を挟むでない、増右衛門。そちではのうて、生田数之進に頼みたいのじゃ。できれば

上品のものがよい。どこの羅針盤がよかろうな」

「羅針盤は、信州、奥州、蝦夷の品が、上品とされておりますが、中でも蝦夷のものがよいのではないかと存じます。赤土に埋もれていたような、外面の汚い石がよく、特に鉄錆のあるものが上等品である由。細工を施しますには、一貫目以上の石が必要であるとも聞いた憶えがございます」

「よけいな細工は要らぬ。正確な働きをするものがよい」

「は。明日、勘定頭にお伺いをたてまして、急ぎ、手に入れまする。できるだけ早く殿のお手元にお届けいたします」

「頼んだぞ。そちの手から、余に渡してもらいたいのじゃ。よいな」

「は」

緊張が解けないのは数之進のみ。力みすぎた言動に、今更ながら恥じ入っていたが、忠道は増右衛門や左馬助と談笑していた。主に清照院の話だったが、「ときに」と増右衛門が告げる。

「殿。紀伊家からのご縁談のことでござりますが」

その言葉で御座所の空気が一変した。数之進は、冷たい手で頬を撫でられたような感じを覚えた。おそるおそる目をあげる。

「聞きとうない」
忠道は言った。吐き捨てるような口調だった。
「なれど」
「奥御殿に参る」
「殿、お待ちくだされ」
増右衛門の呼びかけは、虚しくひびくばかり。上段の間から辞した忠道を、廊下に出て追いかけた。御座所には気まずい空気が流れる。
「殿は、ご愛妾の佐都様をご寵愛なされておるのじゃ」
訊いてもいないのに左馬助が言った。
「ご正室にしたい、などと無理難題を申されておる。主家の紀伊家との繋がりを、いっそう強めねばならぬときだというに」
「左馬助殿」
増右衛門が戻って来る。
「紀伊家からの使いが、おいであそばされた由。殿は急な病ということにするしかありませぬ。幸いにも篠田卯十郎は不在の様子。われらが会うて、話をするのが宜しかろうと存ずる」

小声で左馬助に告げた。
「承知いたした。わしが他の者にも声をかけよう」
「お願いいたしまする」
退出する増右衛門を、数之進と一角は平伏して見送った。左馬助も出て行くと思ったのだが、すぐには立ちあがらない。
「殿のご縁談につきまして、清照院様は、いかがお考えあそばされているのですか」
数之進は思いきって問いかけた。
「殿が思うようにさせてやりたい、とまあ、かように仰せじゃ。ご本心やもしれぬが、意に染まぬ婚姻は武家のならいよ。佐都様は今までどおり、ご愛妾としてご寵愛なさればよいだけのことなのじゃが」
寂しげな苦笑を押しあげる。
「火のような恋心は、お母君譲りやもしれぬ」
「それは」
問いかけようとしたが、左馬助はそれを許さない。
「下屋敷への案内は、明日じゃ。よいな」
ぴしゃりと言った。

「ははっ」
二人は三度、畏まる。老藩士が立ち去るのを待っていたに違いない。
「来い」
一角が先に立って、御座所を出た。
「どこへ行くのだ」
「奥御殿よ」
「忍びこむのか」
「堂々と入るわけにはいくまい。なれど、ここの奥御殿には町娘が多くてな。堅苦しい武家の奥御殿とは、いささか趣が異なっておる。案外、歓迎してくれるやもしれぬ」
「そうであればよいが」
上屋敷は、にわかに慌ただしくなっている。ふだんはみな吉原に行ってしまい、無人のような屋敷になってしまうのだが、今日は尋常ではない数の藩士が忙しげに廊下を行き交っていた。
「忍びこむのは今よ」
中庭に降りた一角に、数之進も続いた。
迫りくる夕闇が、隠密行動の手助けをしてくれるよう祈りながらだったが……。

五

「さあ、生田様もご酒を召しあがれ」
「生田様は甘いものの方がよいのではござりませぬか」
「お腹がお空きなのですよ。こちらの膳をどうぞ」
奥女中たちに取り囲まれて、数之進は呆気にとられている。一角がわたりをつけた奥女中に、すぐ一室に案内されて思いもかけぬ小さな宴となっていた。集まっている女は、全部で六人。数之進と一角は、それぞれ三人ずつの饗応を受けている。
贅沢令が通達されているだけあって、酒も肴も上等だった。女中たちの着物にも、金糸銀糸の刺繍がふんだんに用いられている。簪は鼈甲や珊瑚、中には銀と思しき簪を挿している者もいた。
「われらを奥御殿にあげたことが、殿に知られたらどうなることか」
数之進は、いつものように苦労性と貧乏性の業が疼いている。一角は苦笑いするだけでなにも言わないが、障子の近くに座っていた。部屋の片隅の衝立を顎で指した後、少しだけ戸を開けて外の様子を窺っている。
――人が来たときには、衝立の陰に隠れればよいか。

それでも消えない不安を感じ取ったに違いない。
「ご案じなされますな」
ひとりが言った。
「殿は、佐都のお方様に夢中でございます。お渡りになられた夜は、お部屋から出られることはありません。その間、わたくしたちは羽をのばせるというわけです」
「いつものばしているように思えるが」
ぽつりと出た呟きに、
「なにか？」
冷ややかな問いかけを返された。
「いや、なんでもない。それほどに殿は、お方様のことを大切に想うておられるのか」
答えて、あらたな話を振る。かつて数之進も、潜入先の姫に恋をしたことがある。身分違いとわかっていながら、想いを止めることはできなかった。できれば二人を結ばせてやりたいと思うのは、清照院だけではない。
「はい。佐都様さえいれば、なにも要らぬと仰せになります」
「熱くて、熱くて、とけそうになりますもの」
「お二人のそばに行くと、焦げてしまいそうです」

三人は笑って、即興劇を始めた。
「佐都。余にはそなたしか見えぬ。そなたしか要らぬ」
「殿。わたくしも想いは同じでございます」
「なんとかできぬものか。さよう。そなたを左馬助の養女にすれば、正妻にすることもできよう」
「まことですか。まことに、わたくしが殿のご正室に」
「偽りは言わぬ。余にはそなただけじゃ」
「殿」
「と、二人は固く抱き合うのでございました」
ひとりが締めくくると、女中たちはどっと沸いた。数之進は思わず廊下の方を見やる。静かにと手で制した。
「大声を出してはならぬ。気づかれるではないか」
「まあ、気の小さいお方ですこと」
つんと、ひとりが顎をあげた。目つきや細面の顔立ちが、三紗に似ているように思える。もっとも数之進は、気の強い女を見る度、三女が浮かぶのが常だった。
「訊ねたいことがある」

気を取り直して、訊いた。
「まずは佐都のお方様だが、親はなにをしているのか」
「築地鉄砲洲で炭問屋を営んでおられます」
篠田卯十郎の見世と同じ場所だった。あるいは卯十郎が、世話をしたのか。浮かんだ疑問を問いかけに変えた。
「仲立ち役は、篠田様か」
「さあ、わたくしにはわかりません。ここだけの話ですけれど」
声をひそめたため、顔を近づける。
「佐都のお方様は、清照院様と瓜二つなのですよ」
「そう、似ておられますね」
「だって、御家老様が探されたのでしょう、お母君そっくりの女子を」
最後の言葉に、すぐさま問いかけを投げた。
「その御家老様というのは、どちらの御家老様だ。篠田様か、山村様か」
「あら、どちらなのかしら」
「別にどうでもいい話ですもの」
ねえ、と、三人は頷き合っている。一角の方に張りついている三人も、わからないという

ように首を振った。数之進は話を変える。
「殿が情熱的なのは、お母君譲りであるとか。清照院様も昔、激しい恋をなされたのであろうか」
「ええ、聞いたことがあります」
ひとりがまた囁き声になる。
「新宮に暮らしておられたときですが、許嫁がおられた由。親が決めた者同士だったようですが、相愛だったのでしょう」
「わたくしは、もっとすごい話を聞きました」
「もしや、前殿のもとに来られたときすでに、身籠(みごも)っておられたという話ですか」
「なに？」
数之進の杯が、唇の手前で止まる。真剣にならざるをえない話だった。一角が大丈夫だと、だれも来ないのを目顔で告げる。それでも胸が高鳴るのを止められない。
「それは、つまり、こういうことか。殿には父親違いの兄君か姉君がおいでになると」
小さな声ではあるものの、一語、一語、はっきりと告げた。
「はい。兄上様だと伺いました」
女たちは平然と答える。

「二つか三つ、お年上だとか」
「他家に養子に出されたと聞きましたが」
水原家の醜聞を耳にして、数之進は友と顔を見合わせた。おそらく許嫁だった男の子供なのではないだろうか。あるいは夫婦として、すでに所帯を持っていたのかもしれない。世間体を慮って事実をねじまげるのもまた武家の得意技だ。
「相愛の相手は、どうなったのであろうな」
つい我が身を重ね合わせている。
「さあ、どうなったのでしょう。新宮で他の女子と所帯を持ったのではないかしら」
「男なんて薄情ですもの」
「そうそう、新しい女子が現れれば、すぐに忘れますから」
ずきりと胸が痛んだ。
――五瀬様を忘れたわけではない。なれど、仕方ないではないか。
などと心の中で言い訳した。五瀬姫になにかあれば、なにを差し置いても駆けつけようと決めている。だが、生涯、独り身をつらぬく覚悟はできていなかった。
あれこれ考えるときりがない。
「この中に、篠田様のご尊顔を拝した者はいるか」

急いで話を変えた。
「篠田様」
「御家老様よ」
「鯨商人の？」
三人のやりとりに、答えが表れている。
「では、殿の兄君だが、養子先はわからぬか」
「いいえ」
ひとりが即座に答えた。
「兄君様のお話は、ご法度なんです」
「隠れろ」
一角の警告で、さっと緊張する。数之進は転びそうになりながら、衝立の陰に潜りこんだ。
すぐに一角も隣に来る。ほどなく御年寄と思われる女が、座敷の障子を開けた。
「またそなたたちは、かようなところで油を売っているのですね」
声の様子からして、さほど怒っているとは思えない。
「申し訳ありませぬ」
ひとりが代表して答えた。

「すぐに片づけますので」
「片づけるのはあとでよい。殿と佐都様のお姿が見えぬのじゃ。お部屋においであそばされると思うていたのに、どこへおいであそばされたのか」
「お湯殿ではありませんか」
ひとりの言葉に、御年寄らしき女は応えた。
「お探しせよ。表には、紀伊家の使いがおいでになられておる。殿は急な病ということで、お目にかかれぬ旨、御家老が告げた。お二人でまさか中奥に行かれはすまいが、下手にお姿を見られるのはまずい。手分けして、お探しするのじゃ」
「畏まりました」
紀伊家の訪問を受けた表同様、奥御殿もにわかに慌ただしくなる。衣擦(きぬず)れの音がひびく中、女中のひとりが、衝立を覗きこんだ。
「わたくしが隙を見て、お二人を中奥に続く木戸までお送りいたします。今少しお待ちくださいませ」
小声で告げる。
「わかった」
数之進は答えながら、いやな胸騒ぎを覚えていた。

――まさか。

羅針盤がほしいと言ったあれが引っかかっている。手に手を取って佐都の方と駆け落ちする、などということがあるだろうか。

「どちらにおいでなのですか」

「殿」

「佐都様。いつもの、かくれんぼでございますか」

「お顔をお見せくださいませ」

呼びかける女中たちの声が、奥御殿にひびいていた。

第五章　恵比寿講

一

いやな胸騒ぎは、なぜか、当たることが多い。

当主と愛妾は『かくれんぼ』をしたわけではなかった。上屋敷から姿を消してしまったのである。紀伊家の江戸家老からの縁談話はどうするのか。茶会を口実にした見合いの日は、刻一刻と迫っている。手に手を取っての道行きに、重臣たちは当然ながら狼狽えきっていた。

「よもや死出の旅路ではあるまいな」

「まずは佐都のお方様のご実家をあたってみるのじゃ」

「篠田卯十郎が裏で糸を引いているのやもしれぬ」

嫡男を追いやって、卯十郎の意に適った者を当主の座に着ける。傀儡当主を操れば、もはや向かうところ敵無し、鯨商人は計り知れない財力を武器に、紀伊家乗っ取りに動き出す可

能性もあった。

江戸市中の旅籠や空き家、水原家の菩提寺、はては吉原の遊女屋まで、家中の者たちは手分けして忠道を探したが、行方は杳としてつかめない。佐都の方は町娘ではあるものの、裕福な炭問屋の箱入り娘であるため、友人知人は限られている。だれかが匿っているのかもしれなかった。

家中総出の捜索は、手がかりすら得られないまま、三日が過ぎていた。

十月十日の未明。

数之進は、南小田原町の一画に佇んでいる。堀を挟んだ北西側に西本願寺の広い敷地が広がっていた。同じく堀を挟んだ南側には武家地、南東に広がる空き地の向こうには、大海原に続く江戸湾が広がる区域だ。裏店に吹きつける風が冷たいのも道理、海風が潮の匂いと冬の寒さを運んでくる。

――どうしても殺るつもりか。

数之進の視線は、ある男の背中に向けられていた。裏店の木戸に立つその男は、おそらく鋭い眼差しで一軒の家を睨みつけているに違いない。睨みつけている家にいるのは二人の男女であり、男女は夫婦だった。

かちり、と、鯉口を切る音がひびいた。静寂の中、異様なほど大きく聞こえた。数之進は男に歩み寄る。

無言で男の右腕にふれた。

「止めるな」

男――早乙女一角は言った。後ろは見ていない。燃えるような両眼は、いまだ件の家に向けられている。

「行こう」

数之進は促した。それでも一角は少しの間、木戸のそばから離れない。ふたたび呼びかけると、ようやくこちらを見た。

「なぜ？」

おれを止める。あの家には、田辺新九郎がいるのじゃ。ようやく居所をつかんだ鳥海様の配下から話を聞き、おまえには知らせぬよう、頼んだうえでここに来た。千載一遇の好機、これをのがせば、次こそおまえは始末されてしまうやもしれぬ。

声なき声が短い問いかけの中に表れていた。数之進はなにも応えず、堀沿いの河岸を歩き始めた。堺橋の方に向かっている。やや遅れて、一角も隣に来た。

「生き甲斐を奪うてはならぬ」

数之進は言った。
「いつか気づく。怒りと怨みをいだき続けて生きる虚しさに、な」
「その前におまえは殺されるやもしれぬ」
「おぬしがいる」
笑顔で答えると、
「ふん」
一角は鼻を鳴らした。前方を見て、苦笑いを浮かべる。
「今日は鳥海様が用心棒役でござるか」
数之進に知らせたのは左門だったのかと、本当は言いたかったのかもしれない。上役は一軒の居酒屋の前で二人を待っていた。提灯も暖簾も仕舞われていたが、多少、金をつかませたのだろう。見世の片隅の飯台に、酒と肴が用意されている。主夫婦は二階に引き取ったのか、他に人はいない。
居酒屋の飯台が、密談の場となった。
「田辺新九郎に従っていた四人は、紀伊家の下級藩士のようじゃ」
左門が口火を切る。数之進の向かいに上役、隣に友が座している。
「かつて新九郎は江戸柳生家の高弟だったゆえ、彼の者たちも新陰流の門弟やもしれぬ。ふ

だんは紀伊家の抱屋敷のひとつを塒にしているようじゃ。時々妻女のもとに戻るのであろう。身柄を引き渡すよう、紀伊家に申し入れるつもりだが」

紀伊家は応じるまい。と、沈んだ声で告げた。御三家のひとつが相手では、両目付と雖も迂闊に手は出せなかった。

「亡骸の引き取り手は、まだ現れぬのですか」

「現れぬ」

左門の答えを、一角が継いだ。

「無縁仏か」

上役の脇差で額をつらぬかれて絶命した男の亡骸は、番屋から左門の屋敷に移されていた。あの剣士にも親がいるはず。やりきれない気持ちだった。

「それにしても」

左門が呟いた。

「あのとき、わしに知らせたのは、まことに篠田卯十郎であろうか」

「おそらくそうではないかと」

答えた数之進に、一角が問いかける。

「敵に塩を送ったと、おまえは考えておるのか」

「そんなところだ」

卯十郎も数之進を好敵手と思っているのではないだろうか。不謹慎かもしれないが、説明しがたい高揚感を覚えている。卯十郎の方も同じ気持ちであるように思えた。

謀を未然に止められるか。謀叛が噂ではなく、真実であるならば、それを防げるか。

「土佐守忠道様には、兄君がおいでなさるとか。養子先はわかりましたでしょうか」

逸る気持ちを抑えて訊いた。今までの調べはむろんのこと、奥女中たちの話も纏めて記したものを左門に渡してある。あらためて話すまでもない。

「養子に出た形跡はないが、なんというても秘中の秘じゃ。形跡を残さぬのは、あたりまえやもしれぬ。なれど、どうにか名だけはわかった。忠信様よ」

「その忠信様が、水原家の藩士として、奉公していることは考えられませぬか」

「む」

「なに？」

左門と一角は同時に声をあげ、問いかけの目を向けた。心あたりがあるのか。あるとすれば、だれなのか。

「同役の河合牧太です。元勘定頭という触れこみの小林殿が、ちと気になることを言うておりまして」

「あの年寄りは六人の重臣、おまえには『手暗衆』と話したようだが、そのひとりではないか。信頼できぬ」

一角の反論に、すぐさま反論する。

「彼のご老人は、篠田卯十郎を『手暗師』と称しておりました。仲間だと教えたように思えてなりませぬ。全幅の信頼とまではいきませぬが、さりげなく真実を告げているように思えるのです」

「小林」

左門が懐から覚書のような文書を取り出した。新しくわかった事柄が記されているのかもしれない。

「名はなんと申す」

と訊き返した。

「左馬助です」

「小林左馬助か。領地では江戸家老を務めたことのある男じゃ。隠居したようだが、年明けの挨拶と称して、江戸に出て来たとか。老体を押してわざわざ江戸に出て来たのには、なにか理由があるに違いない。御家の一大事に馳せ参じたのやもしれぬ」

「鯨商人を止めるためか」

一角の言葉を受けた。

「あるいは、鯨のごとく水原家を呑みこもうとしている紀伊家を退けるためか」

「ついでにひとつ訊きたいことがあるのじゃ。われらは夜明けを待ち、水原家の家中の者と一緒に、築地鉄砲洲の炭問屋を調べることになっておるが、捜索の裏に千両智恵あり。おまえが勘定頭か老藩士に進言したのであろう」

「さよう。篠田卯十郎が逃走に手を貸したやもしれぬと煽ったのだ。六人の『手暗衆』がどう出るか、様子を見たいのだがな。わたしの目的はそれだけではない」

「炭問屋をなにゆえ、そこまで気にするのじゃ」

築地鉄砲洲は、ここからさして遠くない。その近くに、田辺新九郎が家を借りたことにも疑問が残るが、それは横に置いた。

「日本橋住吉町の金貸し、友吉の家から出て来た三人の男たちは、鉄砲洲の炭問屋に戻った。鳥海様の調べでは、ひとりが見世の主、ひとりが手代であった由。もうひとりの下男らしき男は、いったん炭問屋に行ったものの、友吉の家に取って返している」

「あれは友吉の手下じゃ」

左門が言い添えた。頻々と調書や覚書を交わしているが、記載洩れ、あるいは後でわかる場合も多い。補足しながらのやりとりになっている。

「数之進。おれの問いかけには答えておらぬぞ。今一度、訊ねたい。なにゆえ、炭問屋を気にするのじゃ」

不満げな一角に、数之進は答えた。

「鉄砲洲の炭問屋は、水原家の泉府方の、出店（でみせ）やもしれぬからだ」

二

「……」

沈黙が流れた。

隣席の一角が、物言いたげな目を向けていた。水原家の泉府方、泉府方の頭役は篠田卯十郎、卯十郎は鉄砲洲で炭問屋も営んでいる、炭問屋には金貸しの友吉の手下が出入りしている。おそらくそれらの事柄が、頭を駆けめぐったに違いない。

「つまり」

ようやく一角は口を開いた。

「水原家の泉府方が金を貸している相手は、江戸の民ということなのか？」

「おそらく、な。小萩さんの親に金を融通していたのは、卯十郎ではないのかと、わたしは考えている。金利は安くないが、取り立てはきつくないのではあるまいか」

話を上役に向ける。

「いかがでござりましょうか」

数之進の確認に、左門が頷き返した。

「今はまだ言い切れぬが、わしも数之進と同じ考えじゃ。卯十郎が江戸で営む炭問屋は合計五軒。他にも吉原の遊女屋、江戸各地の薬種問屋、塩問屋、廻船問屋と手広く商っているようじゃ。これらの見世は、金貸しの元締めも兼ねているのやもしれぬ」

「吉原の遊女屋にも出店があるのか」

一角は驚きの声をあげ、数之進に目顔で答えを求める。

「あれ以上、適している出店はあるまい。登楼(あが)るふりをして、その実、金勘定をしているのではなかろうか」

「確かにな。密談にも適している場所じゃ。主が卯十郎となれば、盗み聞きされる懸念もない。上屋敷から出張った藩士が、時間外の役目を終えたあとは、馴染みの天女と熱いひとときを過ごせる。うまく考えたものじゃ」

たいした男よ、と、感じ入ったように一角は繰り返した。

「おぬしの言うとおりだ。卯十郎はたいした男よ。町ごとに泉府方の出店を置き、友吉のような岡っ引きに金貸しの看板を掲げさせる。お上に怪しまれたときには、友吉を切ればいい

だけの話だからな。万が一、友吉が騒げば、子飼いの手練れが動く手筈が調っているのは間違いない。小萩さんを脅した二人の浪人を捕らえて、番屋に知らせたのはその子飼いの始末屋だろう」

「やはり、友吉一家の騒ぎは、出過ぎた真似をすればこうなるぞ、という見せしめの意味があったわけか」

「うむ。他の金貸したちに対する威嚇だったように思えてならぬ」

「なれど、仮にも大名家ではないか。しかも水原家は家康公の時代から続く由緒ある譜代大名。それが金貸しとはな」

「体裁を取り繕っていては、鯨商人にはなれぬ。なにもかも呑みこむ男だ、篠田卯十郎という男は」

そう、呑みこまれかけているのは、紀伊家の方ではないのか。さらに卯十郎が本当に呑みこもうとしているのは、いや、呑みこみたいと思っているのは――。

「清照院様のことですが」

数之進は話を変えた。

「前殿のお目に留まったのは、ご領地の新宮においてであるとか。女中奉公に出ておられたのでしょうか」

「という話じゃ。数之進の調べを確かめてみたのだが、どうも許嫁とはすでに所帯を持っていたようでな。酷いことをするものよ。他の木に美しく咲く花を、無理やり千切り取って己のものにするとは」

「されど、前殿の想いは、誠と真だったのではありますまいか。ご正室亡き後は、清照院様おひとりをご寵愛なされた由。これだけ裕福な大名家であるにもかかわらず、その手の御家騒動がないのは、前殿のお気持ちが、一途だったからであるように思えまする」

恋道に長けた一角だが、実は純な想いをだれよりも強く持っている。この友に惚れられた女子は幸せな一生を送るに違いない。

「その手の御家騒動は、これから始まるのやもしれぬ」

意味ありげな言葉を返すと、一角は訝しげに眉を寄せた。左門にちらりと目を向けた後、

「ふぅむ、またしても、おれひとりが蚊帳の外か。つくづく村上様の不在が怨めしゅうてならぬ。慰め合う相手がおらぬのは寂しい限りじゃ」

「一歩、話を進めてみれば、答えが見えてくるはずだ」

言い置いて、数之進は上役を見る。

「もうひとつの調べにつきましては、いかがでございましたか」

「まだ調べがついておらぬ。わかり次第、知らせるゆえ」

「はてさて、またもや、おれは蚊帳の外か。一歩、進めて考えると、もうひとつの調べとやらは、その手の御家騒動に関わりがある事柄やもしれぬ」

一角はぶつぶつと呟き、答えを求めるような目を投げた。それに対して数之進は、曖昧な笑みで応える。

「いい読みだ」

「さようか。遅かれ早かれ答えは出ると思うゆえ、さらに話を進めると、いや、話を戻すことになるのやもしれぬが、夜明けを待って、われらは水原家の藩士とともに、炭問屋を調べねばならぬ。佐都のお方様のご実家も鉄砲洲で炭問屋を営む商家。駆け落ちなされたその夜に、御家老直々に訪ねられたが、二親は驚き、狼狽えるばかりの有様だったとか」

「小林殿の話では、母御は床に就いてしまわれたらしい。気の毒なことだ」

「寝耳に水だったわけか。いったい、どこに隠れておられるのでしょうな」

と、一角は左門に話を振る。

「行方はつかめぬが、手引きした者がいるように思えてならぬ。その者が匿っているのではあるまいか」

「あのとき」

数之進は、懐の羅針盤を握りしめていた。昨日、手に入れたそれは、渡す相手のいないま

ま、御算用者の手札とともに懐の客人になっている。
「忠道様にお目通りいたしました折、こう仰せになられたのです」
思い出しながら告げた。
〝頼んだぞ。そちの手から余に渡してもらいたいのじゃ。よいな〟
念を押すような言葉が引っかかっていた。
「方角を知るために用いる羅針盤か。本当はそれを持って、逃げるつもりだったのやもしれぬ。少しの間、江戸近郊の山里にでも、隠れるつもりだったのではあるまいか」
一角が推測を言葉にする。
「そう、だろうか」
「他にもなにかあるのか」
「わからぬ。ただ……謎かけのように思えなくもない」
「はて、謎かけとな？」
首を傾げて、友は言った。
「おれには、今のおまえの言葉自体が、謎かけのように思えなくもない。わからぬ話はこれ以上、訊かぬがよしじゃ。鳥海様。清照院様がお住まいあそばされている下屋敷の方はいかがでございますか。屋敷の絵図は手に入りましたか」

屋敷の図を頭に入れるのは、自分の役目と心得ているのだろう。両眼にいちだんと真剣みが加わっていた。

「それもまだ手に入らぬ。守りが尋常ではないのじゃ。見廻りの者、見張り役、門番の数が半端ではない。さらに塀の内側に、深い堀が造られておってな。容易に忍びこめぬ」

今ひとつ理解できなかったのかもしれない。

「塀の内側に深い堀でござるか」

一角は疑問を問いかけに変えた。

「さよう。跳ね橋を降ろしてもらわぬことには、屋敷に入れぬ仕組みよ。橋が駄目であるならば、泳いで渡るしかない。されど、見つかれば見張りの藩士にこれじゃ」

左門は鉄砲を撃つ仕草をする。泳いで渡るのは命懸け、夜陰に乗じて忍びこむしかないが、たかが屋敷の絵図である。左門の配下も絵図のために、命を捨てることまではできないのではないだろうか。

「おれが忍びこむ」

一角が腰を浮かせた。

「見張りの数が多いのは、承知のうえよ。屋敷の絵図がなければ話にならぬわ。鳥海様、配下を数人、揃えていただきたく思いまする。それがしが……」

「落ち着け。絵図がなければないでよいではないか」
腕を摑んだ数之進に、鋭く問い返した。
「おまえは市ヶ谷原町の下屋敷の広さが、どれほどであるか憶えておらぬのか」
「確か」
「五万坪じゃ。五万坪を超える広さぞ」
「な……」
返事に詰まった数之進を、横目で見ながら一角は腰掛に座り直した。
「絵図が手に入らぬというのであれば、此度の調べはこれまでじゃ。われらも命は惜しゅうござりますゆえ」
ごねるのは、数之進の身を思うがゆえのこと。左門もよくわかっている。
「案ずるでない。必ず下屋敷の絵図を手に入れる」
「そういうことであるならば」
一角はにやりと笑った。
「引き続き、水原家の調べを続けまする。先程も申しましたが、われらは夜明けより炭問屋の調べに入りまする。水原家の家中は、よもやと思うておりましょう。彼の者たちが数之進のおそろしさを知るのは、これからでござる」

自信たっぷりな言葉は、面映ゆいだけだった。忠道と佐都の方、そして、いまだ姿を見せぬ篠田卯十郎の行方をつかむため、数之進と一角は炭問屋の調べに取りかかる。

築地鉄砲洲に夜明けが訪れようとしていた。

三

鉄砲洲は、築地の内海寄りにあって、北に霊岸島がある区域だ。地名の由来は寛永の頃、大筒の町見を試したところであるとも、洲の形が鉄砲に似ているからだとも言われている。いずれにせよ築地の洲渚を埋め立てた地で、その年代はあきらかではないが、明暦以前のことであるのは確かだった。

築地との間に鉄砲洲川が流れており、本湊町、船松町一、二丁目、十軒町、明石町といった町が、南北へおよそ八丁ばかり続いている。みな海沿いの町である。この海浜は江戸有数の釣り場でもあって、春には鱚、秋の鯊、また網打ちによる梭子魚、鰈なども豊富に獲れる場所として知られていた。

「よい眺めじゃ」

一角は、手で陽射しを遮りながら、陽炎のように浮かぶ彼方の石川島と佃島を見やっている。石川島は罪人の更生施設として、人足寄場が設けられている島だが、河岸沿いの区域

であるため、吹きつける風はひときわ冷たかった。二人は二軒目の調べを終えて、次の炭問屋に移動している。

「憶えのある者はいたか」

一角は囁き声で訊いた。

「いや」

「警戒しておるのやもしれぬ。おまえの口から出ないゆえ、おれが代わりに言うてやるわ。『おかしい』とな」

ふてぶてしい笑みを浮かべて、続ける。

「ふだんは泉府方の出店に出向き、帳簿や小判の管理をする者たちが、素知らぬ顔をして殿の捜索に加わる。これ以上、おかしな話はあるまい」

「どこかで綻(ほころ)びが出るはずだ。さすれば、確たる証(あかし)がつかめる」

「案外、佃島に」

と、一角は彼方の小さな島を顎で指した。

「手に手を取って、逃げたのやもしれぬぞ。ほとぼりが冷めるまで隠れ住むには、格好の場所ではないか」

「まさか」

笑って、数之進は次の炭問屋に足を踏み入れる。表向きは忠道たちの行方に関する訪れだが、泉府方の出店であるという、確たる証を手に入れるための調べだ。帳簿を盗み見られれば上出来なのだが、見世の奉公人や水原家の藩士が出入りする中では、至難の業のように思えた。

「水原家の家臣じゃ。知らせは入っていると思うが、ちと調べたき儀があって参った次第。あがるぞ」

挨拶をした一角に、数之進も倣い、帳場にあがる。

「小林殿」

奥座敷に行こうとしたとき、小林左馬助が、奥座敷に続く廊下から現れた。

「この家はわしが調べた。異状はない」

機先を制するように告げる。

「さようでございますか。隣家は、佐都の方様のご実家でござりますね」

「うむ」

左馬助は、ちらちらと肩越しに奥座敷に続く廊下を気にしている。やはり、正直なお方だと、数之進はあらためて思った。それともわざと教えているのだろうか。

一角が軽く肩を叩いて、見世の外に出て行った。なにをするのかわかっていたが、むろん、

よけいなことは言わない。

「今日は恵比寿講じゃ。人の出入りが多いゆえ、われらの訪れは迷惑やもしれぬ。適当に切りあげて、引き上げるのがよかろう」

左馬助は張り詰めていた。出て行った一角が、戻って来るのではないかと、見世の外を見つめている。と同時に奥座敷に続く廊下の手前に、仁王立ちのまま立ち塞がっていた。数之進を通したくないのはなぜなのか。

「奥座敷は賑やかな様子でござりますね」

緊張感を取り払うべく、できるだけ穏やかに話しかける。恵比寿講の準備をしているのだろう。奥座敷の方からは、華やいだざわめきが流れてくる。江戸中の見世が、うきうきと沸き立っていた。

「恵比寿講ゆえ、みな話をする暇もないほどじゃ」

左馬助の答えに、笑みで応えて、問いかける。

「ひとつお訊ねしたいのですが、忠道様に佐都様をお世話したのは、篠田様でござりますか。それとも山村様でござりますか」

「卯十郎じゃ」

「やはり」

と、大きく頷いた。卯十郎にとって忠道は、目の上のコブ。清照院に似ている娘を奥御殿に奉公させれば、愛妾として寵愛するのはあきらか。炭問屋の娘――佐都を見つけたとき、卯十郎はにんまりとほくそえんだのではあるまいか。

「貴公も、そそのかしたのは、卯十郎だと思うておるのか」

左馬助は相変わらず、廊下を塞ぐように立っている。警戒心はゆるまない。見世先で平然と話を続けることに対して、数之進は強い疑念を覚えていたが、これまた素知らぬふりをする。

「はい」

「鯨商人めが、殿を追いやって、己が操りやすい人形を、水原家に送りこむ所存か。うまうまとやつの策略にのせられてしもうた殿が哀れでならぬわ」

鯨商人、人形。

二つの言葉だけが頭に残った。

「あ」

閃いたのか、と、一角がいれば訊いただろう。老藩士もまた怪訝そうに問いかける。

「なんじゃ」

「鰐魚（わにざめ）の退治法にござります。たった今、閃きました。木で人型（ひとがた）の人形を何十体か造り、そ

の中に毒を詰めこむのです。それを鰐魚がいる海に撒けば、人と思うて食らいつくのではありませぬか」

「なるほど」

ぽんと左馬助は手を叩いた。

「妙案じゃ。うまくいくかどうかはわからぬが、試してみる価値はあるの。さっそく国許の倅に文で知らせてやろうではないか」

倅というのは、国家老を務めておられるお方ですか。喉元まで出かかった問いかけを呑みこんだ。

廊下に何度も目を向ける数之進をどう思ったのか、

「此度の騒ぎで貴公を下屋敷に案内するのが遅れてしもうた。されど、紀伊家の江戸家老が、是非、清照院様にお目にかかりたいと仰せになられておる。ゆえに茶会は予定どおり、執り行うつもりじゃ」

突然、重要な話を口にした。

「殿がお戻りあそばされなくても、茶会を執り行うのでござりますか」

数之進は訊きながら、探るように老藩士の目を覗きこむ。

「さよう。身代わりを立てればよい話じゃ。殿は病のせいでちとお顔にできものが、とでも

言うての。御簾越しの目通りであればわからぬ」

どこかで聞いたような話だった。今までの潜入先でも、藩主の代役を務めた者がいる。さしずめ河合牧太あたりが適役だろうか。数之進は訊かずにいられない。

「茶室でのご対面は、いかがなさるのですか」

「清照院様と御家老がお相手なされば、紀伊家も文句は言わぬ。そもそも江戸家老の女(むすめ)を、我が水原家に輿入れさせること自体、無礼な話よ。主家の紀伊家の姫様であればともかくも、江戸家老では話にならぬわ」

いかにも年寄りらしく、今更ながらの愚痴めいた言葉になっていた。帳場にいる奉公人たちは、見事なまでに『聞かざる』の姿勢をつらぬいている。二人は奥座敷に続く廊下の手前で、見るからに不自然なやりとりを続けた。

「お相手をなさる御家老と申されるのは」

「むろん、山村様じゃ」

「篠田様はおいであそばされぬのですか」

「さあてな。鯨商人のことは、わかりかねるわ」

「篠田様で思い出しましたが、ご妻女はおられるのですか」

「死別した由。そういえば、貴公、今日は姉君の見舞いに行くと言うておらなんだか。休み

を取ったのではないのか」

左馬助は、かなり強引に話を変えた。よほど奥座敷に行ってほしくないのだろう。これまた気づかぬふりをして答えた。

「はい。なれど、ぎりぎりまでお手伝いいたしたく思います。もうひとつだけ、お訊ねいたしたき儀があるのですが」

奥座敷に行かせたくない左馬助との攻防は、四半刻（三十分）ほどになっている。守りをくずせないかと、別の方向から攻めることにした。

「なんじゃ。言うてみよ」

「お叱りを覚悟のうえで申します。誓いのことでござります。小林殿は上屋敷の賄所において、御身を含む六人のご重臣の方々が『手暗衆』であると申されました。そのとき、ある誓いをたてたと聞いた憶えがござります。それがしは気になってなりませぬ。ある誓いとは、どのようなものでございましょうか」

答えるわけがないと思っていた。怒鳴りつけられて終わるだろう。奥座敷の秘密を知られたくないがゆえに、ここまで頑（かたく）なな言動を取っているのだ。それはすなわち数之進を信じていない証でもある。

「われら六人衆の誓いを知りたいと申すか」

左馬助の大きな目が、忙しなく動いた。当惑と迷い、不安と疑問がないまぜになっている。踏みこみすぎたかもしれない。

「ご無礼つかまつりました。よけいなことを……」

謝辞を遮るように言った。

「『石の誓い』じゃ」

「え？」

「下屋敷の石灯籠にな、六人の名を記したのよ」

「いやはや、勝手口から中に入って、様子を見て参りましたが、台所は戦場のごとき忙しさでござる」

背後で一角の声がひびいた。数之進は素早く気持ちを切り替える。思ったとおり、勝手口から侵入して、奥座敷の様子を見て来たようである。阿吽の呼吸で動けるのも、一角なればこそだ。

「座敷に三人ほど侍がおりましたが、用心棒でござろうか」

土間に立ったまま、大胆な言葉を投げる。帳簿を見ていた奉公人たちが、素早く視線を交わし合ったのを、数之進は見のがさない。左馬助は平静を装っている。

「いかにも用心棒とのことであったわ。近頃はなにかと物騒ゆえ、雇うことにしたとか。さ

あて、ここはこれぐらいでよかろう。他の家を調べる暇が、なくなってしまうわい。次に行こうではないか」

数之進の背中を押すようにして、左馬助は、見世の三和土（たたき）に降りた。逆らうのは得策ではない。おとなしく従った。

座敷にいた三人の侍。

気取られぬよう、彼の者たちが出て来るのを待つことにした。

四

三人の侍は、水原家の泉府方だった。

篠田卯十郎が営む炭問屋や遊女屋といった見世は、泉府方の出店である可能性が非常に高い。表の商いでも充分、利益を得ながら、裏ではさらに巨額の利益を得ているのではないだろうか。小判が小判を生み、かくして卯十郎の蔵には、信じられないほどの千両箱が積みあげられるに至った。

それらの事柄を伝えたうえで、数之進と一角は、室町二丁目の〈北川〉に足を運んでいる。地主たちの対立、『古町』と『古町並み』の地主、前者は積み立て金を支払っているが、後者は支払っていない。この不公平な差をなんとかしたいというのが、『古町』に土地を持

つ地主たちからの相談事だった。

「わたしは、『古町並み』の地主も、積み立て金を支払うのがあたりまえだと思うている。こうやって呼ばれたのもなにかの縁、どうであろうな。恵比寿講のこの日を、手打ち式の日にしては」

数之進は言った。襖を取り払って広間にした座敷の、右側一列が『古町』の地主、左側一列が『古町並み』の地主である。婚礼の式のような雰囲気で、数之進の右隣には一角、左隣には伊兵衛が座している。

「異存はございません」

左側の『古町並み』の代表者から声があがった。

「てまえどもは、常々、こういう場を持ちたいと思っておりました。積み立て金をお支払いすることに関しましては従います」

「ですが」

次席の男が継いだ。

「お上は、町会所に在る小判のうちの半分を、仮納めの名目で御城の金蔵に持ち去ってしまいます」

それが引き金になって、次々に声があがる。

「町会所の金を無利息で『諸家方』、つまり大名に融通しているとか」
「大きな声では申せませんが、お上の闇金融に用いられているという噂がしきりでございます」
「他にも御用達町人の預かり金と称するものが、これまた噂によりますと、七万両もあるとか」
流れては消える類(たぐい)の噂だが、笑って「ありえぬ」と言い切れないのが辛いところだ。
――そういうことか。
数之進は、ちらりと左隣の伊兵衛を見やる。まさに狸の置物のようだった。この集まりは、『古町』と『古町並み』の手打ち式であるとともに、幕府への訴えを申し立てる場なのだろう。
うまくお治めくださいませ。
狸爺は取り澄ました顔に答えを表している。そうすればこれから先、地主たちが生田様の大きな助けになるは必至。損な会合ではございません。
声なき声を読み取って、数之進は、地主たちを見まわした。
「わたしは、公儀にあれこれ口出しできるような立場にはない。今ここでなにかを約すことはできぬ」

正直に告げる。

「なれど、できることはやらせてもらうつもりだ。いきなり大改革はできぬが、少しずつでも声をあげていくのが、よいのではないかと思うている。意見があれば此度のように聞かせてほしい。今はそれしか言えぬ」

話しながら、つい懐に右手を入れていた。土佐守忠道から頼まれた羅針盤を無意識のうちにさわっている。例の胸騒ぎがおさまらない。一角曰く苦労性と貧乏性の業が、疼いていた。

「こういうお方でございます」

伊兵衛が穏やかに受けた。

「それゆえ、てまえは惚れこみました。お助け侍、あるいは千両智恵といった噂を、一度や二度は聞いたことがありましょう。金のない者から相談料は取りません」

「おれが口添えせねば、いつも無料働きよ」

と、右隣の一角もまさに口添えする。

「お人好しのうえ、姉君たちには頭があがらぬ。そこにおれも惚れこんだのじゃ」

得意の軽口で笑いを取った。町会所の積み立て金は、毎月およそ千八百両、一年で二千三百両前後の金が入ると言われているが定かではない。その金がどこに流れるのか、流れた先でどう使われるのか、数之進には知る由もなかった。幕府の重臣相手に、すぐさま改善を訴

えられるわけはないのだが――。

それでも声をあげていくのが大事だと思っていた。

「できることをやっていくしかない」

数之進はふたたび地主たちを見まわした。このとき右列の末席に、そっと加わった男がいる。戸村三之助だった。上等の絹と思しき着物姿は、居並ぶ地主たちに負けていない。小さく会釈し合った後、数之進は声をはりあげる。

「とりあえず、今日は手打ちといこうではないか。『古町』と『古町並み』の壁を取り払い、ひとつに結ばれる日だ。江戸に二つの古町は要らぬ」

「承知いたしました」

「先程も申しましたが、異存はございません」

それぞれの代表者の答えが、手打ち式の合図となる。用意されていた膳から全員が杯を取った。数之進と一角は注ぎ役となって、席をまわり始める。膳が用意されていない三之助にも杯を渡した。

「よう来てくれた」

ついしみじみ見つめている。もしや、この男が篠田卯十郎なのか。上州甘楽郡の庄屋という触れ込みであるにもかかわらず、上方訛りと紬の着物といった幾つかの点が引っかかって

いた。甘楽郡の庄屋であるのに、六斎市の日にちを知らなかったのはなぜなのか。不審な点はあるものの、卯十郎と断定できるだけの証はない。

「やはり、江戸の恵比寿講は賑やかでございますね。どの見世の奉公人も、いつも以上に張り切っております」

三之助は如才なく応じた。小林左馬助は、卯十郎の容貌をこう告げていた。

〝猿に似ておる〟と。

しかし、三之助は猿には似ていない。数之進同様、どちらかと言えば平凡な容姿の持ち主である。とりたてて美男ではないが醜男でもない。どこにでもいるような商人、大店とまではいかないものの、中店あたりの商人という雰囲気だった。

――篠田卯十郎なのだろうか。

集中しすぎたのかもしれない。

「生田様」

三之助の呼びかけで我に返った。

「あ」

「呼んでおられます」

「え？」

「数之進。早う来ぬか」

一角が前の席を指した。いつの間にか金屏風が運びこまれている。仰々しい流れだったが、祝いの場に文句をつけるつもりはない。席に戻って、乾杯の音頭を取ることにした。

「では、江戸の繁栄を願って」

乾杯！

全員の声が揃った。一角がまた酒を注ぎ始めたのを見て、数之進も席をまわる。恵比寿講を取り仕切らなければならない立場の者がほとんどだろう。にもかかわらず、地主たちはやけに腰を落ち着けていた。

「諸国の特産品を広めるのに、なにかいい智恵はないだろうか」

数之進は問いかけながら、その実、自問していた。鯨の油はウンカ退治に効果があるのだが、関東から北の国では、それを知る者が少ない。話を広めれば、もっと鯨の油が売れるのは間違いなかった。

「千両智恵からのご相談でございますか」

ひとりの言葉を、隣の男が継いだ。

「ご存じと思いますが、町会所は、特産品の交易の場としても使われております。江戸鉄砲洲の島会所でも、伊豆七島の産物交易が執り行われております」

「存じておる。されど、わたしが考えておるのは、町会所を利用するやり方ではない。そういった場所を使わずに、ひと目、見ればだれにでもわかるもの、だ。どの国でなにが作られているか、どんな品があるか、どこに行けば手に入れられるか」

自問がそのまま声になっていた。

「閃いた」

突如、大声がひびいた。一角が立ちあがり、叫ぶように言った。

「絵図じゃ、数之進。諸国の物産図絵を作ればよいではないか。江戸名所図絵のような物産図絵を作れば、だれでも見られるではないか」

「そうか」

数之進も思わず立ちあがる。

「物産図絵だ、おぬしの言うとおりだ。それを作れば一目瞭然、だれでも見ることができる。諸藩や江戸の民に買うてもらえば、必要な品を必要なとき、手に入れられるようになるな」

「版元を紹介いたしましょう。てまえの店子におりますので」

さっそく申し出る者がいた。見世を貸すだけではなく、見世を持ち、商いをしている地主も多い。儲かる話には、すぐさま乗る。

「頼む。いや、おぬしこそ、千両智恵よ」

友の肩を叩いた。

「持ちあげるな」

一角は苦笑いする。

「下屋敷の絵図が手に入るか否か。ずっと頭から離れぬのじゃ。そこにぽんとおまえの言葉が飛びこんできたというわけよ。そのとたん、『お！』と閃いたのじゃ。初めて覚える不思議な気分であったわ。胸につかえていたものが、すとんっと落ちたかのような」

「そうだ、それよ。一回、味わうと病み付きになる」

「気持ちのよいものじゃ。とはいえ、病み付きになるほど、おれは相談事をかかえてはおらぬが、と、冨美殿と三紗殿じゃ」

一角の目は、中庭を挟んだ廊下に留まっている。数之進もこの座敷に近づいて来る姉たちの姿を見た。冨美は紅葉、三紗は山茶花と、二人とも季節をあしらった小紋姿で美しく装っている。

「一角」

とっさに友の腕を摑んでいた。

「いつもの胸騒ぎがきた。ちと遅いが」

「手打ち式の賑わいに、苦労性と貧乏性の業が、いささか鈍うなっていたか」

「いや、感じてはいたのだが、懐の羅針盤からくるものだとばかり思うていたのだ」
そのときにそなえるべく、数之進は足を踏ん張る。冨美はどこか浮かぬ顔をしていた。金屏風が運びこまれたとき、もっと警戒するべきだったかもしれない。地主たちが帰らないことにも注意を払うべきだった。二女の表情に答えが表れている。
「だめだ」
腰がくだけるように座りこむ。
「しっかりしろ。目を開けたまま、気を失うてはならぬ」
「伊兵衛さんを止めてくれ、一角」
譫言のように同じ言葉を繰り返している。
「祝いの場をお借りいたしまして、もうひとつの祝い事をお伝えしたいと思います。この度、生田三紗様と祝言をあげることと相成りました。本日は結納をかわしたく思いまして、ご挨拶申しあげる次第です。お集まりの席を使わせていただきますこと、お許し願いたく思います」
伊兵衛の嬉しそうな挨拶が、遠くの方で聞こえていた。

五

陽が落ちて町は闇に覆われていたが、〈北川〉の奥座敷には明かりが灯されている。庭も石灯籠だけではなく、高張提灯が置かれていた。色づいた紅葉を照らし出すさまが、妖しいほどに美しい。

だが、数之進にその美しさを愛でる余裕はなかった。

「本気なのですか」

別室で三紗に詰め寄っている。地主たちの多くは引きあげたが、残った者と奉公人たちが、座敷で祝いの杯をかわしていた。今日は無礼講とあって、嬌声や笑い声が絶えなかった。

「ええ。わたくしからお願いしたのです。伊兵衛さんの妻になりたいと」

つんと顎をあげて答える。同席しているのは、冨美と一角、そして、花婿の伊兵衛を含む五人だった。

「されど、姉様には杉崎殿がおられるではありませんか。少しの間、文が来ないぐらいのことでお気持ちが揺らぐとはなさけない。命懸けの恋ではなかったのですか」

「なさけないと？　このわたくしが？」

じろりと睨まれて、たじろいだ。

「あ、ち、ちと言葉がすぎました。申し訳ありませぬ」
一角の後ろに隠れて謝る。三紗の反撃は止まらない。
「自分のことは棚にあげて、ようも勝手なことが言えるものです。そなたは、何回、命懸けの恋をしたのでしょうね。許嫁の七重様、そのあとはさる大名家の姫様、そして、お世津さんと、三度目にしてようやくですか」
切り返されてしまい、ぐっと言葉に詰まる。
「い、いや、五瀬姫とは、身分違いの恋でしたゆえ……身分さえ違わなければ、夫婦になれていたやもしれませぬ。決して、忘れたわけではありませぬ。されど、五瀬姫はすでに嫁がれたお方。どれほど想いをつのらせても、かなうものでは、ない、と」
最後の方は聞き取るのがやっとの声になっていた。おれにまかせておけ、とばかりに、一角が数之進の腕を叩いた。
「冨美殿は、なぜ、知らせてくれなんだのですか」
「知らせるなと頼まれました」
「なれど、そこを曲げて、知らせるべきではなかったのかと思います次第。どうせ国許の伊智殿にも、文を出しておらぬのでしょう。反対なされますぞ。三紗殿のお相手が古稀を迎えた爺様と知ったときには、お怒りあそばされますぞ」

「まだ古稀ではありません。てまえは六十九です」
伊兵衛の反論に、数之進は目眩を覚えた。
「姉様は二十七、四十二も差があるのか」
しみじみ年の差を実感している。三紗は強気の姿勢をくずさない。
「今更、なにを言うているのですか。伊兵衛さんから何度も嫁にと、申し入れされていたのは、そなたも知っていたはず。右から左に聞き流していた責は重いですよ。姉上様にそこを突かれた折には、どうするのですか」
「う」
と、またまた返事に詰まった。きわめて旗色が悪い。絽(すが)るように冨美を見たが、ばつが悪そうに目を逸らした。
「わたくしは、三紗の思うとおりにすればよいと考えております。姉上様には伊兵衛さんから文を出す由。そのとき、わたくしも一緒に文を送りたいと思います」
「おかしい」
そう呟いたのは一角だった。
「数之進の十八番を奪ってしもうたが、お怒りを覚悟で申しあげます。冨美殿。狸爺に金をつかまされましたか」

鋭い問いかけを発する。

「そ、そんなことは、いえ、わたくしは三紗の幸せを、あの、その、伊兵衛さんの財産が三紗のものになれば、ここから先の人生を楽しく過ごせるのではないかと」

しどろもどろの言い訳は、先刻の数之進を想起させた。三女ほど神経は図太くないが、欲深なところは姉妹ともどもよく似ている。

「伊兵衛さんはどうなのだ」

虚しさを覚えつつ、訊いた。

「てまえは三紗様のお心に添うようにと思っております。祈るのはただ三紗様の幸せのみ。他に望みはございません」

「よいではありませんか。本人たちが言うているのですから」

「やはり、おかしいですな、冨美殿」

一角が睨みつけると、冨美は慌てて目を逸らした。伊兵衛にも問いかけの眼差しを投げたが、狸爺の本領発揮。置物のごとく座している。

「姉上。杉崎殿は必ず戻って来ると思います。姉様が早まった真似をせぬよう、止められるのはわれらだけです。どうか力をお貸し……」

「ご隠居様。〈越後屋〉さんが参りました」

奉公人が会話を遮る。
「〈越後屋〉ですよ」
冨美が真っ先に腰をあげた。
「さあ、三紗、参りましょう。そなたは幸せ者ですねえ。あの〈越後屋〉で花嫁衣装を仕立ててもらえるとは。ささ、急ぎなされ。参りますよ」
三紗を急かして、部屋を出て行く。
「お待ちください、姉上、姉様」
止める暇もない。冨美への賄賂は〈越後屋〉の着物。売るほどの着物があってなお新しい着物をほしがる貪欲さを、伊兵衛はよく知っている。
「杉崎春馬が戻って来たらどうするのじゃ」
一角が代弁するように訊いた。
「そのときはそのときでございます。命を懸けて、戦う覚悟でございます」
答えて伊兵衛は、悠然と部屋をあとにする。戦う云々は言葉だけだろうが、いちおう男としての覚悟は決めているようだ。二人はどちらからともなく顔を見合わせた。
「伊兵衛さんに、してやられたな」
「『古町』と『古町並み』の騒ぎを、うまく利用されてしもうたわ。町の顔役の前で結納を

かわすとはな。狸爺ならではの狡賢さよ。馬鹿正直にあれこれ考えていたおまえが、阿呆に見えてならぬ」

「面目ない」

「そこで謝るな」

ぴしゃりと言ったが、これまたどちらからともなく苦笑いを浮かべた。伊兵衛は本当に本気なのだろうか。それとも別の考えがあるのか。

「杉崎殿を探すしかない」

懐に手を入れたのを見て、一角は訊いた。

「羅針盤が気になるか」

「うむ。落ち着かぬ。釈迦の掌の上で、いいように踊らされているような気がしなくもない。後手後手にまわっているのはいなめぬからな」

「褒めすぎじゃ。篠田卯十郎ごときを釈迦に喩えるとは、おまえらしゅうもない。罰があたるぞ」

「失礼いたします」

障子越しに呼びかけがひびいた。

「戸村三之助でございます。そろそろお暇しようと思いまして」

「さようか」
一角が障子を開ける。
「本日は江戸の恵比寿講を、思う存分、味わわせていただきました。御礼がてら、てまえの主にお引き合わせいたしたく思いますが」
ちらりと三之助が目をあげた。
「いかがでございましょうか」
「……」
二人は黙りこみ、目顔で互いの心を探り合った。罠かもしれぬ、案内した先に待っているのは刺客やもしれぬ、それどころか途中で襲われるやもしれぬ。今度こそ、どうなるかわからない。
「その主の名は？」
一角が代弁者となる。
「ここでは申せません」
「案内する先はどこじゃ」
「それも申せません」
「名は答えられぬ、場所は言えぬでは、話にならぬわ。われらは行かぬ。その主とやらに伝

えよ。無礼な誘いに乗るほど、われらは暇ではないとな」

「申し訳ありません。正直にお話しいたします。てまえは偽りを言っておりました。すでにお気づきかもしれませんが、てまえは甘楽郡の庄屋ではございません。このことに関しましては、深くお詫び申しあげます」

三之助は頭をさげ、早口で続けた。

「かねてより我が主は、生田様にお目にかかりたいと申しておりました。お助け侍の噂を聞いたがゆえにござります。千両智恵の持ち主は、どのような男なのか。無私の心で他人を助ける男は、どういう考えを持っているのか。一度でいいから、心ゆくまで語り合うてみたいものよと」

ずいと膝で進み出る。

「湯屋の流し男を憶えておいででしょうか」

「……」

ふたたび二人は顔を見合わせた。流し男が篠田卯十郎なのか、そもそも三之助の主という男が、卯十郎なのかどうか。三之助は、流し男がすなわち主であるとは言っていない。そのあたりが引っかかった。

どうする？

友の無言の問いかけに、数之進は応えた。
「案内してもらおう」
鬼が出るか、蛇が出るか。
上役の守りを信じて、罠かもしれない誘いに乗った。

六

戸村三之助と下男は、闇の中をひたひたと歩いている。下男の持つ提灯の明かりを頼りに、数之進たちは後ろに付いていた。
「おかしい」
一角がまたしても数之進の十八番を口にする。
「なにがだ」
「鳥海様の配下の気配がないのじゃ。後ろにだれもおらぬ」
そろそろ四つ（午後十時）になる頃かもしれない。四人は、楓川（もみじがわ）の河岸を八丁堀の方に進んでいた。川を挟んだ向こうには町屋、左側に武家屋敷、武家屋敷の向こう側は八丁堀の与力や同心の家という区域である。
まだ恵比寿講の祝いが続いているのかもしれない。向こう岸の町屋からは、時折、笑い声

や歌声などがかすかに流れてくる。河岸沿いに立ち並ぶ蔵によって、明かりや賑わいは遮られてしまい、心細さが増すばかりだった。

「おれはどうやら生田数之進に乗り移られてしもうたようじゃ」

友は苦笑いしている。

「苦労性と貧乏性の業が疼いてならぬ。先刻より刺客が出るぞ、出るぞと思うては、わくわくしておるのじゃ。騒ぎが起きると安堵するという、おまえにそっくりではないか。我ながら呆れておるわ」

「では、わたしがおぬしの役目を引き受けるとしよう」

「無理だな」

と、一角は鯉口を切る。楓川に架かる小さな橋から、ばらばらと人影が飛び出して来た。十四、五人はいるだろう。

「出たか。賊を見て『やはり出たか』と安堵するこの心持ちも、存外、悪いものではない。悟りを得たやもしれぬ。苦労性と貧乏性の業も捨てたものではないな。おれにとってはよい修行やも……」

それ以上、続けられない。襲いかかって来たひとりに、一角は真っ向斬りをお見舞いする。数之進も刀を抜き、隣に立って構えた。賊を背後にまわらせてはならない。

「生田様」
先を歩いていた三之助が、遅ればせながら気づいた。下男ともども駆け戻って来ようとしたが、
「来てはならぬ」
数之進は叫んだ。
「逃げろ」
悲痛な叫びは刃鳴りに掻き消される。数之進は突き出された刀を跳ねあげて、踏みこんだ。腹にずぶりと刀が食いこむ。手応えあり、だったが確かめている暇はない。後ろにまわりこもうとした男に威嚇の一撃を浴びせかけた。
「くっ」
相手は怯み、距離を取る。一角の隣に立ち、さして広くない道を塞いだ。月は出ているものの、夜目の利かない数之進には、闇夜と変わらない暗さである。加えて、近頃、とみに悪くなった目では、賊の顔を確かめられなかった。
「田辺殿」
いるかどうかわからないが呼びかけた。
「役目を終えた暁には、果たし合いに応じる所存でござる。勝負はそのときまで、あずけお

くということで……」

またもや遮られた。不動の姿勢を保ち続ける一角が、袈裟斬りを放とうとしたひとりを斬り捨てる。ほとんど同時に二人が友めがけて刀を振り降ろした。数之進はひとりの刀を受け止めて、気合いもろとも弾き返した。その隙に別の二人が、傍らを擦り抜け、背後にまわりこむ。

「はぁっ」

地を這うような逆袈裟斬りを、間一髪、数之進はさがってかわした。一角が素早く背中合わせになる。

「蔵を背にしろ」

怒鳴りつけるような声に従った。蔵を背にしながら、前と左右からの攻撃を防ぐ形になる。ごく自然に一角が右側、数之進が左側の賊と刃を交えた。

――三之助さんは逃げたのか。

安否が気になったが、確かめる余裕はまったくない。前と左側から伸びて来る刀を、死に物狂いで弾き返した。そこに一角が攻めこみ、袈裟斬りを叩きつける。斃(たお)れたようだが、よくわからない。無我夢中で伸びて来る刀と格闘し続けていた。受け止めて、弾き返そうとしたときである。

思わずよろめいた。

疲れが出たに違いない。敵のひとりが踏みこんで、逆袈裟斬りを放とうとする。ほとんど同時に一角の脇差が敵の腹をつらぬいていた。とっさに二刀流を使った友は、脇差に執着することなく、屈みこんだ姿勢のまま、眼前の男に逆袈裟斬りを放った。

「あぅっ」

のけぞった男の腹から血飛沫が飛び散る。一角は邪魔だとばかりに蹴飛ばすや、後ろにいた男に得意の真っ向斬りを叩きつけた。それをそのまま逆袈裟斬りに変化させる。流れるような動きで、隣にいた男の太腿から腹を斬った。息つく暇もない攻撃を終えると、すぐに数之進の右隣に戻る。

またたく間に、三人が致命傷を負っていた。

「来い」

一角は賊を睨めつける。

「死にたいやつから来い」

月明かりを受けた横顔は、身震いするような美をたたえていた。鬼神が憑依したかのような動きに、おそれをなしたのかもしれない。ひとり、二人と闇の中に消えていった。しかし、まだ何人かは残っている。

「はっ」

ひとりが踏みこもうとしたが、一角はそれを許さない。突き出された刀を軽く叩き落とした。呆気ないほど簡単に男の手から刀が落ちる。

「覚悟はよいか、田辺新九郎」

一角の言葉で相手が新九郎だとわかった。暗くて顔を見分けられないのである。

「田辺殿」

よせ、と、数之進は友の腕を懸命に握りしめた。あきらかに手加減したにもかかわらず、新九郎は刀を落とした。それほど衰えているのになお怒りと怨みは消えていない。闇の中で両眼だけが、爛々と輝いている。

「きさまだけは許さぬ」

唸るように言った。

「それはおれの台詞じゃ」

斬りかかろうとした一角を、止める前に新九郎は立ち去っていた。最後まで付き従っていた数人も、倒れていた仲間を抱えあげて闇の中に消える。あとに残されたのは、動かぬ骸だけだった。

「好機であったものを」

友は忌々しげに舌打ちしたが、さほど無念な様子ではなかった。戦いが終わった薄暗い道には、血腥さと虚無だけが漂っている。地面に斃れたまま動かない亡骸を、数之進は見おろした。

「三之助さんは無事だろうか」

「いつもながらのお人好しぶりに、怒るのを通り越して、呆れるばかりよ。あやつ、いや、篠田卯十郎と思しき主が、企てた襲撃に相違ない。死人に訊くわけにはいかぬが、盗み見ていた者からは話を聞けよう」

不意に一角は言った。

「おい。先刻から蔵の陰に隠れているやつ、いいかげんに出て来ぬか。それとも一撃、お見舞いせぬことには動かぬか」

「三之助さんと下男では」

動こうとした数之進を手で止める。

「いかがしたのじゃ。腰がぬけてしもうたか。片腕でも切り落とせば、正気づくやもしれぬな。どれ、気合いを入れて……」

「し、しばらくお待ちを、お待ちくだされ！」

蔵の陰にいた男が、飛び出して来た。その場に平伏して、叫ぶように続ける。

「それがしは、紀伊家の留守居役でござる。脱藩した若党たちが妙な動きをしているという、知らせを受けましたゆえ、ひそかにあとを尾行けた次第。此度の騒ぎにつきましては、紀伊家はいっさい与り知らぬことにござります」

「ほう、紀伊家の留守居役とな」

一角は血刀を男の鼻先に突き出して、問いかけた。

「貴殿、われらの正体を存じよるか」

「……」

沈黙には、逡巡の様子が見えた。流石は紀伊家の留守居役というべきか。下手なことを喋れば、あとでよけい厄介なことになりかねない。

――見届け役だったのやもしれぬ。

狙いは幕府御算用者、首尾よく命を奪えた暁には、留守居頭の地位でも約束されたのだろう。男は平伏したまま顔をあげようとしなかった。

「今の話が、まことか否か。評定所にて、取り調べられるは必至。まずはこの男の名を教えていただこうか」

数之進は、亡骸の傍らに膝を突いた。

恵比寿講が終わった町は、祭りのあとの寂寞感に満ちていた。

第六章　江戸の中の江戸

一

襲撃を企んだのは、篠田卯十郎なのか。篠田卯十郎は、戸村三之助なのか。

鳥海左門が現れなかったため、数之進は、御算用者の手札を示して大目付を呼んだ。紀伊家の留守居役と賊の亡骸を、大目付の配下に預けた後、戸村三之助の旅籠を訪ねたが、主従は戻っていなかった。

「やはり、あやつが卯十郎だったに相違ない」

一角が言い切る。二人は仮眠を取るべく、三之助が宿を借りていた馬喰町から、本材木町の四兵衛店に向かっていた。夜明けが近づいた町は、そろそろ目覚めのときを迎えている。恵比寿講を楽しみすぎたのかもしれない。見世の雨戸を開けながら、小僧が大欠伸(あくび)をしていた。

「過日の賊も、此度の賊も、卯十郎の差し金よ。われらを始末しようとしたのじゃ」
「そうとばかりも言えぬのではあるまいか。過日は鳥海様に知らせて、われらを助けてくれたように思えてならぬ。そして、此度は、さよう。紀伊家の関与を知らせようとしたのではないだろうか」
「なれど、一歩、間違えばこれだったではないか」
一角はちょんと首を斬る仕草をした。
「仮に助けてくれたのが、篠田卯十郎だったとすれば、おぬしの腕前を知っているのだろう。ゆえに安心して、賊に襲わせたのではないか」
苦笑まじりの答えに、友も苦笑を滲ませる。
「おれの武道十八般は、そこまで知れわたっておるわけか。まあ、褒め言葉と受け取るとしよう。ときに、あの紀伊家の留守居役だが、素直に吐くと思うか」
蔵の陰にいた見届け役と思しき男は、大目付の配下の問いかけにも、同じ台詞を繰り返すばかりだった。
〝脱藩した若党が、妙な動きをしておりましたゆえ、尾行けた次第にござる。彼の者たちは当家とは、いっさい関わりなき者。すぐに追っ手をかけ、捕らえ次第、打ち首にしていただきたく存じます〟

見届け役転じて、処刑人となる。煽って利用した挙げ句、不首尾に終われば、さっさと切り捨てるのが武家の常。つくづく侍は哀れなものだと感じていた。

「『世情冷暖を看る、人面高低を逐う』とは、よう言うたものよ。もっとも密かに匿うやもしれぬがな」

二人は、右手に小伝馬町の牢屋敷を見ながら過ぎて行った。恵比寿講の名残は、まだ少し感じられるが、余韻を楽しむほどの暇人はいない。商店は次から次へと戸を開け、大八車や振り売りの者たちが行き来し始めている。

「匿うで思い出したが、我が殿は何処に。これまた卯十郎の仕業であろうか」

一角は歩きながら、問いかけの眼差しを向ける。世間知らずの若い男女が町をうろつけば、目につきそうなものだったが、いまだに見つかっていない。左門も手引きした者がいるのではないかと言っていた。

「案外、小林殿が頑としてわれらを阻んだ炭問屋の奥座敷に、若き当主と愛妾が隠れていたのやもしれぬ」

ぽつりと出た言葉に、一角の表情が強張る。小林左馬助の様子が甦ったのかもしれない。奥座敷にいた三人の勘定方は、護衛役も兼ねていたのかもしれなかった。

「そうか、あそこの奥座敷か」

得心したように見えたが、すぐに「待てよ」と首を傾げる。
「ということはだ。土佐守出奔の話は、小林左馬助を含む六人衆の考えか。いや、待てまて、あの炭問屋の主は篠田卯十郎。つまりは、なにもかも互いに承知のうえということか、ええ、数之進」
「断定はできぬ。なれど、土佐守暗殺の危機を察知していたと考えれば、辻褄が合うように思えなくもない」
「ははあ、なるほど。下屋敷の茶会か。紀伊家にすれば好機ゆえ、若き土佐守の命を狙うことは、充分、ありうるな。蔵に小判が唸っている水原家は、鯨のごとき主家にとってはよき餌であるのは間違いない。すべてを呑みこめば、財政難は一気に解決じゃ」
「呑みこみきれずに、斃される可能性がなきにしもあらず。あるいはどうにか呑みこんだものの、内側から突きくずされるやもしれぬ」
それほどに篠田卯十郎の財力は巨きいのではないか。消化不良を引き起こして、這々の体で逃げ出さざるをえなくなるのではないか。心の中で考えただけだったのだが、一角はにやにやしている。
「なんだ？」
「いや、卯十郎に対するおまえの気持ちが、痛いほどわかるゆえ、な。こうあってほしいと

思うのは勝手だが、はたして、かような男であるかどうか」

頭を冷やせと苦言を呈していた。買いかぶりすぎであろう、卯十郎は私腹を肥やすことしか考えぬ鯨商人じゃ。我が身と引き比べて考えるのはよせ。落胆するおまえの姿を見とうない。

口にはしなかった部分を、数之進もちゃんと読み取っている。

「肝に銘じておく」

答えて、続けた。

「おぬしの言うとおりだ。そもそも篠田卯十郎は、本当に存在する人間なのか。それさえも定かではないのだからな」

さらりと告げたが、

「なに？」

一角は素早く腕を摑んだ。

「どういう意味じゃ。卯十郎はすでに死んだということか」

「それも考えられるが、わたしはもうひとつ、別のとらえ方をしておる。篠田卯十郎などという男は、はじめからいなかったのではないか、と」

さまざまな商いを行い、巨額の利益をあげつつ、水原家の勘定方に泉府方をもうけて、江

戸市中に金貸しの出店を作る。儲けがどれほど出ているのか、想像もできない。まさに小判が小判を生み、あらたな蔵が立つという状況だろう。まともに届け出れば、よけいな税を取られるのは間違いない。

「そこで六人衆は考えた。架空の人物、篠田卯十郎を仕立てあげ、儲けはすべて鯨商人の蔵に蓄える。むろん税は取られるが、なにかと面倒な武家よりは、町屋の方がやりやすいではないか」

姿を見せない裏には、理由があるのではないか。その疑問が、二つの推測をもたらした。後者は、普通ではまず思いつかない考えかもしれない。

「それはそうだが」

一角はしばし言葉を失っている。途方もないことを考える数之進に、あらためて驚いた様子だった。口を開けたまま、惚けたように歩いていたが……不意に笑い始める。

「いやいや、おもしろい。あらためて思うたわ。おまえほどおもしろい男はおらぬとな。おれはおまえの相方になれて幸せじゃ。六人衆も肝を冷やすであろう。生田数之進のおそろしさを思い知って、震えあがるであろうさ」

「声が大きい」

窘めて、数之進は左に曲がる。真っ直ぐ行けば、江戸橋という道に出ていた。気を利かせ

たのかもしれない。

「お世津の顔を見て行こうではないか」

一角が言った。世津が総菜屋〈おかめ〉を営む瀬戸物町は通り道にある町だ。数之進は応と答えかけたが、無意識のうちに懐の羅針盤に触れている。

「今日はやめておこう」

三紗の結納は、少なからぬ衝撃をもたらした。杉崎春馬に対する純な想いを知るがゆえに、やけを起こしたとしか思えない。結果的に伊兵衛をも傷つけることになるのではないだろうか。つい我が身を顧みていた。

「男として想いをつらぬくべきだったのか、とな、考えてしまうのだ」

三紗にあれこれ言えた義理ではない。土佐守忠道のように、連れて逃げればよかったのかも、いや、それをしていたら、今の自分はなかった。などなど、堂々巡りの自問を繰り返している。

「おまえが取った行動は、侍として当然のことじゃ。あれこれ悩むことはない。恋道に疎いおまえが、いつになく胸を騒がせておるのは、大胆な忠道様に刺激されたせいか。それとも鳥海様に頼んでいた『もうひとつの調べ』とやらに関わりがあるのか」

鋭い問いかけに、思わず友の顔を見た。

「気づいたのか」
「いや、いまだにようわからぬ。が、なにやら疼くのよ、このあたりがな」
胸を押さえて、陶然としたように天を仰ぎ見る。
「小林左馬助が年と顔に似合わぬことを言うていたではないか。『火のような恋心は、お母上譲りやもしれぬ』とな。あれを聞いて以来、清照院様とはどのようなお方なのかと、好色心が疼く有様。一度、お目にかかってみたいものよ」
「もしかすると」
数之進は考えながら告げる。
「それがすべての始まりだったのやもしれぬ」
独り言のような呟きに、一角は舌打ちで応えた。
「ひとつ、謎が解けると、また次が現れるな。要は前殿が清照院様にお目を留めたのが始まりという意味か」
「うむ」
江戸橋に近づくにつれて、落ち着かない気分になってくる。友は即座にその変化を察していた。
「疼くか」

「いかにも」
「大当たりやもしれぬぞ」
目で指した江戸橋の手前には、大屋の彦右衛門が立っていた。目眩を覚えそうになったが、足を踏ん張って、こらえる。彦右衛門の方も気づいたようだ。
「生田様。お待ちいたしておりました。家にお客人がおいでであそばされております。冨美様と三紗様はまだお戻りではありませんが、〈北川〉にいらっしゃるのですか。今日は菜売りはお休みで……」
追いかけてくる声は右から左、足早に彦右衛門の前を通り過ぎる。苦労性と貧乏性の業が、破裂しそうなほどに騒いでいる。
数之進は、懐の羅針盤をきつく握りしめていた。

二

家で待っていたのは——。
「おお、戻ったか」
水原土佐守忠道が、鷹揚に笑いかけた。
「ここはそちの屋敷の、控えの間か。控えの間に竈があるとは、変わっておるの。従者が

煮炊きできるようにという心配りか。直答を許すゆえ、気楽に答えるがよい」

のそのそと奥の六畳間から三畳間に這い出して来た。冨美と三紗も江戸に来た当初、家はどこにあるのかと訊いたが、あれは厭味と皮肉であり、忠道の場合は本当に知らないがゆえの問いかけだろう。

「控えの間ではございませぬ。それがしは、ここに住んでおります」

と、いちおう答えた後、数之進は土間に畏まる。

「佐都のお方様は、何処においであそばされますか」

しきりに中を覗きこもうとする彦右衛門を、一角が追いやって戸を閉めた。友も数之進の後ろに蹲踞する。

「実家じゃ。二親が案ずるゆえ、一度、帰れと言うたのじゃ。余は紀伊家の江戸家老の女とは祝言をあげとうない。妻にしたいのは、佐都ひとりじゃ」

忠道は、目立たない着物と袴を着けて、下級藩士の姿を装っていた。物腰や口調で氏素性が露見するかもしれないが、少なくとも見た目においては、どこかの家中の者という雰囲気を作っている。

「いろいろとお伺いしたいこともございます。それがしも、座敷にあがることをお許しいただけまするか」

「好きにするがよい」

そう言いつつ、三畳間から動こうとはしなかった。一角が遠慮がちに申し出る。

「殿。申し訳ございませぬが、奥の六畳間にお移りいただけまするか。奥が上屋敷の中奥の御座所とお考えいただきたく思います」

話しかけながら、座敷にあがれと数之進の尻を押した。確かに狭い土間に畏まっていては、茶の支度もままならない。尻に竈の火が移りかねなかった。

「あいわかった」

あくまでも鷹揚に、忠道は応える。数之進は深々と一礼して、手前の三畳間にあがる。ふだん手枕で寝転がる家が、にわか御座所に変化した。

「すぐに茶の支度をいたしますゆえ、殿におかれましては、しばしお待ちを」

一角が小姓らしい言葉を発すれば、忠道はひと言、答える。

「大儀」

ぴんと背筋を伸ばした姿は、薄暗い部屋の中でも独特の気を放っていた。下級藩士ふうの装いをしてなお内側からあふれ出る品や知性を隠すことはできない。これが育ちの違いかもしれなかった。

「朝餉は召しあがられましたか。まだ済ませておられないのであれば、それがしが支度いた

しまするが」

ふたたび一角が訊いた。

「うむ、大儀」

答えた忠道に、今度は数之進が問いかける。

「手引きしたのは、だれでござりますか」

率直すぎたかもしれない。

「言えぬ」

ひと言で終わった。きつく引き結んだ唇に、意外なほどの強さが浮かびあがっている。事前に綿密な打ち合わせをしていたことは、充分、考えられた。やはり、暗殺を免れるための逃亡策なのではないか。義理立てしているその相手とはだれなのか。数之進は一番、弱いところを攻める。

「清照院様が案じておられます」

聞いたわけではないが、偽りにはならないだろう。恋人同士のようだと揶揄されるほど、母子の仲はよかったはず。案の定、忠道の仮面がくずれた。

「母上か」

引き結んでいた唇を、今度は噛みしめる。手引きしたのは清照院ではないようだ。ひとつ、

わかっただけでもいい。ひとつずつ外濠を埋めていくしかなかった。

「まさか、ここでこれをお渡しすることになるとは、思いませなんだが」

数之進は懐から羅針盤を出して、畳に置き、忠道の方に軽く押しやった。おお、と、小さな声をあげる。

「羅針盤か」

「お手元にお届けするのが、遅うなりましたこと、お詫びいたしまする。殿は此度のことを示唆なされたのでござりますか」

頭には、忠道が発した意味ありげな言葉が甦っている。しかし、当人は忘れきっていたのだろう。

「はて、なんの話じゃ」

訝しげに問いかけた。

「お目通りいたしました折、殿は羅針盤がほしいと仰せになられました。その後、こうお続けあそばされたのです」

頼んだぞ。そちの手から余に渡してもらいたいのじゃ。よいな。

「あれが妙に気になりました次第」

「さようか。なれど、羅針盤を口にした意味は他にある。かつて、『ある者』が言うたのじ

ゃ。そちこそが余を導いてくれる羅針盤じゃとな。彼の者は言うた。我が身になにかあったときには、生田数之進をお訪ねくださりませと」

ある者と聞いて、なぜか、逢ったこともない篠田卯十郎が浮かんだ。鯨商人、商人将軍、この世のすべてを買える男。数之進は慎重に言葉を選びながら言った。

「過分なお褒めのお言葉を賜りまして、恐悦至極に存じます。殿にお訊ねしたいのですが、『ある者』とはどなたでござりますか」

「それも言えぬ」

きっぱりと答えたが、急に不安な顔を見せる。

「いかがなされましたか」

「余もひとつ、そちに訊ねたき儀があるのじゃ。そちは……幕府御算用者か？」

忠道は、探るような目を向けた。

「仰せのとおりにござります」

即座に答える。

「さようか」

緊張していた忠道の表情が、このとき、ようやくなごんだ。念のために懐から御算用者の手札を出して、見せる。得心したように何度も頷いていたが、不意に羅針盤を数之進の前に

置いた。
「この羅針盤は、そちが持っていた方がよかろう。『ある者』もそれを望んでいるように思えてならぬのじゃ」
「なれど」
「此度の礼じゃ。受け取るがよい」
「は」
数之進は、羅針盤を掲げてから懐に戻した。茶を淹れた一角が、美しい所作で忠道と数之進の前に湯飲みを置く。安物の器が銘のある茶器に見えるのは、湯飲みを手に取った忠道の所作もまた美しいからだろう。
しばし茶を楽しんでいたが、
「そちは噂を聞いたか」
躊躇(ためら)いがちに、ふたたび口を開いた。
「どのような噂でございますか」
「余の噂じゃ。余が父上の子ではないという噂じゃ」
「な……」
数之進は狼狽えた。忠道が前殿の子ではないというのはすなわち、清照院の不義を告げる

ようなもの。思わず振り返って、戸口を見やっていた。だれかに盗み聞かれたのではないかと思い、恐れに似た不安が湧いたのだ。

「案ずるな。だれもおらぬ」

一角が蹲踞の姿勢のまま、戸を少しだけ開けて、外を確認する。

「かような噂は、ついぞ耳にしたことがござりませぬ。殿のお耳にそれを入れたのは、どなたでござりますか」

これもおそらくお答えはいただけまい。そう思いつつの問いかけだったが、

「小姓の田中伝次郎じゃ」

忠道は答えた。

「田中伝次郎」

呟いた数之進に、一角が言い添える。

「あの同役よ。刺し子足袋の小姓じゃ」

友が履いていた継ぎ当ての足袋を、珍しがって是非、買いたいと申し出た小姓だ。数之進は会っていないが、いささか胡散臭い噂話だと思っている。

「おぬしはどうだ。今の噂話を聞いたことがあるか」

念のため友に確かめた。

「いや、奉公して以来、一度も耳にしたことはない。田中伝次郎とは、中奥において一緒にお務めをしているが、おれには、あ、いや、それがしには、ちらとも言わなんだ」

いつもの口調を、慌て気味に訂正したが、忠道は気にする余裕をなくしている。

「余も初めて耳にする話であったゆえ、伝次郎にはくれぐれも他言無用と申しつけた。されど、気持ちはおさまらぬ。それもあって、屋敷を出た次第じゃ。真実を知りたいと思うたがゆえよ」

純な気持ちは実母の名誉問題に向いていた。愛妾と駆け落ちしたのには、幾つかの理由があるようだ。ひとつはむろん持ちこまれた婚姻を退けるため、二つめは母に関わる噂の真偽を確かめるため、三つめはおそらく暗殺を回避するためではないだろうか。忠道はこわいほど真剣な眸をしている。

「仮に偽りだとすれば、田中伝次郎を処罰せねばならぬ。御算用者のそちであれば、確かめることができるのではないか。両目付の鳥海左門に、事の次第を伝えてほしいのじゃ。そして、真実がわかったときには、たとえそれが余にとって辛い内容であろうとも、教えてほしいのじゃ」

せつせつとした訴えには、覚悟のようなものが見え隠れしていた。潔く当主の座を退くつもりなのかもしれない。数之進も安易な受け答えはできなかった。

「承りました」
頷き返して、告げる。
「できるだけ力添えいたしますが、殿におかれましては、いったんお屋敷にお戻りいただきたく存じます。佐都のお方様を妻にと思われるのであれば、殿の口から御重臣たちに告げるべきであると存じます。また茶会に出て、紀伊家の江戸家老とも直接、話をされるのが宜しかろうと存じます次第」
言葉を切り、あらためて言った。
「いかがでございまするか。殿には、そのお覚悟ができておられますか」
紀伊家がおかしな動きをしているのは百も承知のうえだった。忠道が下屋敷の茶会に出席すれば、命を奪われるかもしれない。それを案じた六人衆が、策を講じた結果、忠道はここにいるのではないか。
駆け落ち騒動の裏には巨きな謀がちらついている、ように思えてならなかった。
「……」
忠道は口を開かない。無言で数之進を見つめている。それが答えのように思えたが、満足できなかった。別の方向から切り崩しにかかる。
「今一度、話を戻したく思います。昨日、殿は、築地鉄砲洲の炭問屋においであそばされた

のではありませぬか」

匿ったのが小林左馬助であれば、幾つかの話が繋がって、隠された真実が見えてくる。忠道はなかなか答えようとしない。それでも数之進は、辛抱強く答えを待っていた。

永遠にも思われる沈黙が流れたが……やがて、忠道は小さく頷いた。

「そちの考えは間違っておらぬ。あのとき、さよう、そちたちが探しに来ていたとき、余は、篠田卯十郎が営む炭問屋の奥座敷にいた」

やはり、駆け落ち騒動は、忠道を逃がすための策。近々、下屋敷において、水原家と紀伊家の戦が起こるのは確かだろう。茶会はあくまでも表向き、主家は水原家を呑みこむべく、鯨のように大口を開けて襲いかかる——。

「数之進」

小声で一角が呼んだ。外を顎で指している。障子越しに、人影が見えた。

「ご無礼つかまつります」

言い置いて、土間に降りると、外に出た。

「無事であったか」

鳥海左門が安堵したように言い、くるりと背を向ける。だれもいない姉の家に、入って行った。数之進もあとを追いかける。

家の路地には、いつもと同じ平らかな朝が訪れていた。

三

「数之進に頼まれていた『もうひとつの調べ』だが」
左門は言った。
「李兵衛が紀伊国まで行き、調べてきた。思うていたとおりのようじゃ」
「村上様がおいでになられたのですか」
「さよう。他にも私用があったようでな。旅立つ前に〈北川〉のご隠居に会うたとか。爺が皺だらけの額を突き合わせて、なにやら画策しておる様子だが、われらは知らぬふりをするのがよかろう」
「承知いたしました」
笑って、数之進は問いかける。
「紀伊家の江戸家老について、お訊ねいたしたく思います。水原家に縁談話を持ちかけているのは」
「新見大膳よ。紀伊様のおぼえめでたき男でな。まだ三十八の若さなれど、紀伊家の羅針盤と呼ばれている由。御三家と雖も、うかうかできぬご政情だが、荒波を必ずや乗り切るで

あろうというのが、もっぱらの噂じゃ」

「羅針盤、でござりますか」

それが引っかかった。忠道が言うところの『ある者』が、本当に伝えたかったのは新見大膳のことではないのか。

「なにか気になることでもあるのか」

「いえ、お続けください」

「紀伊家が水原家に狙いをつけたのは、ある意味、当然やもしれぬ。鯨商人は目立ちすぎた。狙うてくれと言わんばかりよ」

「そのことでございますが、新見家のことを今一度、お調べいただきたく存じます。縁談を持ちかけたのは、本当に新見家の方なのか。そのあたりのことを急ぎ、確かめていただきたく思います」

と、数之進はあらたな調べを頼み、左門との密談を終えた。篠田卯十郎は生きているのだろうか。あるいは……だれかに暗殺されたことも考えられる。

水原家の存亡をかけた戦が、静かに始まろうとしていた。

二日後の早朝。

数之進は、一角と市ヶ谷原町の水原家の下屋敷にいた。敷地内を縦横無尽に走る川や堀を、屋根船に乗って進んでいる。五万坪にも及ぶ下屋敷は、もはや屋敷とは呼べないほどの規模を誇っていた。

ひとつの国である。

中心に設けられた母屋は、上屋敷をしのぐ堂々たる風格の屋敷だった。その屋敷の西と東に、二の丸、三の丸と名付けられた平屋の家屋が連なっている。さらに屋敷を取り囲む石壁の外側には、さまざまな商家が立ち並び、その外側には田畑が続いていた。

城下町と言えるほどの広さと機能をそなえている。

「小間物屋、呉服問屋、紅(べに)と白粉(おしろい)の見世、畳表や蚊帳を商う見世、はたまたその先には、農家や田畑が広がっているではないか」

数之進は、左門から渡された江戸名所図絵を手に、思わず嘆息を洩らした。

「江戸の中に、もうひとつの江戸を造るとは」

この屋敷の絵図は手に入らなんだが、と、上役から渡されたものである。確かに桁外れの下屋敷だった。今、数之進は隅田川を模したと思われる川を屋根船で流している。同乗者は友のみ、あとは船頭が棹を操っていた。むろん川幅は実際の隅田川よりも狭いが、川岸の風景は錯覚に陥るほど本物の江戸と似通っている。

「趣味の悪い真似をするものよ」

一角は辛辣だった。

「このあたりの武家屋敷を、小判で買い漁ったに相違ない。五万坪と聞いたが、正しくは五万五千坪ほどであるとか。お忙しいのはわかるが、鳥海様も大雑把なことをなさるものじゃ。江戸名所図絵を渡すとはな」

「なれど、ほぼ同じように造られておるゆえ、間に合うではないか。よう考えて造ったものだと、わたしは思うがな。仮にだが、戦となった場合、少なくとも兵糧には困らぬ。米、大豆、麦ばかりではのうて、野菜も穫れるし、魚も釣れるゆえ」

「塩と砂糖は作れぬ」

すかさず一角が反論する。

「確かに塩と砂糖は無理だろうが、屋敷の蔵に貯蔵しておけば、すぐには困らぬ。二、三年程度は、軽く保つのではあるまいか」

「ここが砦（とりで）という考えには、おれも異は唱えぬ。鳥海様のお話どおり、跳ね橋を降ろしてもらわねば、中に入ることさえかなわぬのだからな。内堀まで造るとは、徹底しておるわ。おまえは」

と、急に声をひそめた。

「ここを造ったのは、やはり、篠田卯十郎だと思うておるのか。水原家の金主になっただけではのうて、下屋敷の絵図もすべてやつが考えたと？」

少し先を進む屋根船には、案内役を買って出た小林左馬助と、小姓の田中伝次郎が乗っている。数之進は昨日、『手暗衆』を名乗る六人衆と密談の場を持ったのだが、思うような話はできていなかった。

「おそらく、な」

小声で答える。六人衆によると、当主の忠道は何度か命を狙われたらしい。そのため、砦のようなこの下屋敷で過ごすことが多くなっていたようだ。当主を守るのはもちろんだが、ここを造った者の意図は他にもあったように思えてならない。

「清照院様をお守りするため、であろうか」

一角が心を読んだような問いかけを発した。村上杢兵衛の『もうひとつの調べ』がもとになっているのは言うまでもない。左門から聞いた話は、すべて一角に伝えてある。

「それもあるだろうが、他にも幾つか大きな意味があるように思えてならぬ」

「なんじゃ」

「まずは水原家の力を誇示するためではあるまいか。さすれば、譜代大名家として、ひとつの国を賜るという、かねてよりの悲願もかなえられやすくなる。加えて、紀伊家に対する脅

威にもなるだろう。今、これだけの屋敷を造れる者が、はたして、幕臣の中にいるかどうか」

「おらぬ」

友が即答して、続けた。

「ここに入るのを許された家臣は、水原家の中でもわずかであると聞いた。他家にいたっては、初めての者ばかりであろう。見ろ。子供のような、はしゃぎぶりではないか」

苦笑しつつ、川岸を見やる。紀伊家と水原家の下級藩士が小舟の準備をしていた。朗らかな笑い声が絶え間なくひびいている。数之進は親睦のためと称して、両家の藩士による小舟競走大会を提案したのだった。

「茶会を盛り上げるための小舟競走か。おまえの提案によって、両家の家臣だけでも心が近づけばよいが」

珍しく一角の表情がくもった。朝陽が波間に反射して、美しく煌めいている。稽古を兼ねているに違いない。何艘かの小舟が、川の上を滑るように疾っていた。

「紀伊家は水原家に密偵を潜入させているやもしれぬ」

一角が独り言のように呟いた。

「いや、紀伊家だけではあるまい。御三家、御三卿、大大名家にとって、かように旨味のあ

る大名はおらぬからな。一大名家として立ちあがっていないのも、やりやすいのではあるまいか。鯨のごとく大口を開けて、隙あらばと狙うさまが、目に浮かぶようじゃ」

「篠田卯十郎は、それを憂えていたに相違ない」

数之進の言葉に、友は問いかけを返した。

「鯨商人は死んでいると？」

「その可能性が高いのではないだろうか。殿がわたしを頼っておいであそばされたのは、篠田卯十郎がおらぬがゆえであるように思えてならぬ。それに鯨商人が生きていれば、昨日の会談はもっと有意義なものになったのではあるまいか」

思うような流れにならなかったのが悔やまれる。謀を断念させるのは至難の業、今日が正念場だった。

「始末されたのであろうか」

友の声が、いっそう小さくなる。目立ちすぎた者は、闇から闇に葬られるのが常。否と答えたかったが、九対一の割合で命を落としているように思えた。

「わからぬ。生きていてほしいが、逢うのはむずかしいやもしれぬ」

一度でいい、篠田卯十郎と逢って話がしたい。祈りにも似た想いは、かなえられるだろうか。

「殿は、おまえのことを羅針盤と言うておられたな」
どこか誇らしげな言葉に、つい声をあげていた。
「正しくは『かつて、ある者が言うたのじゃ。そちこそが余を導いてくれる羅針盤じゃとな』だ」
「ご丁寧なご指摘、まことにもって恐悦至極。我が友は、照れと恥ずかしさがないまぜになっておるようじゃ。なれど、本日もおつむが冴え渡っているのは重畳よ。この分なら此度の騒ぎも簡単に取り纏めるであろう。おれの出番はないやもしれぬ」
「たまには楽をさせてやりたいが、はてさて、どうなることか。まずは第一幕よ」
「『小姓狂乱』とでも名付けるか」
「田中殿は、いたって普通のように見えるがな」
「前にも言うたと思うが、領地の新宮から来たにしては、訛りがなさすぎる。加えて、おれが履いていた継ぎ当てだらけの足袋を、珍しがっていたのも『おかしい』ではないか。下級藩士の身でありながら、あたりまえのことを知らぬのはなぜなのか」
おかしいの部分に、ことさら力をこめた。数之進の十八番を真似ていた。
「江戸暮らししか経験したことがないからやもしれぬが……まことに紀伊家から遣わされた刺客なのであろうか」

考えながらの言葉が出る。田中伝次郎に対しては、別の疑問も湧いていた。下級藩士の身でありながら、あたりまえのことを知らぬ理由は、もうひとつ考えられるのではないだろうか。しかし、友はとらわれていた。

「それ以外に考えられるか。水原家の内情を知るには、殿のおそば近くに仕えるのが最良の策ではないか」

「おぬしの言うとおりだが……なにゆえ、忠道様に『前殿のお子ではない云々』と、吹きこんだのであろうな」

数之進には妙な引っかかりがあった。それが問いかけになっていた。一角はなにを今更という表情で答える。

「わかりきったことを訊くでない。水原家を攪乱するためよ。現に殿は出奔して、御算用者の家においであそばされた。まあ、六人衆にしてみれば、殿を安全な場所に逃がすためだったのやもしれぬがな」

「なれど、殿は割とすんなりお戻りあそばされた」

「おまえを信じたからじゃ。会うて、わかったのであろう。ゆえに安心して、お戻りになられたのよ」

「あまり持ちあげるな。御家老たちの反応が、今ひとつだったのが気にかかる」

言い置いて、偽隅田川の彼方を見やった。

「手筈どおりにいけば、そろそろ三艘の舟が現れる頃だ。歌舞伎の芝居小屋には、小林殿がなんらかの用意を調えた由。殿にとんでもない噂を吹きこんだ男の正体やいかに。関八州あたりの出であるとすれば、刺客として遣わされたのやもしれぬが」

別の考えは胸に秘めている。今の段階では迂闊な話はできない。

「ということは、つまり」

一角の意味ありげな目に、無言で頷き返した。

前を進んでいた屋根船が近くの船着き場で停まる。左馬助と田中伝次郎が降りた。数之進たちの屋根船も、その船着き場に行き、二人も船から降りる。

四

「ここが日本橋近辺を模した町じゃ」

左馬助が言い、先に立って歩き出した。江戸を模したといっても川同様、規模はごく小さい。薬種問屋、小間物屋、呉服問屋などなど、いちおうひととおり揃っているようだが、一軒ずつしか建っていなかった。

左馬助は日本橋ではなく、江戸橋に足を向ける。初冬のやわらかな陽射しが降り注ぐ中、

紀伊家の藩士たちと水原家の家中の者が見世を素見（ひやか）していた。

「ほう。売っている品は、市中と変わらぬな」

「あたりまえではないか。使えぬ品では話にならぬ」

「土産に紅でも買うて行くか」

江戸に出て来たばかりの田舎侍さながらに、あちこちの見世を覗いていた。早朝であるにもかかわらず、けっこうな賑わいを見せていたが、歩いているのは侍のみ。いささか色気のない風景になっている。

見世の品物は、手頃な値段のものもあるが、老舗の高級品が多いように思えた。田中伝次郎も、紀伊家の藩士に混じって、見世に出入りしている。

「藩札（はんさつ）を使うのですか」

数之進は、呉服問屋を覗きこみながら訊いた。番頭や手代と思しき数人が、帳場で帳簿の丁を繰ったり、掃除をしている。目が合った奉公人に、にこやかに笑いかけられた。

「さよう。禄高に応じて、藩札が渡されておるのじゃ。日本橋に行かずとも、ここに来れば買える仕組みじゃが、ふだんは許された者しか出入りできぬ。今日は特別に希望する者たちや、紀伊家の藩士を招いたがの。両家の者たちにも藩札を渡しておる。大盤振る舞いじゃ」

と、左馬助。続けて問いかけた。

「奉公人の役目を務めるのは、家中の者でございますか」
「いかにも水原家の家臣よ。交代で務める仕組みじゃ。商人から振り売り、百姓と、殿に命じられれば、いかなる御役目も務めねばならぬ」
「なるほど。この屋敷の中で、さまざまな商いが学べるというわけでござるか。よい稽古場でござるな」
得心した様子の一角に、左馬助が言った。
「鯨商人の考えじゃ。仮に、よいか、仮にじゃぞ、御家断絶となった折には、すぐさま商人として生計を立てられるではないか。あるいは百姓や漁師にもなれる。この日本橋の裏手には、田畑も広がっているゆえ、学ぶには格好の場よ。流石に遊郭だけはないがの」
ひゃひゃひゃと、歯が抜けた隙間から笑い声が洩れる。鯨商人を口にしたのは、もはや篠田卯十郎との繋がりを隠しておく必要はないと判断したからかもしれない。だが、昨日、密かに持たれた会談の場では、ここまで踏みこんだ話は出ていなかった。
「あちらには神田川が流れているのですか。柳原土手には、古着の床店なども並んでいるのでしょうか」
数之進はなにげなく口にした。冨美に頼まれて古着を買いに行くことも少なくない。足を向けようとしたが、「ならぬ」と左馬助に止められた。思いのほか強い口調に、当惑の眼差

しを向ける。
「古着の床店を見てみたいと思うたのですが」
「以前は柳原土手の床店もあったが、今は片づけてしもうた。思いのほか古着が集まらなくての。取り止めた次第よ」
取り繕うような返事の後、
「言うたやもしれぬが、ここに当家以外の者が入るのは初めてでの」
老藩士はちらりと目を投げる。
「殿と清照院様のお許しがあったゆえ、貴公らを早めに案内した次第よ。気づいたことがあれば、遠慮のう言うてくれぬか。千両智恵の目から見て、いかがであろうかの」
「素晴らしい取り組みであると存じます。なにより家中のかたがたの、明日を考えておられるのが宜しいのではないかと思います次第。この屋敷を造られた方に、是非、お目にかかりたく思います」
「さよう、か」
左馬助は言いよどみ、窺うように数之進を見た。
「あとで殿が、仰せになるであろう。わしの口からは言えぬ」
「は」

会釈して、一角に開幕の合図を送る。江戸の中に設けられた江戸の町に、遊びに来たわけではない。

「お、田中殿。川の方からお囃子の音が聞こえてきましたぞ。あれはなんでござろうか。江戸橋の方に人が流れておりますな」

一角の誘いを受けて、見世を覗きこんでいた伝次郎が歩き出した。人波が江戸橋に進んでいる。三艘の中型船が、こちらに近づいて来た。それにつれて笛や太鼓の音が大きくなってくる。

三艘の船に分かれて乗っているのは、歌舞伎役者やお囃子を務める者たちだった。船乗り込みと呼ばれる派手な催しである。

まずはじめに着いた船からは、中村座の歌舞伎役者たちが降りた。江戸歌舞伎の顔見世興行は十一月からだが、それに魁けて水原座における興行を頼んだのだった。贅沢令を守ったとはいえ、数之進は流石に胃の痛みを覚えている。

「苦労性と貧乏性の業が疼いておるな」

一角に表情を読まれた。

「いかにも」

「おれが許すゆえ、しばし忘れるがよいわ。此度は特別じゃ。篠田卯十郎であれば、同じこ

とをやったであろう。鯨商人になりきるのが、騒ぎをしずめる一番の策よ」

小声の会話は、田中伝次郎の大声に遮られる。

「これはすごい。船乗り込みでござろうか。話には聞いており申したが、それがし、初めて見た次第。いやいや、なんと豪華な顔ぶれでござろうか。中村座の役者でござる。宮地芝居ではのうて、売れっ子の、本物の歌舞伎役者でござる。殿におかれては太っ腹なことよ。粋なはからいをなさるものじゃ」

頬を染め、指さして、前に出ようとする。一角が止めなければ、役者に抱きついていたかもしれない。興奮しきっていた。

――歌舞伎役者の船乗り込みを初めて見た、か。

ひとつ重要な事実があきらかになったが、むろん口にはしなかった。一角に脇腹を突かれて、二艘目の舟に目を向ける。降りて来たのは、きらびやかな装束に身を包んだ鳥海左門と配下たちだった。

「……」

数之進は呆気にとられて、左門たちを見送っている。近くにいて守るとは言っていたが、まさか、歌舞伎役者の一群に加わるとは……。

「らしいと言えなくもない。おまえもこれでわかったであろう。要は化けるのが、お好きな

のじゃ」

一角は愉しげに含み笑っている。だれかに聞かれるのを懸念したのだろう、左門の名は敢えて告げなかった。数之進は気を取り直して、堅苦しい蘊蓄を口にする。

「歌舞伎が能や狂言と大きく違う点のひとつは、豪華な大道具を発達させ、華やかに飾る場を作りあげていることであるとか。本より得た知識でござるが、われらも本日は思う存分、風流の心を味わわせていただこうではありませんか」

明るく告げると、伝次郎も満足げな笑みを浮かべた。

「さよう。にわか成金じゃ。それがし、ここに来るのは初めてでござるが、いやもう、ただただ圧倒されるばかり。ささ、参ろうぞ。遅れを取ってはならぬ。どうせなら桝席で観ようではござらぬか。ささ、急がれよ、小林殿」

急かしたとたん、左馬助に一瞥される。

「慌てるでない。すでに上桟敷を取ってあるわい」

「これは失礼し申した。流石は小林殿」

上機嫌で伝次郎は、左馬助のあとに続いた。両家の藩士たちも、人波に身をまかせて、芝居小屋のある隣町に足を向ける。日本橋室町のすぐ隣町が、堺町というのはご愛嬌かもしれない。そぞろ歩く者すべてが侍という、いささか奇異な風景の中、歌舞伎役者たちは芝居小

屋の楽屋口に吸いこまれて行った。

「いやいや、これは見事。櫓に掛けられた幕の紋様は、我が水原家の家紋。なれど、造りは中村座のように思えなくもありませぬ。まあ、それがし、さほど詳しくはござらぬゆえ、ようわかりませぬがな」

伝次郎は興奮醒めやらず、驚きに目を瞠っていた。

三階建ての芝居小屋の、櫓の幕には、伝次郎が言ったように、水原座の名と家紋が記されている。入り口付近には、色々な形をした飾り物が取り付けられて、さながら巨大な作り山――祭のときに練り出す山車の大きなもの――のように見えた。

贔屓筋が座元や役者に贈った品物も、芝居小屋の前に山のごとく高く積みあげられている。これは積物と呼ばれていたが、小判を積んでいるように思えなくもない。用意した数之進の胃は、きりきりと痛み出していた。

苦労性と貧乏性の気持ちなど見物客は知る由もない。

「櫓は九尺（二百七十センチ）もあるとか。なにゆえ、かような大きさの櫓を建てるのでござろうか」

伝次郎が発した問いかけに、数之進は遠慮がちに答えた。

「櫓に神が降りる由。一日の芝居を見物していただこうという目的で作られたそうにござる。

神の依代でござりますゆえ、一番高いところにあの出しっ弊と呼ばれる白い御弊を、空に向かって差し出すように飾るとか」

混み合って身動きできない状態になっている。一般席の平土間は、鼠木戸から入るのだが、数之進たちは上桟敷の客。別の入り口に少しずつ進んで行った。鳴物の音がいちだんと賑やかになる。鼠木戸の前、水原家の家紋入りの提灯の下には、二人の木戸芸者が立ち、読み立てが始まっていた。

「吉例のとおり、役者の声色を使いやしょう」

「して貴殿はだれをまねられるな」

「当座の花形、鯨屋をまねまする」

「それはいちだんとよかろう。さらば、まねられよ」

ひときわ高く鳴物の音がひびきわたる。

当然のことながら、屋敷内に芝居小屋を造るのはご法度。いかに卯十郎が苦労して、幕府の重鎮たちに小判をばらまいたかが、華やかな賑わいに表れていた。

「水原座とは、前殿もお戯れがお好きでござるな」

伝次郎の声に、男の声が重なる。

「なに、もう入れぬのか」

「あいすみません。満員でございまして」
鼠木戸の前で、似たようなやりとりが繰り返されていた。
「追い込み席でもよいゆえ、なんとかできぬか」
「そう申されましても、無理なものは無理でございます」
藩士たちの怨めしげな目に送られて、数之進たちは中に入る。上桟敷用の入り口から入れるのは、これが最初で最後かもしれない。真の中村座ではないものの、高揚感を覚えているのは伝次郎だけではなかった。入り口で履き物を脱ぎ、刀を預けて桟敷に入った数之進も、思わず息を呑む。
桟敷の天井に吊ってあるのは、場提灯と呼ばれる細長い提灯だ。主な役者たちの定紋が描かれている。そして、桟敷の正面には、廻り舞台にもなる本舞台がもうけられており、平土間の黒い板囲いの中では、鳴物を演奏していた。
平土間の桝席は、すでに押すな押すなの大盛況。四人も座れば窮屈な、さして広くない桝席に、少ない桝でも六人、座らされている。隣が女子であればまだしも、男ばかりでは華がない。
「お。吉野には、芸者らしき女人がおりますな」
目敏く伝次郎が見つけた。吉野、または通天とも呼ばれる二階席には、上級藩士らしき者

たちが、芸者衆に酒を注いでもらっている。相当、早い時間から陣取っていたのではないだろうか。うたた寝している男もいた。同じ形の席が東西にもうけられている。

「さて、われらは上じゃ」

左馬助が、西の上桟敷に続く階段をあがり始めた。この席も東西にあって、東の方が格が高い。伝次郎からは分を弁えない訴えがあがる。

「東の席ではござらぬのか。空いているではござらぬか」

反対側の東の上桟敷には、まだだれも座っていない。簾がさげられている部分は当主たちの上覧席ではないだろうか。どこも満員なだけに、その空席が目立っていた。

「東の上桟敷も、すでに予約済みよ。じきに埋まるであろう」

左馬助は素っ気なく応じる。その言葉が終わらないうちに、六人衆の面々が東の上桟敷に姿を見せた。先に来ていたのだろうか。駕籠を見た憶えもなければ、入り口付近で会った憶えもない。

「殿じゃ」

一角が告げた。忠道が清照院らしき尼姿の婦人をともなって、簾がさげられた東の上桟敷に入る。これまた、どこから姿を見せたのか、数之進は気になっていた。左門から渡された江戸名所図絵には、偽江戸の細かい配置まで載っていない。

「それがし、あまりの人だかりで気づきませなんだが、隣に芝居茶屋がござりましたか。御家老をはじめとするかたがたや、殿と清照院様におかれましては、茶屋でお過ごしあそばれていたのでござりますか」

渡り廊下で繋がっているのかもしれないと思った。駕籠を入り口に着けて入るのは、もはや無理である。次第に熱気が高まる場内には、次から次へと侍が入って来る。入り口はおそらく今も押し合いへし合いの状態だろう。

「殿か」

左馬助はさらりと言った。

「おいであそばされたのは他でもない、お屋敷からじゃ。この屋敷にはいたるところに抜け道があっての。建物と建物が地下で繋がっておるのよ。殿や清照院様はむろんのこと、御家老たちも地下の道から自由に出入りできるのじゃ」

五

「……」

数之進は、一瞬、声を失っていた。

抜け道があるという話は、一度も聞いていない。当然のことながら秘中の秘であるはず。

それをいともたやすく洩らすとは、どういうことなのか。

「ほほぅ、抜け道でござるか」

伝次郎は興味津々だった。

「家中の間では、ちらほら噂が流れておりましたが、まことでござったか。して、商店や百姓からも母屋に行けるのでござるか」

「行ける。ここはの。篠田殿が清照院様のために造った屋敷じゃ。雨風に曝されることなく、行き来できるようにという配慮よ。至れり尽くせりであろう。お方様はだれに憚ることなく、気楽に買い物や芝居を楽しめる。まさに極楽浄土じゃ」

「それは小林殿にとってではござらぬか」

揶揄するような一角の言葉に、老藩士は、いささか気分を害したような顔になる。

「無礼なことを言うでない。わしは、いつでも本物の堺町や葺屋町に行けるではないか。なれど、お方様はそうはいかぬ。ゆえに、篠田殿は前殿のご遺志を受けて、この屋敷を造ったのじゃ」

卯十郎と呼び捨てていたのが、いつの間にか、『篠田殿』に変わっている。微妙な変化に、複雑な想いが表れているように思えたが……。

「小林殿。あのお方は」

数之進は東の上桟敷に目を奪われる。遅れて、ひとりの男が姿を見せたのだ。家老たちの後ろに、そっと腰をおろして、俯いている。

町人髷を侍髷に結い直しているが間違いない。

「さよう。戸村三之助こと、篠田卯十郎殿じゃ」

「え」

ふたたび絶句していた。もしや、と疑ったことは何度もある。今も疑いは消えていないが……卯十郎はすでに死んだ可能性が高いのではないだろうか。そう思い始めていただけに、衝撃が大きかった。

「それがし、ひさかたぶりにお顔を拝見し申した」

最初に声を発したのは、伝次郎だった。

「篠田様は神出鬼没でござるゆえ、いつ、どこに現れるのか、見当もつきませぬ。もしかすると、この下屋敷から本物の日本橋に続く抜け道もあるのではござらぬか」

冗談まじりの言葉だったが、あながち偽りとも言い切れない。笑いとばせなかった。数之進は、あらためて鯨商人の底知れない財力を思い知らされている。それと同時に、幾つかの事柄が頭を駆けめぐっていた。

忠道が告げた羅針盤の、意味ありげなあれはなんだったのか。篠田卯十郎が死んだからこ

そ、数之進に助けを求めたのではないのか。昨日の話にはない流れに混乱していた。

「幕があがる前の余興でござろうか」

伝次郎が、桟敷から身を乗り出すようにして覗きこんだ。花道に波の文様を描いた浪布が敷かれている。それと同時に、舞台脇に登場した頭取の口上がひびいた。

「これより大道具大仕掛けをご覧にいれまする」

それっという掛け声とともに、平土間の間から何本もの橋脚があがった。東西の桟敷に向かって、するすると橋板が伸びて行く。まるで手品を見ているようだ。あっという間に見事な橋が出来上がる。

賑やかな鳴物が流れると、祭りの行列だろうか。華やかな衣装をまとった娘姿の者たちが、橋をゆっくり渡り始めた。偽の芝居小屋であるのを忘れるほどの豪華さに、みな見惚れている。

「上にばかり気を取られてはならぬ」

左馬助に言われて、舞台に視線を戻した。そこでは鯨が泳ぎ、舟に乗った漁師が追いかけている。水原家の領地、新宮の鯨獲りの場面を演じているようだ。橋の上には祭り行列、下では鯨獲りの図と、ちぐはぐに思えなくもないが、鯨を獲った後の村祭りと考えればいいかもしれない。

「そうじゃ。行け」

左馬助の掛け声に応えるように、舟に乗った漁師は、鯨を追いかけて、素早く銛を打ちこむ。そのまま鯨に舟を曳かせ始めた。

「あれは突取捕鯨法と言うての。銛綱を舟に繋ぎ、鯨に曳かせて弱らせる漁法よ。漁師の技が勝つか、鯨の力が勝つか。命懸けの漁じゃ。充分に鯨が弱ったところで」

言葉に合わせるかのごとく、えいっと漁師役が銛で鯨を突き殺した。ように見えたが、鯨は急に暴れ出した。

「克鯨やもしれぬ。音に驚かぬ豪胆さを持つうえに気性が荒いのじゃ。大きさは、さよう、八間（約十四・四メートル）にもなろうか。暴れる克鯨を抑えきれず、海に引きずりこまれて命を落とした漁師がどれほどいることか」

老藩士の感傷は、華やかな舞台には似合わない。漁師は鯨を仕留めて、前頭部を包丁で切る仕草をした。

「あれはなにをしているのですか」

数之進の問いかけに、得々として左馬助が答える。

「頭に穴を穿ち、そこに帆柱を貫通させるのじゃ。この帆柱を鯨の両脇に付けた二艘の舟に結びつける。そうやって鯨を海に沈めたまま、浜まで運んで行くのよ」

「なれど、八間もの大きさでは、浜にあげるのも容易ではありますまい。人力だけで引き上げるのですか」

いつものように好奇心を刺激されていた。舞台には別の鯨と漁師が現れて、もう一度、突取捕鯨法が演じられている。それを見やりながら、数之進は老藩士の説明に耳を傾けていた。

「いや、轆轤というものを使い、引き上げるのじゃ。貴公が言うたように、人力だけではなかなかむずかしいゆえな。引き上げた後は、包丁を用いて、鯨肉を削り取るようにしながら解体するというわけじゃ」

「浜辺で作業をするのですか」

「九州などでは、浜買いと言うて、浜辺で解体した鯨を商人が買い取る由。なれど、紀伊には鯨組がおる。鯨組の者たちが、作業場に運んで解体するのじゃ。さまざまな部位を利用法に従って選り分ける。無駄なものはなにひとつとして出ない。それが鯨に対する礼儀ゆえ」

「それでは、紀伊の漁師が、九州に出向いて指南役を務めることもあるのですか」

探りを入れるような目つきになっていたかもしれない。

「まあ、ないとは言えぬが、あるとも言えぬ」

左馬助は曖昧に答えた。九州に出向くのは、漁師だけではないのではあるまいか。水原家

の者も出向き、薩摩藩や熊本藩といった大藩と密談の場を持っているのではないか。領地の動きがすなわち、江戸の上屋敷の動きとまでは言い切れないが無視できない。

熊野の舟は俊足だ。水軍が海賊の真似事をしている噂もあるとなれば、警戒するなという方が無理な話である。

「過日、貴公が言うた鰐魚（わにざめ）を殺す策じゃがの。御家老にお話ししたところ、すぐに試してみよとの仰せであったわ。人間の大きさに作った人形に、毒をたっぷり詰めて、海に放り投げる。愚かな鰐魚どもは喰らいつくであろう。罠とも知らずに、な」

左馬助は意味ありげに呟いた。愚かな鰐魚とは、紀伊家の江戸家老か。紀伊家の羅針盤と呼ばれる新見大膳になにか仕掛けようとしているのか。

「篠田様にお目通りできませぬか」

数之進は左馬助に申し出た。

「それがし、今までお目にかかる機会に恵まれませなんだ。是非、一度、お話しいたしたく存じます。お許しを得ていただけませぬか」

戸村三之助には会っているが、卯十郎として、目通りを許されたことはない。近くに行って、真偽を確かめたかった。

「ちと待つがよい」

大儀そうに立ちあがり、老藩士は東の桟敷の方に歩いて行った。三之助、いや、実際は卯十郎なのかもしれないが、数之進の中ではどうしても結びつけられないのだ。あくまでも三之助だと思っている男は、目を伏せたまま、東の上桟敷に座っている。顔をあげようとはしなかった。

――もしや、そういうことか？

六人衆の策が浮かんだ。篠田卯十郎は紀伊家の江戸家老同様、水原家にとっても羅針盤の役目をはたしている。当主の忠道と卯十郎の、どちらを狙うかといえば……卯十郎なのではないか。

囮役を買って出たのか、それとも他に思惑があるのか。

「それがしも同道いたそう」

伝次郎が落ち着かない素振りで腰を浮かせた。

「生田殿と一緒に、篠田様にご挨拶いたしたく存ずる。先程も言うたが、ひさかたぶりでござるゆえ」

「貴殿は、それがしとここにおられるのが宜しかろうと存ずる」

一角が伝次郎の肩を叩いて座らせる。

「我が友は、初めてのお目通りでござるが、なに、小林殿がおられるゆえ、案ずることはあ

るまい。よけいな者が付いて行けば、殿や清照院様が何事かと驚かれるやもしれませぬ。じきに幕があがりましょう。おとなしくしているのが宜しかろうと存ずる」

「なれど」

「田中殿に、お伺いいたしたき儀がござる」

数之進は遮るように言った。

「貴公の在所はご領地の新宮と、一角より聞いた憶えがござるが、先程、船乗り込みを見るのは初めてと申されました。はて、おかしなことがあるものよと思うた次第。江戸では船乗り込みは行いませぬが、上方では十一月の顔見世興行の折、毎年、執り行うのが常であるはず。初めて見るなどということがありましょうや」

鋭く突っ込んだが、

「はて、それがし、かような話はした憶えがござらぬ。この屋敷に来たのは初めてと言うた憶えはござるがな。聞き間違いではござらぬか」

伝次郎は平然としらを切る。年は若いが、なかなかどうして、食えぬ輩だ。忠道に前殿の実子ではないと吹きこんだのも得心できる。間者としては有能な男のように見えたが、刺客、あるいは数之進が考える他の役目はどうだろうか。

「さようか」

おとなしく引いた。追及しても答えないのはわかっている。一角の目顔に気づき、東の上桟敷を見ると、左馬助が手招きしていた。

「それがしも」

またもや立ちあがろうとした伝次郎の腕を、友はがっちりと摑んでいる。数之進は立ちあがって、東の上桟敷に向かった。

六

とそのとき、視野の片隅にふと鳥海左門の姿が入った。

数之進は厠に行くふりをして、物陰に隠れる。橋を渡る艶(あで)やかな一行や、海を模した花道の鯨獲りの余興も終盤に近づいている。特に怪しむ者はいないが、目を配りながら目立たない場所に移った。

「此度の縁談話が、新見家から持ちこまれたものなのか、調べてみた。慥(たし)かな筋とまでは言えぬが、どうも水原家より持ちかけた話のようじゃ」

と、左門は囁いた。派手な衣装は脱ぎ捨てて、地味な着物と袴姿になっている。それでも本材木町を訪れた忠道同様、隠しきれない品のよさや威厳が感じられた。

「さようでございましたか」

「篠田卯十郎と対立しているように見せたのは、その方がやりやすいからであろう。床下に隠れていた忍びから、六人衆が卯十郎を悪し様に言っていたと聞き、新見大膳もそれならばと手を結ぶことにしたのやもしれぬ」

「得意の小判も使うたのは間違いありますまい。本日は見合いよりも、下屋敷のお披露目会と言うた方がよいかもしれませぬ」

「すでに新見大膳と女が、この屋敷に入った旨、今し方、知らせを受けた。茶会ではのうて、東の上桟敷が見合いの場になるのやもしれぬ」

「新見様も警戒しているのでございましょう。たった今、小林殿に聞いた話なのですが、この屋敷にはいたるところに抜け道がある由。われらを慮って、教えてくれたのやもしれませぬ」

「抜け道の噂は耳にしていたが、やはり、まことであったか」

左門は、田中伝次郎と同じ言葉を口にした。

「いずれにしても、厄介な話よ。賊もそこから出入りするやもしれぬ。この屋敷に入るのも初めてならば、抜け道も初めて。いっそう気を引き締めねばならぬの」

「はい。水原家の家中や、紀伊家の藩士の様子はいかがでございますか」

「平土間の桝席にいる四人が、やけに殺気立っているのが、気にならなくもない。なれど、

わしが目を光らせておるゆえ、案ずるな」

父と慕う左門の力強い言葉を聞き、数之進はあらたな力がみなぎるのを覚えた。大きく頷き返して、一行のもとへ戻る。

少し時がかかりすぎたかもしれない。左馬助が上桟敷で、亀のように首を伸ばしていた。

「いかがしたのじゃ」

「申し訳ありませぬ。用足しでござります。あがり性でございまして」

「ふん」

鼻を鳴らして、上桟敷を指した。西の上桟敷と違う大きな点は、当主用の上覧席がもうけられていることだろう。忠道と清照院のいる席は、家老の山村増右衛門たちからは見えない造りになっている。清照院付きの侍女や、重臣たちの小姓が数人、桟敷の外に控えていた。

「生田殿」

山村増右衛門たちと、戸村三之助が待っていた。数之進は一礼して、桟敷にあがる。左門の調べではっきりしたのは、水原家の重臣の、肚が据わっているということかもしれない。三之助を含む七人はおそらく死を覚悟しているのではないだろうか。

「篠田様に、これをお渡しいたしたく思い、参りました」

数之進は懐から羅針盤を出した。六人衆の視線を受けて、いやでも緊張してくる。口の中

がからからに乾いていた。

「これは？」

三之助は羅針盤を手に取ったものの、怪訝そうな顔をしている。それが答えだと思ったが、念のために確認した。

「殿が仰せになられたのです」

かつて『ある者』が言うたのじゃ。そちこそが余を導いてくれる羅針盤じゃとな。

「過ぎたお言葉を賜り、恥じ入るばかりでございました次第。それがしは、殿が仰せになられた『ある者』とは、篠田様ではないかと思いまして、これはお返しした方がよかろうと」

「いや、これは生田殿がお持ちになられている方が宜しかろうと存ずる。殿のお考えでござりますゆえ、それがしが口を差し挟む話ではないと存じまする」

三之助は実に巧く侍の仮面を被っていた。もしかしたら、篠田卯十郎も、武士と町人の顔を使い分けていたのかもしれない。

「それでは、この羅針盤はそれがしが頂戴つかまつります」

数之進は答えて、羅針盤を懐に戻した。左馬助や増右衛門たちは、いちおう舞台に目を向けていたが、二人のやりとりに全神経を集中しているのがわかる。痛いほどの『視線』を感じていた。

――この男は、やはり、篠田卯十郎ではない。

まさに羅針盤が答えを教えてくれた。ここからは謀を未然に防ぐために動くのが得策。数之進はあらたな問いかけを発した。

「紀伊家の江戸家老は、この上桟敷においであそばされるのですか。そうであるならば、それがしは邪魔者。早々に退散つかまつります次第」

「迷うている」

不意に三之助は言った。ぴくりと左馬助の背中が動いた。正直者ゆえ、抑えきれなかったに違いない。

「なにを迷うておられるのですか」

「篠田卯十郎として、迷うているのでござる。はたして、突き進むのが一番よい策なのか。わかりかねて……」

「篠田殿」

左馬助が振り向いた。

「そろそろ新見様がおいであそばされるであろう。茶会の前に、芝居を楽しむのもまた一興よ。姫御が喜ばれるのではあるまいか」

手で追いやられて、数之進はいやおうなく東の桟敷から追い出された。すぐに左馬助も出

て来る。数之進を抱えこむようにして、西の桟敷に移動させようとした。

「満足したであろう。そなたは自分の席に戻るがよい。幕開けに間に合うようにと、新見様にはお伝えしたゆえ」

「なれど、殿には、想い人がおられます。見合いはしとうない、余が妻にしたいのは佐都のお方様だけであると仰せになられました。殿のお気持ちはいかがなさるのですか。本日の演目は『新版歌祭文』である由。お染と久松の悲恋にござります」

数之進は懸命に食いさがる。

「ご相談いただきました身としましては、簡単には引きさがれませぬ。辛い悲恋は芝居の中だけで充分にござります。御家老、お応えください。今一度、お考えいただくわけにはいきませぬか」

さまざまな意味をこめていた。まだ間に合う、今なら止められる。新見大膳の暗殺を企んでいるのであれば考え直してほしい。話し合えばいいではないか。左門を仲介役にして、両家の間を取り持つこともできる。

気持ちは伝わっただろうが、左馬助は応えない。

「早う行け」

桟敷の入り口に立ち、動こうとしなかった。少し離れた場所で左門が様子を見ている。そ

れでも数之進は、不安が消えなかった。

「新見大膳様、お越しにござります」

先触れの大声がひびきわたる。橋の上をゆっくり渡っていた祭り行列は、最後の娘が姿を消して、終わりを告げた。海を模した花道の鯨獲りも、鯨を追いかけながら姿が見えなくなる。

芝居小屋に満ちているのは、幕があがる前の緊張感だけではなかった。

――なにか策はないか。

数之進が口を開こうとしたとき、

「余は屋敷に戻る」

忠道が障子を開けて、桟敷から出て来た。

「母上の頼みでも、これだけは受け入れられませぬ。見合いはいたしませぬ。余の妻は佐都だけじゃ。他の女子には会いとうない」

「待ちや」

清照院の制止を振り切る刹那、桟敷にちらりと河合牧太の姿が見えた。数之進と目が合うや、慌てて隠れる。上覧席に同席しているのはすなわち、河合牧太が忠道の兄ということなのだろうか。

「殿、なりませぬ。お待ちくだされ」

左馬助と六人衆のひとりが、忠道の腕を摑もうとした。しかし、邪険に腕を振り払い、階段を降りて行った。控えていた数人の小姓があとを追いかける。場内が修羅場になるかもしれない今、抜け道を使い、屋敷に戻ることこそが、助かる道かもしれなかった。

「御家老。いかがいたしまするか」

老藩士はやけに落ち着いていた。すべてが真実とはいかないだろうが、ある程度、左馬助は真実を語っている。増右衛門や他の重臣たちも通路に出て来た。

「殿は急な病にて、ご退出なされた。見合いは仕切り直しじゃ。後日、あらためてとお話しするしかあるまい」

「新見様のお越しにござります」

先触れの家臣が、階段をあがって来た。その後ろに新見大膳の一行が続いている。愛らしい姫は、山茶花の紋様の振り袖で清楚に装っていた。十五、六だろうか。若い父親譲りの、美貌をそなえている。

「お待ちいたしており申した」

家老の増右衛門が通路で出迎えた。

「殿と清照院様も、今か今かとおいでを……」

「新見大膳、覚悟！」

突然、ひとりの小姓が短刀を振りあげた。六人衆のだれかに付いている小姓だろう。通路に控えていた近習が、いきなり牙を剝いたのである。

「乱心か」

増右衛門が大膳を庇うように立ち塞がった。数之進は混乱の渦に落ちる。六人衆の狙いは、大膳の暗殺ではなかったのか。

「不届き者めが、控えよ」

叫びつつ、増右衛門は小姓の短刀を扇子で叩き落とした。これで終わるかと思ったが、いつの間にか上桟敷に、四人の男たちが現れている。左門が言っていた殺気立った四人かもしれない。

隠し持っていたのだろうか。

全員が、入り口で預けたはずの刀を握りしめていた。

第七章　羅針盤

一

「お逃げください」
数之進は増右衛門の隣に立とうとしたが、左馬助に追いやられた。六人衆は三人しか見当たらない。が、他の三人のことなど、気にしている余裕はなかった。
「お命、頂戴いたす」
「狙うは新見大膳ひとり」
四人、いや、小姓も含めた五人の刺客は、階段を塞ぐようにして、じりじりと迫って来る。大膳は娘の肩を抱くと、場内に架けられた橋の方に逃げた。向こう側に行けば、階段を使えると思ったに違いない。斬りつけて来たひとりを、増右衛門が防いだ隙に、数之進も大膳を追った。

「数之進」

一角が橋の向こうで声を張りあげる。

「それがしは、両目付鳥海左門景近様が配下、早乙女一角でござる。後ろにいる者も幕府御算用者。お守りいたすゆえ、ご案じめさるな」

その言葉が終わらないうちに、友の背後に別の刺客が襲いかかる。一角は脇差を抜き、刀を弾き返した。数之進と大膳父娘は、橋の上に取り残される。

――田中伝次郎。

伝次郎が六人衆のうちの三人と、階段を降りて行くのが見えた。重臣の守りを受ける理由はひとつしかない。が、これまた考えている暇はなかった。平土間の桝席でも小競り合いが始まっている。水原家と紀伊家の者たちが、脇差を抜いて、刃を交えていた。

「今のうちに」

ふたたび一角が呼んだ。左門の配下が駆けつけ、刺客と化した水原家の者と対峙している。左門はと見れば、増右衛門たちに手を貸していた。御算用者の口上を述べたい場面だが、まずは逃げるのが先だろう。

「それがしのあとにお続きください」

ついさっきまで華やかな祭り行列が渡っていた橋を急いで渡る。西の桟敷に降りようとし

たが、あらたな刺客部隊が一角と配下に刃を向けた。数之進たちは橋の手前でふたたび立ち往生する。

これは予定どおりなのか。それとも若党が先走ったがゆえの暗殺騒ぎか。六人衆の存念やいかに。

脇差を構えたまま、数之進は動けない。

「姫だけでも逃がしてやってはもらえぬか」

大膳が背後で父親らしい言葉を発した。

「わしはここに残る。残って、そちたちの話を聞こうではないか」

流石だと思った。

――紀伊家の羅針盤と言われるだけのことはある。

じりっと数之進は前に出る。

「退け。それがしは、両目付鳥海左門様が配下、生田数之進。貴公らは、なにゆえ、かような狼藉を働くのか」

懐から手札を出して掲げたが、返ってきたのは激しい怒りだった。

「先に手を出したのは、紀伊家よ」

「これは仇討ちじゃ」

「篠田様を闇討ちにしおって」
水原家の下士は、燃えるような目で大膳を睨みつけている。間違いなく水原家の羅針盤だったであろう卯十郎。彼の者を仕留めれば、水原家は手中に陥ちるとでも思ったのだろうか。あまりにも愚かな考えだった。
「ゆえに、われらは新見大膳を討つ」
身構えたひとりを、数之進はしっかと見据えた。
「これは仇討ちに非ず。騙し討ちなり」
「きさま」
動こうとしたが、その前に一角が威嚇の一撃を叩きつける。橋を背にした友の左右を、配下が固めた。
「姫だけでも外に」
大膳は諦めない。
「頼む。まだ十五なのじゃ」
この懇願を断れるのは、地獄の鬼ぐらいだろう。下士たちも折れた。
「よかろう」
許しを得て、数之進は姫の手を取る。小さな白い手が震えていた。それでも父が案じられ

たのか、
「父上」
一瞬、足を止めて、振り向いた。
「案ずるでない。父もすぐに参るゆえ」
「はい」
気丈に答えたが、思うように歩けない。数之進は抱えるようにして、配下のひとりに姫を託した。
「道を開けてくれ。二人を通してやってくれ」
二人を守るように、一角が付いていた。渋々ではあったが、下士たちも侍。左右に動いて少しだけ階段に続く道を空けた。下士たちがじっと見つめている、離れた場所にいた紀伊家の藩士が、少しずつ近づいて来る。
一触即発の中、
「なぜ、行かぬ」
大膳が数之進の耳もとに囁いた。姫を守る役目を買って出れば、間違いなく助かるではないか。そなたも助けてやろうとしたのに、なにゆえ、この修羅場に残るのか。言葉にされない部分が胸に沁みた。

「それがしは、幕府御算用者。騒ぎをしずめるのが役目にござります」
きっぱりと言った。已に言い聞かせるように続ける。
「この騒ぎ、両目付様にお預けいただきたく存じます。刃傷沙汰はご法度。退いていただきたく思います」
「できぬ」
ひとりのそれが合図になった。姫と配下が階段を降り始めるや、水原家の下士がいっせいに襲いかかって来る。一角が踏みこんで逆袈裟斬りを放った。のけぞったひとりに気を留める者はいない。続けざまに突き出される刃を、友はかいくぐるようにして避ける。舞いを思わせるような動きだった。
「生田殿、新見殿」
東の上桟敷から声がかかる。
「早うこちらへ」
左馬助が手招きしていた。左門たちの活躍がものを言ったのか、桟敷や階段を塞いでいた下士は、いなくなっている。清照院や河合牧太、そして、戸村三之助の姿も見えなくなっていた。
「新見様、あちらへ」

数之進は大膳と場所を入れ替えて、先に立った。左馬助と山村増右衛門が残っている。助けるふりをして、その実、彼の者たちこそが刺客になるのではないか。脇差の柄を握りしめる手に力がこもった。

「山村殿」

大膳が、東の上桟敷に降りるや、呼びかけた。

「篠田殿のことに関しましては、当家は与り知らぬことでござる。襲撃に関わった者たちは逃走しており申すが、すでに討手を遣わしており申す。捕らえ次第、お知らせいたす所存にござる」

どこかで聞いたような台詞だった。御算用者の暗殺の、見届け役と思しき紀伊家の留守居役も似たような言葉を言っていたのではなかったか。数之進は不満を覚えたが、上級藩士の間には通じるものがあったのかもしれない。

「お心遣い、いたみいる。此度の騒ぎは、それがしの不徳の致すところ。若党を抑えきれなかったのは、無念のきわみに存ずる」

決まりきった返答は、背後であがった大声に掻き消される。橋が壊れて、何人かが平土間に落下していた。数之進は慌てて桟敷の手すりから身を乗り出したが、流石は一角。いち早く、西の上桟敷に戻っている。

目が合った瞬間、

「後ろじゃ」

友が叫んだ。振り向きざま、数之進は脇差を突き出している。ぐうっと呻き声をあげたのは、大膳付きの小姓だった。左門の配下がすぐに気づき、襲いかかった小姓の腕を摑む。ぐっと身体を引いたあとに残ったのは、血まみれの脇差だった。

刃から、ぽたぽたと血が垂れている。

「は、早う外へ」

吐き気を覚えながらも、役目を遂行しようと努めた。場内では両家の若党が入り乱れている。増右衛門と左馬助が、数之進と大膳の盾となって階段に導いた。場内のいたるところに、血溜まりができている。なるべく見ないようにして、数之進は階段を降り始めた。

「ゆっくりでよい。慌てるな」

階段の下に、左門が待っていた。思わず気がゆるみかけたが集中する。震える足を叱りつけつつ、大膳とともに階段を降りた。上役はすでに自分の刀を腰に携え、手には数之進と一角の刀を握りしめている。

「数之進は、新見殿をお守りするのじゃ」

と、刀を手渡した。

「抜け道より外に逃げるのが宜しかろうと存ずる」
左馬助が言い、階段の後ろ側にもぐりこむ。床板を何枚か外すと、暗渠のような穴が開いた。薄暗くてよく見えないが、梯子らしきものが掛けられている。数之進は刀を腰に差して、告げた。
「それがしが先兵役を務めます」
「一角が来るまで待て」
左門は西の桟敷席を見やっている。上桟敷にいた一角は、階段を降りるのが面倒くさくなったのか、ひらりと平土間に飛び降りた。敵味方入り乱れての戦いは、もはや、だれが敵なのか味方なのかよくわからない。近くにいた若党が、一角に向かって刀を振り降ろした。が、ひょいと軽くかわして、こちらに走って来る。
「遅うなり申した」
答えながら、左門に渡された自分の刀を腰に携えた。東の階段下には、上役と数人の配下が固まっている。抜け道に入る者をここで防がなければならない。
「わしはここを守る」
左門は言った。
「行け」

「は」

梯子を降りようとした数之進を、一角が鋭く制した。

「おれが先兵役じゃ。おまえは鳥目ゆえ、殿(しんがり)を務めるがよい」

奇妙な気配を察していたのかもしれない。友が暗渠のような穴を覗きこんだとたん、刃が伸びた。

二

「う」

一角はとっさにさがる。抜け道に続く穴から、あらたな賊が飛び出して来た。頭巾を被った黒ずくめの刺客は、忍び刀のような短い刀を握りしめている。穴から飛び跳ねるようにして、六人もの男が現れた。

「われらを狙う刺客か」

友の問いかけに、むろん答えは返らない。無言で男たちは襲いかかって来る。狭い階段下では、思うように動けない。いやおうなく数之進は、場外に押し出されていた。外には初冬の陽射しがあふれている。目が眩(くら)みそうだったが、刺客は目にも止まらぬ速さで刀を操っていた。受けるのが精一杯で反撃できない。

「数之進」

一角が男の背後から真っ向斬りをお見舞いする。卑怯だのなんだのと言っていられない。殺らなければ、殺られる。これは戦なのだ。

――鳥海様。

目の端に左門が鼠木戸から飛び出して来るのが見えた。積物がくずれ落ちて、道に散らばる。上役には二人の刺客が張りついていた。短い刀が蛇のような動きで急所を狙っている。加勢したいのだが、思うように動けない。数之進と一角の相手はひとりなのに、苦戦を強いられていた。

「しゃっ」

男の口から音のような声が洩れる度、刀が鋭く繰り出される。それは数之進の喉を狙っていた。一角が背後から斬りかかる、男は振り向きざま弾き返した。

――今だ。

数之進は気合いをこめて、刀を背中に突き立てた。つもりだったのだが、男の姿は消えている。危うく一角と鉢合わせしかけて、動きを止めた。男はとっさに屈みこみ、地面を転がって逃げたに違いない。少し離れた場所から躍りかかって来た。

「避けろ」

一角に押されて、数之進は右に逃げる。着地した男の刀が地面を這うように伸びる。まさに蛇が足に嚙みつくような動きだった。足を切られかけたが、間一髪、飛びさがって、避ける。

「きえぇっ」

一角が声を張りあげた。自分に敵の気を引きつけるためだろう。振り向いた男に向かって刀を振り降ろした。いや、振り降ろすと見せかけて、水平に薙ぎ払ったのかもしれない。速すぎて数之進の目にはとらえられなかったが、男はのけぞって、逆とんぼを切る。が、後ろに一回転したところで、地面に斃れこんだ。喉から鮮血があふれ出している。

「鳥海様」

数之進は加勢しようとしたが、

「わしにかまうでない、行け。新見殿をお守りするのじゃ」

左門は命じた。二人の配下と背中合わせになって、男たちの攻撃を防いでいる。先に立った一角とともに、薄暗い場内の一階に戻る。忍びらしき賊は六人いたはずだが、残りの三人は見当たらない。左馬助と増右衛門、そして、新見大膳も場内にはいないようだった。

「抜け道か」

数之進はごくりと唾を呑む。真っ暗な穴は、地獄に続く道のよう。一角が慎重に梯子を降

り始めた。

「だれもおらぬ。大丈夫じゃ」

その声を聞いて、数之進も梯子を降りて行った。外で眩い陽射しを受けていたため、目が馴れるのに多少、時がかかった。何度も目をしばたたかせる。冷たい空気と湿気が、身体を押し包んでいた。

「懸け行灯が」

目が馴れたことによって、ようやく抜け道の様子があきらかになった。高さは約一間（百八十センチ）、幅は一間半（二百七十センチ）ほどだろうか。床は土のままだが、天井も壁も頑丈そうな板で覆われている。天井部には太い梁らしき造りも確認できた。

くずれぬよう、まめやかに手入れをしているに違いない。古い木を新しい木で補修した跡も見て取れた。

「新見様たちは、どちらに行かれたのであろう」

数之進は首をめぐらせた。前と後ろには、薄暗い道が続くのみ。懸け行灯が消えているのか、後ろの方はやけに暗く感じられた。

「血の臭いじゃ」

一角がくんくんと鼻をうごめかしている。

「人の気配はあるか」
「ある」
「では、気配のある方に進もう。わたしは後ろを守るゆえ、おぬしは前を頼む」
背中合わせになったが、ずっと後ろ歩きをしなければならない。不自由ではあるものの、進むしかなかった。ところどころに梯子が立て掛けられている。羽目板が空いている箇所もあれば、まだ塞がれたままの箇所もあった。
「待て」
一角が立ち止まる。
「どうした？」
「人が倒れておるのじゃ。おまえはそのまま動くでない。様子を見て来る」
動くなと言われても、心細くて振り向いていた。一角は屈みこんでいたが、すでに息がなかったのか。道の端に引きずって行った。
「先刻の忍びらしき男だ。胸と腹を刺されていたわ。だれが仕留めたのかはわからぬが、遣い手であるのは間違いない」
ふたたび背中合わせの道行きが始まる。
「新見様たちは、どこから出たのだろうな。それともまだこの抜け道のどこかにおられるの

か」

「おれに訊かれてもわからぬ。なれど、いつまでも穴蔵にはおるまい。小林殿か御家老は、なにか言うておらなんだか」

「いや」

否定しかけて、「あ！」と思った。

「神田川だ、一角。柳原土手の話をしたとき、小林殿は、思いもかけず強い口調で行くのを止めた」

「神田川の柳原土手か。そこにいるのかどうかはわからぬが、とりあえず、行ってみるしかあるまい。江戸名所図絵でいくと、日本橋の北か」

もう一度、足を止めた。数之進は震えあがる。

「また仏か」

「いや、道が三つに分かれておる。さあて、どの道を行けば、柳原土手に出るものやら、と、閃いた」

ぱんと手を叩いた。

「羅針盤があるではないか」

「あ」

遅ればせながら数之進も思い出した。懐から羅針盤を出して、方角を確かめる。
「北はこの道だな」
三つに分かれた道の、一番、右側を指した。
「よし」
一角が歩き出したとき、頭上から黒い人影が舞い降りた。どこかの建物に通じる穴から、忍び装束の男が現れたのである。数之進は来た道を戻ろうとしたが、他の穴からもうひとりが降り立った。
「やはり、狙いはわれらか」
羅針盤を懐に戻して、数之進は刀の鯉口を切る。
刺客は音もなく忍び寄って来た。

三

「くっ」
数之進は、喉元に伸びた刀を受け止めて、弾き返した。間髪を入れず、男は刀で切りつける。斜め十字を描くように、右、左と繰り出した。背中合わせになっているため、動くことができない。一対一ではあるが、数之進とは力量の差がありすぎる。いつまで防いでいられ

るか。

苦戦を感じ取ったのだろう。

「はぁっ」

一角が攻めに出た。深く踏みこみ、相手の懐に入りこむ。男が刀を突き出すよりも、一角の方が速かった。柄までめり込んだのではないかというほどに、刀が深々と男の腹をつらぬいていた。

「代われ」

友の言葉に応えた。くるりと半回転して、位置を入れ換える。数之進はすぐに振り向いて、一角の援護にあたる。しかし、動きが速すぎて手を出すどころではない。刀を握りしめたまま、見守るしかなかった。

激しい動きが、一瞬、止まる。

二人は同時に飛びさがっていた。一角は青眼の構えに戻して、次第に剣先をあげていった。相手は右手に刀を握りしめているものの、だらりと両手をさげている。どこから来るのかわからない構えだった。

不意に男の右手が動いた。と思った瞬間、左に持ち換えている。次に右、そして、左と手妻師のような動きを見せる。数之進は思わず前に出ていた。男の気が一瞬、逸れる。友はそ

の機会をのがさない。

「やぁっ」

気合いもろとも真っ向斬りを放った。ずんっと鈍い音が生じた。

「……」

男の脳天から血飛沫が噴きあがる。一角の刀が口のあたりまで食いこんでいた。天井部の板が、真っ赤に染まっている。数之進は茫然と立ちつくしていた。友も刀を食いこませたまま、やや腰を沈めた体勢を保っている。頭に食いこむ刀が弊れるのを止めていたのか、すでに絶命しているはずの男も動かない。

「はっ」

小さく息を吐いて、一角が刀を上にあげた。そのとたん、男が崩れ落ち、ゆっくり後ろに倒れていく。友は血を払うように刀を振ったが、まだ鞘に収めない。あまりにも凄まじい光景を見て、数之進は目眩を覚えた。

一歩、後ろによろめいたとき、

「うっ」

だれかに左足を摑まれる。はじめに一角が倒した男だった。死んだとばかり思っていたものを、まだ息があったのである。どろんと濁った目が、数之進を見据えていた。死人が甦っ

たような衝撃を受けて絶叫する。
「う、うわぁっ」
「しぶといやつめが」
一角がとどめの一撃を背中に食いこませた。今度こそ、男は絶命したはずだが、男の右手は数之進の左足首を握りしめたままだった。腰がぬけるようにへたりこむ。
「い、一角、足、足が離れぬ」
「落ち着け」
友は冷静に男の右手を拳で打った。ぐきっという、骨の折れるいやな音がした後、数之進の左足はようやく自由を取り戻した。が、座りこんだまま立てない。一角に支えられながら、道が三つに分かれる手前のところまで戻った。
「すまぬ」
ふたたび座りこんでいた。震えが止まらない。友が刀を鞘に収めてくれた。
「引き返そう、数之進」
一角は、屈みこんで目を合わせる。
「御家老たちは、われらを敵に売り渡した。戸村三之助も、われらを誘き出すために篠田卯十郎の名を出したのであろう。六人衆が偽の神田川近辺にいるかどうかはわからぬが、あと

は鳥海様におまかせするのがよいのではないか」

「それはできぬ。篠田殿の仇討ちは、私（わたくし）の怨みだ。下手人を差し出せと迫るのはよいが、新見様を討つのは筋違い。鳥海様か大目付様に託すべきではないか。民の規範となるべき侍が、私のことで動いてはならぬ。わたしは御算用者として、六人衆を止めねばならぬ。それに」

と、続けた。

「小林殿は、わざと抜け道のことを教えたように思えてならぬ。止めてほしいと、心の中では思うておられるのではあるまいか」

「そうか。よし、わかった。覚悟はできているな」

「え？」

「だれか来る」

一角は左側の道を目で指した。

「ひとり、二人、三人か。おまえは隠れていろ」

「いや、わたしもここにいる」

友の後ろに付き、鯉口を切る。少し経ってから幾つかの足音をとらえた。たっ、たっ、たっという、規則正しいひびきが聞こえている。

が、突然、それがやんだ。

——気づかれたか。

数之進は己の失態だと思った。一角のように呼吸音を消す術を身につけていない。あるいは、血の臭いを察したのか。いずれにしても遣い手のように思えた。数之進であれば打って出るか悩む場面だが、一角は考えるより先に動く男。

止める暇もなく、飛び出して行った。

「一角」

追いかけようとした数之進の耳に、刀の激突音がひびいた。刃越しに睨み合っているのか、そのあとはなにも聞こえない。数之進はおそるおそる左側の道に出た。

「杉崎殿？」

一瞬、自分の目が信じられなかった。杉崎春馬と雨宮作十郎、そして、下田竜介の三人、今は『柳生三人組』になってしまった者たちが、笑顔を向けていた。

「おれも驚いたわ。刃を交えた相手が、杉崎殿とわかったときにはな」

笑って、一角は刀を鞘に収める。春馬もそれに倣った。

「われらは、もしや、と思うていた。生田殿たちの動きは、村上様より伺うていたゆえな。どこかで出会えるのではないかと、気にかけながら進んでいた次第よ」

「村上様もおいでなのか」
数之進は訊いた。三人が加わったことにより、心細さが薄れていた。
「われらは偽の八丁堀同心の屋敷から、この抜け道に降りたのだが、村上様は芝居小屋に向かわれた」
「今までどこに隠れていたのじゃ。三紗殿が死ぬほど案じていたぞ」
今度は一角が訊ねる。作十郎と竜介は、他の道を確かめつつ、怪しい者が来ないか警戒していた。頼もしいことこのうえない。
「尾張に行っていたのだが、隠れていたわけではない。三紗殿へは、江戸を発つ前に文を出した。家を訪ねたとき、留守だったのでな。ちょうど出会うた村上様に託した次第よ」
「なに？」
一角は怪訝そうに眉を寄せた。ははあ、と、数之進は得心している。村上杢兵衛の急な腰痛や、熱海の御汲湯を〈達磨湯〉に届けさせた心配りの理由を察していた。春馬から預かった文を、杢兵衛は三紗に渡さなかったのだろう。
これを渡さなければ、三紗殿は杉崎春馬に捨てられたと思い、諦めるやもしれぬ。
おそらく、そう考えたのではないだろうか。還暦を過ぎてなお消えぬ嫉妬の炎、だが、三紗の落胆ぶりを人づてに聞き、後悔することしきりだったかもしれない。数之進と一角の表

情を感じたのか、
「どうかしたのか」
春馬が訊き返した。真実を告げれば、李兵衛の顔がつぶれるは必至。数之進は小さく首を振る。
「いや、なんでもない。して、杉崎殿は、なにゆえ尾張においでになられたのか」
「御算用者を抹殺せよという命がくだったからだ。尾張、紀伊、水戸の下級藩士に密かに呼びかけられたのだが、尾張柳生家には手を出してほしゅうないと思うた次第よ。おぬしたちは命の恩人。作十郎や竜介も口添えしてくれたお陰で、どうにか尾張柳生家は止めることができたのだが」
しみじみ春馬は二人を見つめた。
「危ないところだったようだな」
よけいな言葉は必要ない。返り血を浴びた壮絶な姿に、わずかな道のりの危険度が表れている。
「おぬしたちが来てくれたお陰で千人力だ。力添えしてもらえるだろうか」
数之進の頼みに、春馬は即座に答えた。
「言われるまでもない。そのつもりでここに来た」

「かたじけない。さっそくだが、ひとつ頼みがある。最後の戦場になるのは、おそらく神田の柳原土手。われらはそこに向かったと、鳥海様に知らせてもらえぬだろうか」
「その役目、それがしが承る」
名乗りをあげたのは雨宮作十郎だった。数之進は不安を覚えずにいられない。
「なれど、ひとりでは危ない」
「ご案じめさるな。五人の中では、一番の遣い手でござるゆえ」
春馬が笑みを浮かべる。その答えには、今も『柳生五人組』なのだという、強い想いが表れていた。みな心に少なからぬ苦しみを抱えている。
「では、頼む」
「承知した」
踵を返した作十郎を見送りながら、数之進は告げた。
「行こう」
進むのは血に染まった道か、それとも……。
若者たちは、いっせいに走り出した。

四

偽の神田柳原土手は、緊迫した空気に覆われている。

小林左馬助と新見大膳は、刀を構えて対峙していた。周囲には山村増右衛門をはじめとする六人衆の面々が、戦いを見守っている。

老藩士は足を送り始めた。

大膳は動かない。左馬助の動きを目で追いながら、少しずつ右にまわっている。ゆったりと構えているが、踏み込む隙がない。左馬助は隙を作ることで、この場の乱れを誘うしかなかった。

間合いをはかりながら、左馬助の肱が肩口まであがったときである。はたして、大膳は猛然と斬りこんで来た。体重をのせた一撃は、誤りなく左馬助めがけて打ちこまれる。

間一髪、左馬助はそれを横に避けて外した。大膳の伸びきった体勢に横から鋭く襲いかかる。肩口に刀が振り降ろされようとした刹那、

「それまで！」

数之進は叫んだ。しかし、左馬助の刀は止まらない。一角が走り出て、老藩士の刀を自分の刀で受け止める。春馬と下田竜介が、増右衛門たちの制止役となった。動かぬよう、目を

光らせている。

「小林殿に一本でござる」

数之進は、あらためて御算用者の手札を掲げた。

「今の一騎打ちにて、此度の騒動は終わりとされるのが宜しかろうと存ずる。無意味な争いを篠田殿が望んでおられましょうや」

「なぜじゃ、なぜ、仇を討たせてはくれぬ。篠田殿はこの老いぼれを助けようとして、死んだというに」

左馬助は悔しげに刀を地面に突きたてる。

「ここよ。江戸の、さよう、本物の柳原土手で賊に襲われたのじゃ。わしは逃げるとき、転んでしもうてな。危うく斬り殺されかけた。篠田殿はわしを庇うて……死んだわ。鯨商人の専横ぶりに異を唱えるため、国から江戸に出て来たこのわしをの」

老藩士は卯十郎のやり方に批判的だったに違いない。反対派の旗を掲げ、古老の代表として、得々と意見を申し述べた。

「怨まれても仕方のない状況よ」

にもかかわらず卯十郎は、我が身を犠牲にして左馬助を助けた。反対派だった老藩士が、深く感じ入ったであろうことは、想像するに難くない。水原家の羅針盤が失われたその日、

六人衆は報復を誓ったのかもしれなかった。

「なぜ？」

と老藩士は訊いた。なぜ、助けたのか。自分を放り出して逃げれば、助かったやもしれぬものを。

「理由などございませぬ」

数之進は応えた。

「そうせずにはいられなかったのです」

田辺新九郎に付け狙われる身なればこそ、卯十郎の気持ちがわかった。同じ立場になったときには、数之進も新九郎を助けるだろう。

「よう似ておる。話をしているうちに感じた。貴公が似ていることにの。篠田殿の倅（せがれ）のように思えたわ」

左馬助の呟きを、遮るような大声がひびいた。

「この騒動、それがしが仲裁役を務め申す」

背後に鳥海左門が現れた。水原土佐守忠道と田中伝次郎、さらに河合牧太を引き連れている。両目付の登場を見て、六人衆と大膳はその場に膝を突いた。

「鳥海様」

数之進と一角も跪き、上役と杢兵衛を迎えた。春馬たちも右に倣えで、その場に畏まる。偽の柳原土手の空気が引き締まった。

「小林左馬助」

左門は呼びかけた。

「はは っ」

老藩士の答えを聞き、忠道を含む三人も畏まる。

「此度の騒動は、私の怨みによるものである由。この儀、相違ないか」

「ござりませぬ」

「両目付様。われらも異存ござりませぬ。仇討ちを企てたのは、われら六人。評定所にて、お裁きいただきたく存じまする」

増右衛門が膝でにじり出た。が、左門は目を向けない。

「貴殿ひとりのお考えか」

左馬助に問いかけた。

「いかにも、それがし、ひとりの企みにござります。仇討ちの届けを出すべきであるのに、定めに従わず、紀伊家の江戸家老、新見大膳様を討つべく奸計を巡らせ申した。相違ござりませぬ」

「さようか」

「両目付様」

なおも訴えようとする増右衛門を、左馬助が手で制した。数之進に抜け道のことを教えたのは、他の重臣を助けてほしいという懇願にほかならない。

左門は応えた。

「これにて一件落着。小林左馬助は評定所において、あらためて詮議する。ご同道、願おうか」

「ははっ」

老藩士は頭を垂れたまま動かない。見つめているのは、あの日の光景だろうか。卯十郎に対する後悔の念だろうか。

江戸の中の江戸には、真冬のような、冷たい風が吹いていた。

五

「遡(さかのぼ)ること、二十五年前でござる」

家老の山村増右衛門は言った。

「何年かに一度のお国入りの際、前殿は清照院様――袖子(そでこ)様に目を留められ申した。それが

はじまりでござった」

当時、篠田卯十郎――松本富十郎と袖子は、すでに所帯を持っていた。水原家の場合、ほとんどは江戸詰の藩士だが、国許の新宮にも小林左馬助のような国詰の者がいる。卯十郎も勘定方に務めていた。

数之進が左門に頼んだ『もうひとつの調べ』とは、篠田卯十郎と清照院の関わりを確かめてほしいというものだったのである。名を変えていた卯十郎の調べは、思いのほか手間取ってしまい、真実があきらかにされるのが遅れた。

「奥向きの御用を袖子様に手伝うてもろうたのが騒動の発端。知らせを受けたわれらは、切腹覚悟で前殿に意見し申した。なれど」

一度、火が点いた恋心は止められない。仲睦まじく暮らしていた卯十郎と袖子は、前殿の命によって引き裂かれた。

〝承伏いたしかねまする〟と、首を縦に振らない卯十郎、いや、富十郎を、説得したのがこのわしじゃ〟

小林左馬助は、評定所でそう告げている。国家老だった左馬助は、古老らしい言葉で掻き口説いた。

〝殿の望みをかなえるのが、侍の務め。命がくだれば従わねばならぬ〟

侍の道を説いたつもりだったが、なにもわかっていなかったと、言い添えた。

〝長年、連れ添った古女房を亡くしたときにの。富十郎の気持ちがわかったのよ。わしは富十郎に、真の侍の道を、教えてもろうたのじゃ〟

――篠田殿。

どれほどの苦しみであったろう。身分違いの恋を経験している数之進なればこそ、卯十郎の苦悩が理解できる。五瀬姫と暮らしたわけではない。相愛だったかもしれないが、祝言をあげたわけでもない。それでも三紗に『生きている死人』と言われるほど、数之進は落ちこんだ。ましてや夫婦だったとなれば……。

「篠田殿のすごさは、それからでござる」

増右衛門の声に、軽い興奮が加わった。

手当てと称して支払われた二百両をもとに、卯十郎は大坂で商いを始めた。金貸しをやりながら、寝る間も惜しんで働いた。小間物などを売り歩く小商い、呉服や薬の行商と、金になることならなんでもやった。そして、少し金が貯まると小店を構えた。

小さな見世はすぐに中店となり、大店となる。本両替商の看板を手に入れるのに、十年ほどかかったが、早いか遅いかは、それぞれの判断にまかせるしかないだろう。

「前殿も篠田殿のことは、気に掛けておられたのでござろう。後年、酷いことをしてしもう

た、済まぬと、何度も清照院様に詫びておられた由。それが嵩じたのやもしれませぬ」

前土佐守は、突然、下屋敷の改修を始めた。辛い思いを味わわせた清照院に、極楽浄土を与えてやりたいとでも思ったのか。炭問屋と揶揄されるほどだった水原家の身代が、それを機に傾き始める。

「江戸の中に江戸を造ると、仰せになられたのでござる」

まずは贅をこらした母屋、続いて、二の丸、三の丸。屋敷を取り囲む石垣の外には、江戸を模した商店、さらにその外には、どこまでも続く緑豊かな田畑。偽の江戸を造るのは、口で言うほど簡単ではなかった。

「すぐに立ちゆかなくなり申した。みるみる借財がふくらみ、大坂の商人や江戸の御用商人から、二万両にも及ぶ借財をするはめになったのでござる。さあて、困った。途方もない借財は増えるばかり。われらは頭を抱え申した。そんなとき、篠田殿が訪ねて来られたのでござる」

てまえにおまかせいただけますれば、五年で借財を片づけてご覧にいれましょう。

「十年前のことでござる。なにを馬鹿な、と思いましてな」

そのときのことを思い出したのか、苦笑いしながら、少しくだけた口調になる。

「篠田殿はおそらく意趣返しを企んでいるに相違ない。かつての怨みを晴らさんと、手を貸

すふりをして、水原家を改易に追いこむ。それが狙いであろうと。われらの意見は一致していたのでござるが」

我が心は石に匪ず。
卯十郎は胸を張って告げた。

我が心は石に匪ねば
転ばす可からざる也
我が心は席に匪ねば
巻く可べからざる也

私の心は石ではないから、転がして変えさせることはできない。私の心は筵ではないから、くるくると丸めこむことはできない。石は本来、堅固さを連想させるが、この詩句は通念を逆手にとり、敢えて否定形で不退転の決意を表明している。

それを聞いたとき、増右衛門は察したのだ。

ああ、この男は袖子様のために生きてきたのだ、と。想いは変わっていない。卯十郎が助

けるのは土佐守ではない。今もともに生きている妻を助けるのだ、と。

——そうだ。それを支えにして、生きてきた。

数之進には卯十郎の想いが、手に取るようにわかった。かつての妻が艱難辛苦に遭ったときには、必ずや馳せ参じて助けよう。そのためには小判が要る。だれにも負けない商人にならなければならぬ。

同じ想いだった。同じ苦しみを、数之進と卯十郎は味わっていた。

「それでも」

増右衛門は続ける。

「われらは反対でござった。すでに大坂では鯨商人と呼ばれていた篠田殿の、底知れない財力を感じていたからでござる。なれど、前殿がいとも簡単に『やらせてみよ』と仰せになられましてな」

為政者はいつも気まぐれだ。家臣が振りまわされることも少なくない。だれもが卯十郎に対して疑惑を抱く中、当人は淡々と借財の処理をし始めた。それと同時に、あらたな商いにも着手する。

「泉府方のことでお訊ねいたしたく思います」

数之進は、鋭く切りこんだ。

「炭問屋や遊女屋といった江戸各地に散らばる篠田殿の見世は、水原家の泉府方の出店なのではないかと存じます。江戸市中にいる岡っ引きに金貸しをやらせて、彼の者たちが集めた金を出店で纏める。それが泉府方のからくりではないかと感じました次第。いかがでござりましょうや」

厳しい追及に、当初、増右衛門はとぼけた。

「はて、泉府方の出店であるという証はござりまするか」

善人に見えるが、かなりしたたかな一面を持っていた。あるいは左馬助の犠牲を無駄にしたくないという気持ちもあったかもしれない。泉府方には今までどおりの、働きをしてもらいたいと考えたのかもしれないが、数之進は追及の手をゆるめなかった。

「それがしが調べようとした炭問屋に、勘定方の者が三人、おりました。確か泉府方に奉公していたように憶えております。忠道様を匿っていたのも、そのお三方ではないかと存じます次第」

「まさか」

目を見ひらいた増右衛門に、横から一角が言い添えた。

「さよう。我が友は、百人いる勘定方の顔を、すべて憶えたのでござる。小林殿よりお聞き及びになりませなんだか。新参者ゆえ、毎朝、挨拶云々と言うたあれでござるよ」

「なんと、百人の顔を」

増右衛門は、しばし絶句する。これ以上、あがくのは無理と観念したのはあきらか。茶で喉を潤した後、口を開いた。

「泉府方につきましては、早々に始末をつけまする。江戸市中の金貸しも、即刻、店仕舞いさせまする。して、他にはなにを？」

「本物の忠道様は、もしや、田中伝次郎殿ではないかと思いました次第。そして、忠道様の役目を担っていたのが、表には出せない兄君、忠信様やもしれぬ、と」

「なにゆえ、かように思われたのでござろうか」

「ひとつ、田中伝次郎殿は、国許の新宮から来たと言うていたのに、訛りがまったくなかった。ひとつ、友が履いていた継ぎ当てだらけの足袋を珍しがっておられた。ひとつ、船乗り込みを初めて見たと言うておられた。ひとつ、芝居小屋から逃げるとき、六人衆のうちの三人が、護衛役となっていた。といった事柄からでござる」

「いや、これは参った」

増右衛門は軽く額を叩いた。

「仰せのとおりでござる。忠道様の身代わりとなったのが、兄君の忠信様。そして、田中伝次郎こそが、忠道様でござる」

「歌舞伎役者も顔負けの、見事な芝居でござった」
苦笑いして、続けた。
「腑に落ちぬのは、河合牧太殿。あのお方は、なにゆえ、清照院様とともに東の上桟敷におられたのですか。なにゆえ、偽の柳原河岸に姿を見せられたのでございますか」
「河合牧太は……忠信様の兄君でござる」
「え」
今度は数之進が絶句する。つまり、当主の忠道は三兄弟の末っ子。松本富十郎夫婦には、牧太という男児がすでに生まれていたのだ。そのうえ卯十郎の二男――忠信を身籠っていながら、袖子は前殿の愛妾にならざるをえなかった。
「まことに酷い話でござる」
数之進は敢えて口にした。胸が痛むどころではない、できることなら時代を遡って、前殿に改易を命じたいほどだった。だが、卯十郎を慮って、耐えた。
「忠道様の身代わり役となった忠信様が、上屋敷から出奔された理由をお訊ねいたしたく思います」
気持ちを切り替える。
「身の安全をはかるため、さらに、それがしが本当に幕府御算用者であるかどうかを確かめ

るため、そして、これは忠信様のお考えやもしれませぬが、此度の騒ぎを止めるためのように思いましたが、いかがでござりましょうか」

「いかにも仰せのとおりでござる。戸村三之助も最後の理由のために、生田殿に会うことを望み申した。我が主、三之助にとっての主は篠田殿でござるが、我が主は仇討ちなど望まないと言いまして」

「ひとつ、気になったのは、『余が父上の子ではないという噂じゃ』と洩らされたことです。敢えて申しますが、忠信様のお父上は篠田殿。なにゆえ、かような話をされたのかわかりかねております」

「忠道様に対する噂が流れておりましてな。忠信様は、忠道様より相談されたご様子。真偽のほどを確かめてほしいと、忠道様より頼まれたのではないかと存じます」

「ご兄弟は仲がよろしいのですか」

「は。忠道様はよく宴を催されるのですが、必ず二人の兄君を招かれまする」

躊躇いのない返事に、真実が表れていた。それだけでも卯十郎と清照院は、救われるのではないだろうか。

「『石の誓い』については、いかがでございますか。篠田殿の言葉を受けて、かたがたは、立ちあがることを決めたのですか」

仇討ちは認められないが、六人衆はそれぞれに卯十郎への想いがあったはず。確認するような問いかけになっていた。

「いかにも返せぬ恩義を受け申した。左馬助殿は、『わしは富十郎を、二度、殺してしもうた』と言うておりました次第」

一度目は松本富十郎の心、二度目は富十郎の身体。

「後悔の念が強すぎたがゆえでござる。できることならば、罪を減じていただきたく思いまする」

増右衛門は深々と頭をさげた。謎はだいたいあきらかにされたが、まだわからない部分がある。数之進は疑問点を問いかけに変えた。

「われらを襲った過日の賊については、いかがでございましょうか」

一歩、踏み込んだ問いかけを発する。

「一度目のとき、鳥海様に知らせたのは」

「戸村三之助にござる」

増右衛門が答えて、続けた。

「彼の者は、篠田殿の右腕として仕えておりました。二度目のとき、これは紀伊家の留守居役がらみの襲撃騒動のことでござるが、あのときは、生田殿に是非、逢わせたい者がいたと

か。罠を仕掛けたわけではござらぬ」
「どなたでござりますか」
「篠田殿のご嫡男でござる。愛妾との間に生まれた男子である由。流し男と言えば、お分かりになると言うており申したが」
「あのときの」
思わず一角と顔を見合わせた。そう、罠を仕掛けたのは戸村三之助ではない。六人衆が関与しているのは、間違いないだろうが、今更、口にしても詮無いことと諦めた。
「血腥い騒ぎになり申したが、ひとつ、思わぬ出逢いがござった。田中伝次郎に扮しておられた忠道様が、あの騒ぎの折、新見殿の姫御を見初めたのでござる」
「では」
「は。当家と新見家の見合いは、予定どおり執り行うつもりでござる。また忠道様に扮していた忠信様におかれましても、佐都のお方様を、ご正室に迎え入れることと相成り申した。お方様をそれがしの養女にいたしますれば、なんの問題もないことと存じますゆえ」
凄惨な騒動が、あらたな祝い事を運んで来たのは、幸いと言うしかない。
「篠田殿は、当家の羅針盤でござった」
増右衛門は真剣な眸を向けた。

「勘定方の者はむろんのこと、家中のほとんどは、なんらかの恩義を感じておりまする。はたして、篠田殿が抜けた穴を埋められるかどうか。われらは一丸となって、水原家を守り立てる覚悟でござる」

偽りのない言葉が、せめてもの慰めかもしれない。

鯨商人を欠いた再生の道は、増右衛門が考えるよりずっと険しいものになるだろう。だが、卯十郎の遺産は金だけではない。家中の者たちは、卯十郎の『心』を受け継いでいる。百人の勘定方が、水原家の核となることを、数之進は心から祈っていた。

六

ひと月後。

文化八年（一八一一）十一月吉日。

生田三紗と杉崎春馬の祝言が、室町二丁目の〈北川〉で執り行われようとしていた。後見役を買って出た伊兵衛は、数日前から準備に余念がない。能州から長女の伊智もやって来たのだが――。

「申し訳ありませぬ」

数之進は、すでに四半刻（三十分）ほど畳に額をすりつけている。場所は住み慣れた本材

木町の四兵衛店で、三紗は向かいの家で支度をしているのだった。一角も隣に座して、平伏している。

「三紗が武家を捨て、町人になるという話は、昨日、初めて聞きました。ゆえに祝言も伊兵衛さんの家で行うとか。鳥海様がお屋敷を使うてもよいと仰せになられたというに、なにゆえ、三紗は町人になるなどと」

語尾が曖昧に消えた。先刻から同じ話を繰り返していることに気づいたのだろう。それで、と、口調を変えた。

「花婿となる杉崎様は、杉崎家の三男であると伺いましたが、すべてご承知なのですか」

「は。杉崎殿は、姉様が思うようにさせてやりたいと言うておられました。ひどい怪我を負われましたゆえ、身体も以前のようには動かぬ、踏ん切りをつけるよい機会やもしれぬ、とも」

「三紗殿は商いが向いているように思えまする」

隣で一角が後押しする。むろん平伏したままだった。

「それがしの父、伊兵衛も、太鼓判を押しており申す。まずは小店で総菜屋を開き、そこから見世を広げていく考えである由。うまくいくのではないかと存じます」

「そうかもしれませんが」

ふう、と、伊智は吐息をついた。

「わたくしが知らぬ間に、冨美と三紗は江戸の生き方を身に付けた様子。それが少し寂しゅう思えます。ひと言、相談してくれればよかったのに」

「姉上様にお知らせするのが遅れましたこと、かさねてお詫び申しあげます。なにしろ急な話でござりましたゆえ」

「わかりました」

諦めたように言った。

「え？」

窺うように、数之進は目をあげる。伊智は笑っていた。

「そなたの勝ちですよ。わたくしに文を出す時期も、練りに練って考えたのでしょう。冨美たち同様、そなたの智恵も江戸で磨かれたようですね」

「いえ、練りに練るなど、かような真似は」

「もうよい。杉崎様は三紗より五歳も年下ですが、あの三紗が、惚れて惚れて惚れぬいた殿御。大食いの悪癖もおさまるやもしれませぬ。さて」

と、伊智は立ちあがる。

「そろそろ三紗の支度が調うたやもしれませぬ。わずかな距離ですが、花嫁行列と参りまし

ようか」
「これぞ、まさに狐の嫁入りですな。天気雨（きつねのよめいり）にならねばよいですが」
「一角（たしな）」
窘めると、友は慌ててまた頭をさげた。
「ご無礼つかまつりました。よりにもよって、三紗殿のことを狐などと」
「そのとおりではありませんか」
くすっと伊智は微笑（ほほえ）んだ。
「天気雨にならねばよいと、わたくしも思います。〈越後屋〉さんで仕立てた自慢の白無垢が、台無しになりますゆえ」
土間に降りた長姉に、数之進はもう一度、頭をさげる。
「宜しくお願いいたします」
「次はそなたの番ですね、数之進」
言い置いて、伊智は出て行った。戸を開けたとたん、向かいの家の賑わいが飛びこんでくる。多恵妹弟も訪れているため、家の路地は人であふれていた。伊智が戸を閉めると、ほんのいっときではあるものの、忙しげな空気が遮断された。
「疲れた」

数之進は足を投げ出した。
「おれもじゃ」
右に倣えで、一角も膝をくずした。
「思うに、あれだな。女子というのは、冨美殿や三紗殿のように、ちとぬけたところがある方がよいのやもしれぬ」
「うむ。能州にいた頃は、姉上様の生真面目な暮らしぶりを崇拝していたのだが、馴れとはおそろしいものよ。いつの間にか、姉上たちのあれが平安をもたらすようになっていたとは」
「苦労性と貧乏性の業が疼く方が、気楽でよいか」
「然り」
答えて、笑い合った。ようやく迎えられた三紗の祝言の日。弟ではあるが、父のような心境になっている。まずはよかったと思いつつ、ふと不幸な夫婦のことを考えていた。
「田辺新九郎は、どこに行ったのであろうな」
水原家下屋敷の襲撃に、姿を見せなかったのが気になってしまい、数之進は新九郎の家を訪ねていた。が、すでに引っ越したあとだったのである。
「業が疼くと思い出すあたりに、田辺新九郎の生き様が表れておるように思えなくもない。

江戸にいても仕方がないと思い、離れることにしたのであろう。やれやれじゃ。あの執念深さは、三紗殿に通じるものだったゆえ」

悪態には、一角ならではの親しみがこめられていた。新九郎に、ある種の親しさを覚えるようになっていたのは、数之進だけではないのかもしれない。

「無事でいてくれればよいが」

「おれは田辺新九郎よりも、鯨商人の方が哀れでならぬ。山村増右衛門が別れ際に言うたではないか」

一度だけでござるが、篠田殿が言うており申した。金はうなるほどある。なれど、たったひとつだけ買えないものがある、と。

「せつないな」

「おまえも重ね合わせずにはいられまい。五瀬様はどうしておられるか、ご息災であろうか、とな。どうじゃ。一度、こっそり覗きに行くというのは」

「よせ。わたしには、お世津さんがいる。裏切るような真似はできぬ」

「真顔で答えるな。ま、おまえらしいと言えなくもないが」

それはともかく、と、一角は話を変えた。

「おれは幾つかわからぬことがある。篠田卯十郎が二百両の小判を持ち、大坂で商いを始め

たときのことじゃ。なにゆえ、最初から小店を営まなかったのであろうな。二百両あれば、すぐに見世を始められたであろうに」

「これはわたしの考えだが、いろいろな商いを覚えたかったのではあるまいか」

「なるほど。確かに昔の苦労が活きたと言えるな。では、もうひとつじゃ。派手に小判を撒き散らして、水原家ここにありと示したのは」

「一大名家として、独立をはたさんがためだろう。下屋敷については、前土佐守様のご遺志を継いだのではあるまいか。才がありすぎるのも考えものよ。あのまま突き進んでいたら、本当に幕府を買うていたやもしれぬ」

その答えに、呼びかけが重なる。

「失礼いたします」

戸を開けたのは、戸村三之助だった。たいせつそうに風呂敷包みを抱えている。

「おお、三之助さんか。過日はすまぬ。一面識もない姉のために、たいそうな祝いの品を届けていただき、恐悦至極よ。ささ、あがられるがよい」

「今、茶の支度をする」

一角が土間に降りて、三之助を招き入れた。

「どうぞ、おかまいなく。お取り込み中でありますのは、重々、承知いたしております。旦

那様よりお預かりしていたものをお渡ししようと思いまして、参りました。祝いの日にお渡しするのが、一番、よいのではないかと思いまして」

恐縮しながら、座敷にあがって来た。篠田卯十郎の番頭は、主亡きあとも立派に代役を務めているようだ。水原家の泉府方はなくなったが、卯十郎の嫡男を守り立てて、江戸中に散らばる見世の総元締めの役目を担っていくに違いない。

「大変だろうが、頑張ってくれ」

数之進は、ありきたりの励ましか言えなかった。

「わたしにできることがあれば、なんでも言うてくれ。喜んで力添えするつもりだ」

「千両智恵が後ろに控えているとなれば、なにも恐れるものはございません。ありがたいお言葉を賜りまして、千人力にございます」

話しながら三之助は、すぐに風呂敷包みを広げた。中から分厚い文書を取り出して、数之進に渡した。

「これは？」

「自分になにかあったときには、生田様にお渡しせよと、申しつかっておりました。旦那様が折にふれて纏められた覚書のようなものでございます」

「篠田殿が」

表紙の題名を見て、胸が熱くなる。こみあげてくるものがあった。茶を運んで来た一角も、驚きに目を瞠っている。

「なぜ、篠田殿はこれを記されたのであろうな」

数之進の問いかけに、今も主に忠実な男は答えた。

「おもしろい男が現れた、と、愉しげに仰いまして。旦那様は、その、ご公儀にも伝手がございましたので、噂を耳にしたのではないかと存じます。無私の心と千両智恵は、自分にはとうてい真似できぬもの。残さねばならぬと申されました」

「噂の出所は、妖怪爺あたりであろうさ」

一角の口調が軽すぎたのか、三之助は急に真面目な顔になる。

「旦那様は常々、言うておられました。『生田様こそ、これからの世に必要なお方。民の羅針盤になるお方よ』と」

「民の羅針盤」

懐には、その羅針盤も入っている。

「篠田殿は……われらを見守っていてくれたのか」

「はい」

「もしや」

ふと閃いた。

「三之助さんが、最初、甘楽郡の庄屋を装ったのは、知っていたからか。一番はじめに潜入した先が、甘楽郡に領地を持つ七日市藩であることを」

七日市藩は盟友の一角と出逢った藩。ひときわ思い入れが深いのは言うまでもない。三之助は頷いた。

「存じておりました。てまえも手が空きましたときには、旦那様のお手伝いをいたしましたので。もしかしたら、気づいてくださるかもしれぬと思い、甘楽郡の庄屋を名乗った次第です」

「そう、か」

篠田殿。

思わず文書を抱きしめた。

逢いたかった。一度でいい、逢って話をしたかった。夜を徹して、政や商いの話をしてみたかった。

間違いなく、もうひとりの盟友になったであろう男は、もういない。隣に座した一角が、肩に手を置いた。その温もりに涙があふれて、止まらなくなる。

「数之進。三紗のお支度が調いましたよ」

伊智が戸の向こうから呼びかけた。
「は、はい」
数之進は涙を拭い、懐に卯十郎の文書を入れる。
文書の表紙には、こう記されていた。
御算用日記。
道は明日へと続いている。

あとがき

十三巻目にして、初めての「あとがき」となりました。

この本が出るのは、あの東日本大震災から約二か月が過ぎた頃になります。復興は進んでいるだろうか、原発はどうなっているだろう。そんな思いを胸にしながら、これをしたためています。

地産地消、自給自足。

江戸時代には、ごくあたりまえのようにしていたことを、取り入れていく必要があると思います。もはや日本は江戸のとき同様、鎖国状態のようなもの。

メードインジャパンは安全・安心の代名詞だったのに、それらもまた失われました。諸外国では、日本から水や食べ物を輸入することを、当分の間、敬遠するでしょう。でも、まだ日本には職人の技がある。私はそこに希望の光を見出しています。

昔から「職人になれれば、贅沢はできなくても、食べていくには困らない」と言われてき

ました。もちろん技を会得するまでには、厳しい修行と、気の遠くなるような時が必要かもしれません。どの世界も「極める」のは至難の業、私も常に自問自答しながらの日々を送っていますから。

徳川家の八代将軍吉宗公は、当初、輸入するしかなかった絹織物や朝鮮人参を、国産化することに尽力しました。今でも朝鮮人参は、輸入物にはなかなか叶わないとか。それでもこの狭い日本の中で、国産化を実現させたのは凄いことだと思いました。吉宗公が名君であるか否かについては、それぞれに意見があるかもしれません。が、この輸入するしかなかった品物を、かなり早い時点で国産化した点に関しては、評価できるのではないでしょうか。

日本の技は素晴らしいと思います。できるだけ多くの人々に会得してもらいたいと、せつに願います。職業訓練校では、パソコンばかりではなく、昔ながらの技も積極的に教えてほしいと思うのですが……正直、詳しく調べていませんので、現状がどうなのかまではわかりません。これはまた詳しい話がわかり次第、お伝えしていきたいと思います。

『御算用日記』はまだまだ続きます。前述したような日本の優れた技を文中で紹介しつつ、各地の特産品も広めていきたい。一昨年だったでしょうか。ふと思いつき、そのときから担当の方にもお願いして、少しずつ資料を揃えてきました。どんな『御算用日記』が生まれるのか私自身も楽しみでなりません。

無私の心と千両智恵。

数之進の武器は、この二つのみ。盟友の早乙女一角と力を合わせて、どんな力を発揮するのか。読者とともに見守っていきたいと思います。

最後になりましたが、被災地の一日も早い復興を心よりお祈り申し上げます。

平成二十三年四月三日　自宅にて

〈主な参考文献〉

『江戸時代　人づくり風土記（30）和歌山』農文協
『江戸時代　人づくり風土記（19）山梨』農文協
『徳川御三家　付家老の研究』小山譽城　清文堂
『鯨取り絵物語』中園成生・安永浩　弦書房
『鯨に挑む町（熊野の太地）』熊野太地浦捕鯨史編纂委員会　平凡社
『大名やりくり帖（金持大名・貧乏大名）』松好貞夫　新人物往来社
『百万石と一百姓（学農村松標左衛門の生涯）』清水隆久　農文協
『それでも江戸は鎖国だったのか（オランダ宿　日本橋長崎屋）』片桐一男　吉川弘文館
『鉄砲を手放さなかった百姓たち（刀狩りから幕末まで）』武井弘一　朝日新聞出版
『利休入門』木村宗慎　新潮社
『名物茶入の物語』矢野環　淡交社
『（江戸庶民の食風景）江戸の台所』人文社
「現代農業（２０１０年12月号から２０１１年２月号まで）」農文協
「別冊歴史読本・江戸名物家臣列伝（わが藩にこの人あり）」新人物往来社

『江戸のお裁き（驚きの法律と裁判）』河合敦　角川ｏｎｅテーマ21
「歴史読本（２００９年1月号）　日本の暦」　新人物往来社
『江戸の御触書（生類憐みの令から人相書まで）』楠木誠一郎　グラフ社
『絵が語る知らなかった江戸の暮らし（庶民の巻）』本田豊　遊子館
『江戸の温泉学』松田忠徳　新潮選書

光文社文庫

文庫書下ろし／長編時代小説
石に匪ず　御算用日記
著者　六道慧

2011年5月20日　初版1刷発行

発行者　駒井稔
印刷　堀内印刷
製本　榎本製本

発行所　株式会社 光文社
〒112-8011　東京都文京区音羽1-16-6
電話（03）5395-8149　編集部
8113　書籍販売部
8125　業務部

© Kei Rikudō 2011
落丁本・乱丁本は業務部にご連絡くだされば、お取替えいたします。
ISBN978-4-334-74950-7　Printed in Japan

R本書の全部または一部を無断で複写複製（コピー）することは、著作権法上での例外を除き、禁じられています。本書からの複写を希望される場合は、日本複写権センター（03-3401-2382）にご連絡ください。

組版　萩原印刷

お願い　光文社文庫をお読みになって、いかがでございましたか。「読後の感想」を編集部あてに、ぜひお送りください。

このほか光文社文庫では、どんな本をお読みになりましたか。これから、どういう本をご希望ですか。

どの本も、誤植がないようつとめていますが、もしお気づきの点がございましたら、お教えください。ご職業、ご年齢などもお書きそえいただければ幸いです。当社の規定により本来の目的以外に使用せず、大切に扱わせていただきます。

光文社文庫編集部

本書の電子化は私的使用に限り、著作権法上認められています。ただし代行業者等の第三者による電子データ化及び電子書籍化は、いかなる場合も認められておりません。

「清張文学」の精髄がここにある!

松本清張短編全集 全11巻

生誕百年記念

01 西郷札
西郷札　くるま宿　或る「小倉日記」伝　火の記憶
啾々吟　戦国権謀　白梅の香　情死傍観

02 青のある断層
青のある断層　赤いくじ　権妻　梟示抄　酒井の刃傷
面貌　山師　特技

03 張込み
張込み　腹中の敵　菊枕　断碑　石の骨　父系の指
五十四万石の嘘　佐渡流人行

04 殺意
殺意　白い闇　厩　箱根心中　疵　通訳　柳生一族　笛壺

05 声
声　顔　恋情　栄落不測　尊厳　陰謀将軍

06 青春の彷徨
喪失　市長死す　青春の彷徨　弱味　ひとりの武将
捜査圏外の条件　地方紙を買う女　廃物　運慶

07 鬼畜
なぜ「星図」が開いていたか　反射　破談変異　点
甲府在番　怖妻の棺　鬼畜

08 遠くからの声
遠くからの声　カルネアデスの舟板　左の腕　いびき
一年半待て　写楽　秀頼走路　恐喝者

09 誤差
装飾評伝　氷雨　誤差　紙の牙　発作
真贋の森　千利休

10 空白の意匠
空白の意匠　潜在光景　剝製　駅路　厭戦
支払い過ぎた縁談　愛と空白の共謀　老春

11 共犯者
共犯者　部分　小さな旅館　鴉　万葉翡翠　偶数
距離の女囚　典雅な姉弟

光文社文庫

日本ペンクラブ編 名作アンソロジー

五木寛之選 こころの羅針盤（コンパス）

西村京太郎（ほか） 殺意を運ぶ列車

唯川　恵選 こんなにも恋はせつない〈恋愛小説アンソロジー〉

江國香織選 ただならぬ午睡〈恋愛小説アンソロジー〉

小池真理子
藤田宜永選 甘やかな祝祭〈恋愛小説アンソロジー〉

川上弘美選 感じて。息づかいを。〈恋愛小説アンソロジー〉

西村京太郎選 鉄路に咲く物語〈鉄道小説アンソロジー〉

宮部みゆき選 撫子（なでしこ）が斬る〈女性作家捕物帳アンソロジー〉

石田衣良選 男の涙 女の涙〈せつない小説アンソロジー〉

浅田次郎選 人恋しい雨の夜に〈せつない小説アンソロジー〉

日本ペンクラブ編 犬にどこまで日本語が理解できるか

日本ペンクラブ編 わたし、猫語（ねこご）がわかるのよ

21世紀に甦る推理文学の源流！

江戸川乱歩全集

全30巻

新保博久　山前　譲 監修

❶屋根裏の散歩者
❷パノラマ島綺譚
❸陰獣
❹孤島の鬼
❺押絵と旅する男
❻魔術師
❼黄金仮面
❽目羅博士の不思議な犯罪
❾黒蜥蜴
❿大暗室
⓫緑衣の鬼
⓬悪魔の紋章
⓭地獄の道化師
⓮新宝島
⓯三角館の恐怖
⓰透明怪人
⓱化人幻戯
⓲月と手袋
⓳十字路
⓴堀越捜査一課長殿
㉑ふしぎな人
㉒ぺてん師と空気男
㉓怪人と少年探偵
㉔悪人志願
㉕鬼の言葉
㉖幻影城
㉗続・幻影城
㉘探偵小説四十年(上)
㉙探偵小説四十年(下)
㉚わが夢と真実

光文社文庫

お助け侍・数之進の千両智恵が冴え渡る！

六道慧

時代人情小説に新風を吹き込む
大好評「御算用日記」シリーズ

文庫書下ろし

青嵐吹く
天地に愧じず
まことの花
流星のごとく
春風を斬る

月を流さず
一鳳を得る
径に由らず
星星の火
護国の剣

駑馬十駕
甚を去る
石に匪ず

光文社文庫

ISBN978-4-334-74950-7

C0193 ¥648E

9784334749507

1920193006483

定価（本体648円＋税）

石に匪ず　御算用日記　六道慧

紀伊国水原家は十年前に二万両あった借財を完済。今では五万坪の下屋敷を構え、贅沢を奨励する質素倹約禁止令を藩士に申し渡している。莫大な資産を得た秘密を探るために、数之進と一角は水原家に潜入。家老格である篠田卯十郎の商才によるものだと突き止めるが……。なかなか姿を現さない「鯨商人」の謎に迫る！　数之進の「千両智恵」が冴える大好評シリーズ！